
まさかの転生物語

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まさかの転生物語

【Nコード】

N8690X

【作者名】

暁

【あらすじ】

犯罪に巻き込まれ、大事なものを守るために自らを犠牲にし、死んだ主人公。

天命より前に命を落としたため、
彼女は这个世界への転生が叶わなかった。

そうして転生したのは、異世界。
…………ドラゴンに転生したようです。

大きなドラゴンであるお父さんやお母さん、
お兄ちゃん、お姉ちゃんに囲まれて、

まだまだ小さなドラゴンの主人公は突き進みます。

なお、残酷描写は保険です。

最初のほうは残酷描写を出すつもりはないですが、
おそらく、途中から出てきますので。

今後、更新は毎週

金曜日か土曜日あたりになると思います。

あの日を想う（前書き）

すごい気まぐれに書いてみました。

人外生物が主人公の連載小説書いてみたかったんですね。

あの日を想う

守らなくては。この子達だけは、守らなければ。
私はどうなってもいい。死んだってかまわない。
だけど。だけどこの子達だけは……。

だから、逃げなさい。私のことなんて放っておいて。
早く、安全な場所まで行きなさい。絶対に振り向かないで。
イヤホンをはめて、まわりの音が何も聞こえないように。

聞いてはいけない。聞いたら狂ってしまうかもしれない。
だから、何も聞かずに逃げなさい。

——そして、ここには戻ってくるな。

私は、あなたたちさえ無事ならばそれでいい。あなたたちさえ日常に戻る事が出来たなら。

ねえ、どうして戻ってきたの？ どうして泣いているの？
暗闇の中で、ふと思う。

あの子達が泣いている。悲しそうに、辛そうに。

——泣かないで。
重たい腕を必死で動かす。重たい瞼を必死で持ち上げる。
そして、口を動かす。

「……………に、泣いて……………の、ちびっこ……………」

「っ！ 姉ちゃん！」

「え！？ 姉ちゃん！！」

「この、泣き虫……おちび……ズが……」

「ちび、じゃないもん！」

おいおい、泣かないで欲しいのに、どんどんと涙が溢れてるよ。これは、動かしづらい私の手じゃ、拭いきれないな。

「い……から、泣くな……。……げろ……」

泣かないで早く逃げて。早く、安全なところへ。

私は放っておいてかまわない。だから、早く逃げなさい。

「逃げない！ お巡りさん、いるもんっ！ も、すぐ、救急車も、来るから！」

「は、犯人も、捕まった、よ！」

そか、この子達は大丈夫だね、警察がいるのなら。

でもね、おちびーズ、救急車は多分、無駄だよ。私は多分助からない。

致命傷を負うと痛みを感じないって本当なんだって、今実感してる。

——痛みを感じない。体の感覚が何も、何もないんだ。

分かるのは、傷口からどんと血が流れていく感覚、どんとと体から熱が消えていく感覚だけ。

「な……。くな……。て……。寧ろ……。笑え？」

ねえ、だから最期に笑顔を見せて？ この目に、あなたたちの笑顔を焼きついて逝かせて？

ああ、可愛い私の従妹たち。泣かないで、嘆かないで。

21年の人生は、良いものではなかったけれど、私は幸せだよ？

——だって、可愛いあなたたちを守れた。私が、あなたたちの未来を繋いだ。

私自身の未来はどうでもいい、どうせ死にたかったんだから。だけど、あなたたちの未来だけは、守りたかったんだ。

だからね、私は不幸じゃないんだよ？

ああ、目の前が少しずつ暗くなっていく。音も遠くなっていく。

あの子達が泣いてる。ずっと、ずっと泣いてる。

だけど、私の瞼に焼き付いているのは、最期に見た、あの笑顔。

涙を流しながら、それでも私の要望に応えて微笑んだ、あの笑み。

もう、何も見えない、何も聞こえない。

——深い闇に、堕ちた。

ようこそ死の世界へー！ 目を覚ましてすぐにかけられた言葉は、これでした。

死の世界。つまり私は死んだ、と。まあ、それもそうか。あれだけ殴られ、刺され、蹴られてすれば死ぬだろうね。

でも、目を瞑れば見える、あの子達の笑顔。涙を堪えて必死に微笑んだ愛らしい姿。

そんな、可愛いあの子達を守ることが出来たのだからよしとしよう、うん。

まあ、とりあえず。私は近くにいた人を捕獲し、声をかけた。

「とりあえず、いろいろと説明が欲しいです」

「はいはい！ じゃ、簡単に説明していきますねー！」

まず、ここは先ほど言ったように死の世界、死した人の集まる世界です。

普通は、天命に従い、人はこの地を訪れます。ですが、たまに天命に逆らい死した人がいるんですよ。

———あなたのように。

普通、天命を果たし死した人たちは、しばらくこの地で過ごし、輪廻の輪に戻っていきます。

ですが、あなたたちのように天命を果たさずに死した人たちは違
います。

天命を待たずに死した人たちは、この世界に転生することが出来
ない。

ですが、天命を待たずに死した人たちの中には、あなたのように
望まずして死した人、あなたたちのような人たちもいますし、自ら
死を選んだ人もいます。

その人たちを、みんな一緒に考えるわけにはいきません。

ですから、あなたたちのように望まずしてこの世界に來た人たち
には、しばらく魂を癒してもらい、異世界に転生してもらいます。

その際は、我々が絶対に幸せな生活になると保障し、そしてお助
けしましょう。

だから、あなたはしばらくお休みなさい。

今はただ、その魂を回復させるために、眠りなさい。

目覚めは最悪です(前書き)

ここでドラゴンに転生します

目覚めは最悪です

真っ暗。全部真っ暗。

その中に、ひびが入ったように、光が射す。

何だろう、そう思いながらもどんと襲ってくる睡魔に身を委ねる。

おそらく、まだ魂が回復していないのだろう、そう思いながら――

だが、その眠りは長くは続かなかった。

次にぼんやりと目を覚ますと、先ほどよりも見える光が大きくなっている。

これは何ぞ。

とりあえず、触ってみた。硬いようで、硬くなさそうで……。

これって、叩いたりすれば割れて、もっと光が入るんじゃないか？

そう思いながら、少しずつソレを叩く。

お、お！ 予想通り、少しずつそれは割れて、徐々に光が射し込んできた。

――それはいいけど、眩しいな。

そうやってしばらく叩いて、やっとソレは完全に割れ、空が見えた。

えっと、視界に大きく口を開くドラゴンが見えるんだけど、気のせいかな？

私、食べられる？ え？ もうお終い？ 早くね？

そう思っていると、大きく口を開いていたドラゴンは、私の顔を

舐めて来た。

「ぴぎゃーっ!!」

可愛くない声ですみませんね、これが地です。

とりあえず、これが夢落ちだと祈って、今は眠ることにします――

――。

うん、夢落ちじゃなかったよ。でも、今はそのドラゴンも人の姿を取っています。

目の前でドラゴンから人になられては、夢じゃないと信じざるを得なかった。とりあえず、何て言ってるかは全然分らないけどね。そして、何となく実感。私は人間ではなく、ドラゴンに転生したようです。

まだ全身をしっかりと見てないから分からないが、鱗に包まれた体や、鋭い爪、そして両親であろう二人の大きなドラゴンを見れば、自分もドラゴンだと何となく予想は出来るものです。

それにしても、この世界のドラゴン、っていうか私小さいな！ドラゴンの子供が単純に小さいだけか？ 父や母であろうドラゴンは大きかったしね。

私の普段の生活場所は、この広大な山の中、の母であろうドラゴンの人態を取ったときの頭の上だ。

まあ、ふあふあしてて、暖かくて気持ち良いんだけどさー。

まだ、この人たちが何て言ってるか全然分からないし。

でも、たくさん愛情が注がれていることだけは分かる。だって、二人とも私を見る目はいつも優しくて、私を見るときはいつだって笑顔だから。

まあ、今そんなことを考えていたって何も始まらない。とりあえず、眠たいから寝よう。

転生を認めました

4歳になりました。最近、やっとお父さんたちの言っていることが理解できるようになって来ました。

「けれど、まだ全然話すことは出来ません。何を言おうとしても、「ぴぎゃー」や、「きやるー」とか、「きゆるるー」としか発音されないのです。

——ちくしょう！

あ、体はあんまり大きくなってないよ？　だって、まだお母さんの頭の上で暮らしてるもん。殆ど。

「エーデルフィア、今日は山頂に行ってみる？」

「きゆるー！」

行くー！　本当はそう答えたいのだが、やはりまともな発音はされなかったか……。そろそろ普通に話が見たい……。――

あ、エーデルフィアってのは私の名前みたいだよ？　言葉も理解できなかった頃から、ずっとこの言葉は発せられてたからね。

「きゆる、きゆるるるるー」

「そうんなに山頂が楽しみ？　エーデルフィアは可愛い子ね」

うん、楽しみだよ。だって、山頂からはこの山がきれいに見渡せるもの。

そうして到着した山頂。そこでは早速私が思い切り叫んでいた。
やっほー！！

「きゅーっ！！！！」

あっはっは、やっぱりこんな感じにしかないか。でも、私の下でお母さんは面白そうに笑っていたよ。

「エーデルファイアったら、元気いっぱい」
「きゅる、きゅるるー」

だって、山が見渡せるから楽しいもん！ そうしていると、私たちのいる場所に、一匹のドラゴンが飛んできた。
大きな青色のドラゴン。あれ、お兄ちゃんらしいです。

「母さん、エーデルファイア」

「サーファイルス。よくここが分かったわね」

「エーデルファイアの声が聞こえたからね。エーデルファイア、母さんに隠れてないで、姿を見せておくれ？」

って言ってもね、お兄ちゃんのドラゴンの姿、大きすぎて怖いんだ。大体、人態でも十分私から見れば大きいのに。

だからせめて、人態を取って？ 怖いよう怖いよう。

「きゅー、きゅるる」

「あれ？ 俺、怯えられてる？ 何で？ 何で？ エーデルファイア、俺、怖くないって」

「……ドラゴンの姿が怖いんじゃない？ あまりにも大きいから。私たちも、ドラゴンの姿をとったら大体避けられるからね」

うん、確かにお父さんもお母さんも、ドラゴンの姿をとったらまず、逃げます。だって大きすぎて怖いもん。

私、まだまだまだまだ小さいんだよ？ お母さんの髪に隠れられ

るほど小さいんだよ？

その状態で、普通のドラゴンのカタチのお父さんやお母さんは怖いに決まってるでしょ？ ——踏み潰されそうで。

「えっと、これでいいの？」

お兄ちゃんはそう言うのと、ドラゴンから人間へと姿を変える。うん、それならオツケーです。

「きゅる」

「エーデルファイア！ ああ、相変わらず小さくて可愛い」

「きゅる、きゅるきゅるー」

お兄ちゃん。小さな体で羽を広げ、パタパタと飛んでお兄ちゃんの頭に移動する。お兄ちゃんの髪、短くてつんつんだから、お母さんの髪に隠れてるときほど気持ちよくないんだよね。

でも、優しいお兄ちゃんだから好きだよー。

ちなみに、お兄ちゃんの見た目年齢は、大体高校生くらい。実年齢は知らない。教えてもらえないし、まともに話せない今は聞けない。

でもま、どうでもいいか。みんな優しいしー？

「きゅるきゅー」

お兄ちゃん大好きー。

「あー、エーデルファイアは本当に可愛いなー」

「さ、そろそろ山を下りましょうか。サーファイルス、ドラゴンに戻って、お母さんたちを乗せて行ってくれる？ エーデルファイア、

お母さんのところに戻っておいで」
「きゅるるー！！」

お兄ちゃんが大きなドラゴンに戻るのならば、今すぐに！！と
りあえず、お母さんの髪に隠れて、大きなドラゴンの姿を見なくて
良いように丸まっておこう。

「エ、エーデルファイア……」
「きゅるー」

私はお母さんのところへ戻ると、しっかりとお母さんの髪を掴み、
落ちないようにする。

そして、私がいなくなると、お兄ちゃんはずぐにドラゴンの姿に
戻ったらしい。お母さんがその背に乗り、お兄ちゃんは飛んだ。

お兄ちゃん空飛んでるよ怖いよ。お兄ちゃん大きいよ怖いよ。

それからさほど経たずに、私たちはねぐらである洞窟へと戻った。
おとーさーん！！

「お？ お帰り、エイシェリナ、サーファイルス、エーデルファイア」

そこにいるのは見た目20代前半の赤髪の男。これ、お父さん。
名前はフォンシュベル。あ、エイシェリナって言うのはお母さんの
名前ね。お母さんも同じく、20代前半にしか見えない。ちなみに、
髪の色は青。

「きゅる、きゅるきゅーきゅー」

私はそうやってきゅるきゅる鳴きながらお父さんの頭へと移動す
る。あ、美味しそうなおい。

「美味しそうなにおいだろう？　今日はうまい肉を手に入れたからな」

そう言ってお父さんが見せるのは、美味しそうなお肉を使った料理。こんがり、いい色に焼けてるね。美味しそうだ。

そんな意味を込めてきゅるきゅる鳴くと、お父さんは嬉しそうに微笑んだ。

「うむ、エーデルフィアがそう言うならば、今日の料理は中々のものだな」

「本当に美味しそうなにおい。ね、フォンシュベル、みんなを呼んできても大丈夫？」

「ああ、みんな散らばってるだろうが、頼んだぞ。エーデルフィアはどうする？　お母さんと一緒にみんなを呼びに行くか？　お父さんというのか？」

「きゅ」

お父さんという。そう言う意味を込めて、お父さんの髪を掴んだ。お父さんは微笑む。

「よし、お父さんと一緒にいるんだな。あー、エーデルフィアは可愛すぎだ」

「きゅっきゅー」

お父さん好きー。ドラゴンの姿さえとらなければ、ね。とりあえず、お母さんたちが戻ってくるまではお父さんに甘えていようっと。

「ん？　エーデルフィア、羽が汚れてるぞ？　ちょっと待ってなさい」

その後、自分の頭から私をとり、抱き上げたお父さんは告げる。
いつ汚れたんだろう？

それから濡らした布を持ってきたお父さんは、優しく私の羽を拭いてくれた。はわわ、気持ちいいよ……。気持ちよすぎて、寝ちゃいそう……。

「うーん、落ちないなあ。……洗うか？」

え！？

「中々落ちないし、汚れたままだと染み付いて取れなくなりそうだから、洗おう。な？」

はい、イヤです。人間の頃はお風呂は好きだったけど、この小さな体でお風呂はおぼれそうで怖いです！

そう言いたいのが、言えない。お父さんはその間にも、私のお風呂の用意をしていたよ……。私をテーブルの上に置いて。

少しずつ、逃げようかな。……うん、テーブルの下を見ると怖い。高い。でも、逃げなくちゃ……。

落ちた。うまく羽を広げ切れなくて、落ちちゃった。

「エーデルファイア！ 何をしているんだ、危ないだろう」

「きゅー」

あわわ、お父さんが怖いよお。思いつきりテーブルから落っこちたからね。思いつきり体打っちゃったからね。痛いよ。

「きゅい、きゅーくるるる」

「ああもう、痛かっただろう？　まだ小さいんだから無理をするんじゃない」

「きゅー」

ごめんなさい、お父さん。

「ちゃんと反省したか？　なら、お風呂に入ろうか。お風呂に入れば、気持ちよくて痛いのも忘れられるぞ？」

「きゅー！？」

なぬ！？　お風呂から逃げるために落ちて、結局お風呂に入らなくてはならないのか！　で、でも痛くなくなるなら……。怖いけど。あ、でもお湯に浸かってる間はあつたかくて気持ちいいなあ。

でも、上からお湯かけないで！　上からお湯をかけられると怖い！

「きゅー！　きゅきゅー！」

上からかけられるのは怖いって！　怖いんだって！

「よし、きれいになってるな。どうするエーデルファイア？　もう少しお湯に浸かっておくか？」

「きゅー！」

浸かっておく！　そんな意味を込めて鳴く。だって、温かくて気持ち良いしさ。しかも、さっきの恐怖と気持ちよさで、痛いものどっか行っちゃったしね。

「ただいまー。フォンシュベル、エーデルファイア」

「きゅい！」

お母さんとお兄ちゃん、そしてほかのお兄ちゃん、お姉ちゃんたちが帰って来た。私は急いでお湯から抜け出し、飛んでお姉ちゃんたちの下へ向かう。

「わわ！ お風呂入ってたんだね、びしょびしょ。ほら、まずは体拭こうね」

これを言うのは一番上のお兄ちゃん、カーヴァンキス。そして、私が飛びついたのはその妹、お姉ちゃんのオースティアだ。

あ、もちろん二人とも人態取ってるよ？ ドラゴンの姿だと私が寄って来ないから、逃げるから。

乾いた布で私の体に、鱗を伝う水をきれいに拭ってくれるカーヴお兄ちゃんとティアお姉ちゃん。

その後は、みなでご飯だ。みんなは手づかみか、スプーンやフォークっぽいもので食べているが、私はまだこの手で上手に掴んで食べられないので、そのまま皿に盛られた料理にかぶりつく。

まあ、お父さんもソレが分かってるから、私のご飯は食べやすいものばかりと考えて作ってくれるんだよね。お父さん大好き。

はぐはぐとかぶりつく肉。肉美味しい。でも、野菜も美味しいんだよ？ ドラゴン肉食で野菜は食べないって言う勝手なイメージがあっただけに、おかずに野菜が出たときはびっくりしたけど、美味しいからそれでよし。

「旨いか？」

「きゅー！！」

「うん、美味しい」

「今度調理方法教えてくれ」

「あ、俺も」

「フォンシュベルは本当に料理好きよね。私が料理する暇がない」

あはは、お母さん、料理やめて。前、頭の上からお母さんの料理見てるとき、本当に怖かったんだから。

よく分からない調味料を大量にいれるは、その辺の加減を知らないは、何かを焼けば絶対に焦がすはで。

確かあの時は、お兄ちゃんたちが帰って来た瞬間に飛びついていったんだっけ。で、お兄ちゃんたちの頭の上で丸まった。

「げ!?!? お母さん何してるのさ!?!? エーデルファイアが怯えてる!?!?」

「あら? どうしたの? お母さん怖くないでしょ?」

「……ああ、この意味不明物体のせいか。お母さん料理やめて。怖すぎ」

そのおかげでお母さん、よっぽどのことがない限り料理をしなくなりました。最近ではお母さんの料理を避けるために、サーファお兄ちゃんやカーヴお兄ちゃんが料理を覚えるようになった。

おかげで、あの黒魔術的な料理を見ることは無くなったよ、安心。

「美味しかったー。おとーさんごちそうさま」

「きゅきゅー」

ホント、美味しかったなあ。お父さんのご飯は美味しいから好きだな。

「さ、ご飯も食べたし、エーデルファイアはそろそろ寝なくちゃね。いっぱい食べていっぱい寝て、大きくなろうね?」

「きゅー!」

大きくなるなら寝る！ いっぱい食べていっぱい寝る！
そうして私専用の小さなベッドに飛んで下りた私は、そこに置かれたやわらかい布の上で、きれいに体を丸める。気持ちいいー。
よし、眠たくなった、おやすみなさい。

狩りに行きましょう

10歳になりました。やっと日常生活で困らないくらいに話せるようになりました。いやいや、お父さんたちにはかなり苦勞をさせたなあ。私が中々話せないから。

でもまだ、やっぱり体は小さいんだよねえ。未だに私の生活の場のメインはお母さんの頭の上だからね。

でもいいの、楽しいから。私の考えてることが、やっと伝えられるようになって嬉しいから。

「エーデルファイア、今日は何が知りたい？ 俺たちが何でも教えてあげるよ」

「んとね、そうやって人間の姿をとる方法が知りたい！」

ちなみに、しゃべれるようになってからの私は、とにかく質問攻めだ。お父さんに聞き、お母さんに聞き、お兄ちゃん、お姉ちゃんに尋ねまくりだ。

あれはどうなってるの？ あれはどうしてああなるの？ どうして？ どうして？

小さな子供特有の興味の持ち方で、毎日を質問と回答の日々になっている。

「エーデルファイアが人間の姿を取るのは、まだまだ無理だよ？ これは100を超えたあたりから、自然に分かってくるものだし」
「そーなの？ うー、残念ー」

人間の姿を取れるのならば、練習してでも人の姿になりたかったのにな。……でも、今の私が人になったら、何歳くらいに見えるんだろ？ 幼児？ 小学生？ どちらもイヤだわー。

でもまあ、今はまだちびちびドラゴンでいいや。そのほうがお母さんの髪に隠られるからね。

「ほら、おいでエーデルファイア」

そうしてお母さんに呼ばれた私はお母さんの髪の中に移動する。パタパタ、羽を動かして移動した。

お母さんの髪の中って落ち着くんだよなー。小さい頃からずっとここばかりだからねー、あはは。

「ちょ、お母さんばかりエーデルファイアと一緒にはずるいつて。エーデルファイアおいで。一緒に狩りに行こう？」

「きゅ!？」

あ、しまった。つい普通に鳴いちゃった。でも、狩りは行きたい！
行きたいよ！

「ほーら、行きたいならおいで。外に出て、俺の背中に乗って」

それと、お兄ちゃんたちのドラゴンの姿もやっと怖くなくなったよ。お父さんたちはまだ大きすぎて怖いんだけどね。

その後、外に出たカーヴお兄ちゃんがドラゴンの姿を取り、その上にお兄ちゃんたちが人態のまま乗り込む。そして私は、お姉ちゃんの頭の上だ。

そうして私たちが乗り込むと、カーヴお兄ちゃんは大きな羽を広げ飛び立つ。おお、地面がよく見える。

「エーデルファイア、危ないから身を乗り出したらダメだよ」

「って、言ってるそばから飛ばされそうだよ。エーデルファイア、ち

よっと抱き寄せるよ」

「きゅ、きゅきゅ……」

身を乗り出して下を見ていた私。その結果、飛ばされかけたらしい。サーファお兄ちゃんが私を抱き寄せてくれた。うん、これで飛ばされないね。

抱き寄せた後のサーファお兄ちゃんが真剣な目で注意してくるから、つつい普通に返事せずに鳴いちゃったじゃんか。

「怒ってないから顔を見せて？ 大丈夫だから」

「きゅー」

あわわ、本当に怒ってない？ 怒ってない？ 怖いよ。怖いと、どうしても普通に話せずに鳴き声をあげちゃうんだよね。

「怒ってないって。だからね？ ほら出ておいで」

「きゅきゅー？」

本当？ そう尋ねたいのだが、話せなかった。鳴き声で尋ねることとなるが、サーファお兄ちゃんはあると理解してくれた。

「怒ってないよ。でも、今度からは気をつけてね？」

「きゅ！」

なら、大丈夫、かな？ でもまだ怖くて話せないんだけどね。でも、もう少ししたら恐怖も消えて、話せるようになる、と思う。

そうしてサーファお兄ちゃんに抱き寄せられたままではばらく飛ぶと、いつも狩場になっている場所にたどり着いた。

「さ、さっさと下りてくれ。俺も人態を取る」

そうしてカーヴお兄ちゃんも人態を取ると、獲物探しの時間だ。とりあえず、私はお姉ちゃんの頭の上だが。

「エーデルファイアはここ、お姉ちゃんの頭の上。危ないから勝手に動いたらダメだからね」

「うん！」

お姉ちゃんから離れると危なくない？ 私、お姉ちゃんたちの使う魔法？ 魔術？ まだ全然使えないんだから。

「お、いたいた。ティア、エーデルファイアを頼むぞ。サーファ、行くか」

「ん。エーデルファイア、何があっても、絶対に、ティア姉から離れるんじゃないよ？」

そこまで区切りながら言わなくても。離れたら危ないから、きちんとティアお姉ちゃんと一緒にいるって。

私、たったの10年で死にたくないよ？ 前世でも21年しか生きてない、ただの若輩者だったんだから。

「よし、合図をしたら頼むぞ」

「おっけ」

「……………、GO！」

カーヴお兄ちゃんが言うと同時に、サーファお兄ちゃんが魔法だか魔術だかを放つ。威嚇ってヤツかな？

そして、獲物がそれで怯んだ瞬間にカーヴお兄ちゃんが飛び込ん

だ。おお、かつこいい。あつという間に一匹仕留めた。

「きゅ？」

つてあれ？ いきなり視界が動いた。……さっきまで私たちのいたところがお兄ちゃんの放った魔法で真っ黒けです。

そしてその真っ黒けの地面には、何かもう一匹獲物がいた。……つまり、私たちはその獲物に襲われかけていたと。それに気づいたティアお姉ちゃんが避けて、お兄ちゃんの放った魔法に焦がされたわけか。

うん、びっくりした。

「大丈夫、エーデルフィア？ いきなり動いたからびっくりしたでしょ？」

「きゅ、きゅう……」

お？ うんと答える予定が、鳴いて答えるになっちゃったぞ。相当びっくりしてたんだね、私。

「でも、大きいのが獲れたから今日はいいいのが食べられるよー」

「きゅきゅ！？」

なぬ！ 何ですと！？ いいのが食べられるのは歓迎でしょう！

「お、機嫌は戻ったみたいだね。なら、帰ろう。ほら、背に乗って」

そうしていると、いつの間にかお兄ちゃんが人態を解いて、ドラゴンの姿に戻っていた。私はしっかりとお姉ちゃんの頭の上に乗る、髪に掴まる。

それを確認したのかどうかは分からないが、お姉ちゃんもドラゴ

ンの姿となったカーヴお兄ちゃんの背に乗った。

うふふ、帰ったときのお父さんの反応が楽しみだなあ。

「おお！ いいのを捕まえてきたな。今日のご馳走だな」

帰って、獲物を見せたときのお父さんはすごかったよ。目を輝かせてお兄ちゃんから獲物を受け取ってた。

今日は本当にご飯が楽しみだ。

そして、帰って来た私、現在お母さんに捕まっています。

「お帰りなさい、エーデルファイア」

「お母さん、私たちには？」

「お帰りなさい、エーデルファイア」

おお、お帰りの挨拶が私限定。つまり、これはこっちに来いと、そういうことだね。

「きゅっ」

んちよ、よいしょ。羽を広げてせっせと飛び、お母さんの下へ向かう。

「お帰りなさい、エーデルファイア。あなたたちもね、サーファイアス、オースティア、カーヴァンキス」

「おかーさんただいまー」

「エーデルファイア、怪我は無い？ 大丈夫？」

「大丈夫だよー、お兄ちゃんたちが守ってくれるもん」

だから、大丈夫だって！　そんなに強く抱きしめないで！！　痛い、痛いから！　痛

「きゅ、きゅきゅるー！！！」

咄嗟のときは普通に話せないから、それで悟って離して！

「お母さん、エーデルフィア、痛がってない？」
「きゅ！」

分かってくれた！　助けてお兄ちゃん、お姉ちゃん！

「あら？　大丈夫でしょ？」

「きゅ……きゅい……」

最早話す余裕もない時点で気づいてもらえるかな？　お母さん。
痛い痛い痛い痛い痛い。

「痛がってる！　痛がってるから！！！」

「ああ、ゴメンねエーデルフィア。さ、あなたはお昼寝の時間だから、休もうね」

お昼寝？　狩りについて行ったら、絶対に帰ってきてすることはお昼寝だよ、疲れてないのに。でも了解、きっちり寝ます！　大きくなるためにもしっかりと休みます！

そうして、昔と比べて少しずつ大きくされている私専用のベッドに移動し、きれいに丸くなる。

じゃあ寝るけど、ご飯の支度が整ったら起こしてよ！　ご馳走楽しみなんだからね！

ちゃんと起こされたよ。って言うか、いいにおいが漂い始めてぼんやりと目を覚まし始めたら起こされた。ごはーん！

「エーデルファイア、いいにおいがしてるだろう？ ご飯だよ」
「うん！ いいにおいー！」

肉の焼けた美味しそうなにおいが漂ってるねー！ うん、ばっちり目は覚めた。

「おはよう、エーデルファイア。よく眠れた？」
「いっぱい寝たー！ お腹空いたー！」

このいいにおいには逆らえない！ 早く食べようよ。
そうして私がテーブルの定位置につくと、お父さんとお母さんが微笑み、スプーンとフォークに手をつけた。

——食事開始の合図ですね、分かります！！

いっただきまあす！！

目の前に置かれた、こんがりと焼けた肉に思い切りかぶりつく。
うん、すっごい美味しい！

だが、そのままかじるのでは、骨に付いた肉をきれいに食べきることが出来ないぞ！ それが悔しい！

が、だがね！ 私が自分できれいに食べようとしても、ドラゴンの手と爪じゃきれいには取れないのだよ！ 悔しすぎる！

「エーデルファイア、貸してごらん。きれいに取ってあげる」
「お姉ちゃん！ お願い！」

お姉ちゃんのありがたいお言葉に、私は横に座るお姉ちゃんに皿ごと肉を手渡す。きれいに取って！ きっちり食べる！

……まあ、私はドラゴンの姿だし、骨も食べるんだけど、肉は肉。骨は骨で別に味わって食べたいんだ。

「ほら、きれいに取れた。でも、骨も残さず食べなきゃダメだよ？ これも、尊い命なんだからね」

「うん！ ぜーんぶ、ありがたく、美味しく食べるよ！」

私たちは、常日頃から命を喰らって生きているのだから、それを忘れてはならない。私たちが食べているこれも、尊い命。私たち生き物は皆、命を喰らうことで、自らの命を繋げているのだから。

そうしてきれいに取ってもらった肉を食べた後は、骨だ。骨はこの両の手でしっかりと掴んで、がじがじと齧る。噛めば噛むほど味が出る。最高！

そして食後。……まだ寝ないよ！ お昼寝したもん、ご飯前に起きたばかりだもん！

「さ、エーデルフィアは………」

「寝ないよ！」

先に釘を刺すべし！

「さっき起きたばかりだから眠くない！ だから寝ないからね」

「でも、寝ないと大きくなれないよ？」

「うー！！ で、でも眠くないもん！」

「横になってるだけで、眠たくなれるかもよ？ だから寝ようね」

「や！ 眠くない！」

早く大きくはなりたいたいけど、寝れないもん！　ま、まあ前の狩りのときは帰ってきてお昼寝して、それからすぐご飯食べて、その後すぐに寝ちゃったけどね。

でも今日は眠たくない！　この間はご飯のときもうとうとしてたから寝たけどさ。

「いいから寝ようね、エーデルフィア」

「きゅっ！！」

って、いきなり持ち上げないでよお父さん！　まだ寝ないって！！

「あっはっは、相変わらず可愛い鳴き声だ。でも、成長のためには寝なくては」

くう！　可愛いとか褒めても、それでも寝ろとのたまうか！　で、でででも、ここできちんと寝れば早く大きくなって、人態を取るのも早くなるかな……。

……よし、今はベッドに丸まっておくだけ丸まっておこう。それで眠たくなればよし、眠れなければ泣き付けばよし！

結果、私はお父さんに抱えられたままでベッドまで運ばれ、下ろされた。

「ほら、いい子だから寝ようね」

むう！　仕方あるまい、眠れるかどうかは置いておいて、とりあえずベッドで丸まろうじゃないか。

人間は怖いです

きゆるっ？ そんな声で鳴きながら私は目を覚ました。結局あのまま眠れたみたいだね。

ってあれ？ まだまわり暗いね。まだ夜？ そう思いながらベッドを出て、近くで眠っているであろうお父さんたちを探す。

「きゆる？ きゆるー？」

ってあれ？ いない。もう起きてるの？ まだ暗いよ？ お父さんたちってこんな早くから起きてるの？

「きゅっ、きゅっ」

「ん？ エーデルファイア、もう起きたのかい？ 起きるにはまだ早いよ、もう一度お休み」

鳴きながらお父さんたちを探していると、案外早く見つかった。結構そばにいたよ。

「ほら、ベッドに戻ろう。しっかり寝て、大きくなろう。な？」

「きゅ、きゅー」

うう、ずっと寝てばかりだよ。でも大きくなれるって言う言葉には勝てない……。早く大きくなりたいけど、寝てばかりなのも……。

そう思っている間にも、お父さんは私専用ベッドへと運ぶ。……この籠ベッドから逃れられるのはいつの話だろうなあ。

最初から比べれば少しずつこの籠ベッドは大きくなってんだけど、どこまで大きくなるんだろ。

「いい子だから寝ようねー」

結局寝かされるのか、面白くないな。

でも、ベッドに戻って丸くなれば簡単に眠れるのが幼さ故か……。

——まいつか。

とりあえずくるっと丸まり、目を瞑る。眠れるかどうかは別として、こうしてるだけでお父さんが安心、というか何も言わなくなるならそれでいいよね。

きゅっ？ いつの間にかまた眠ってたみたいだね、びっくり。寝れないと思ってたのになあ。

あたりを見渡すと、もう明るい。よし、朝だね。これで起きてもベッドに戻されないよね。

「きゅっ、おかーさん！」

「おはよう、エーデルフィア」

「あ、起きたんだエーデルフィア。今日は何をする？」

お兄ちゃんたちもお母さんと一緒にいたんだね。今日は何を教えてくださいらおうかな。

昨日の肉が残ってるはずだから、今日は狩りには行かなくていいだろうし。だから、うーん、どうしようかな。

……！ そうだ、こうしようっと。

「食べられる草と、食べちゃいけない草の見分け方教えてー」

分かれれば、草を摘みに行くだけなら私一人でも行けるようになるからね。いつまでもお兄ちゃんたちと一緒にじゃ、効率悪いし。

「よし、ならもう少ししたらいつも草を摘みに行く場所に行こう。
そこで教えてあげるね」

「うん！」

きゅい！ 鳴きながらお礼も込めてお兄ちゃんたちの周りをふよふよと飛び回る。そんな私を見つめるお兄ちゃんたちの目は本当に優しい。

あはは、お兄ちゃんたち大好き。そう思いながら飛んでいると、不意にお母さんに捕まった。え？ 何？

「エーデルフィア、あの子達がいるから大丈夫だとは思うけど、気をつけるのよ、いい？」

「うん！ よっぼどのがあったら、お母さん呼ぶね」

多分大丈夫だと思うけど。

「何かあったら、大きな声で呼びなさいね。ドラゴンになって、エーデルフィアたちを助けに行くからね」

分かった、大きな声で呼ぶよ！ おかーさんっ！ って呼ぶからね。そのときは助けてよ。

それからしばらくして、私はドラゴンになったお兄ちゃんに乗り込み、いつも草を摘む場所へと向かう。

緑！ 緑！ 緑！ きれすぎる！ いつ見てもきれすぎるだ！

「よし、じゃあお兄ちゃんたちの食べられる草講座を開講しようか」
「うん！」

お兄ちゃん、よろしく！

「まず、これ。絶対に食べちゃダメだよ？ 食べたら死んじゃうから」

「ふえ！？」

「俺たちには大して害はないけど、エーデルフィアは小さいから、簡単にこの毒にやられる」

「こ、怖い……」

この毒にやられるのは私だけですか。くう！

「まあ、これはすぐに分かるから大丈夫だよ。ほら、ここ見て」

カーヴお兄ちゃんはそう言って、葉を裏返す。そこには黒い毛？のようなものが生えていた。

「これはこの辺の草で唯一、裏側に黒い毛のようなものが生えてるんだ。だからすぐに分かる」

な、なるほど……。それは簡単でいいかもしれない……。

「なら次。これは食べられるけど、こっちは食べられない。そっくりだから間違えないようにね」

「ん、んー？ どう違うの？ 全然分かんないよー」

そう言って見せられた草は、全く同じものにしか見えなかった。じっくり見せてもらっても、どう違うのか全く全然分からない。

お兄ちゃんたちからその草を両方とも受け取り、見比べてみる。

……あれ？ どっちが食べてもよくて、どっちがダメなんだっけ？

あれ？ あれえ？

「お兄ちゃん、どっちが食べてもいいんだっけ？」

「右に持ってるほうが食べても大丈夫なほう。左に持ってるのは、絶対に食べないように。いい？」

「はい！」

なるほど、右に持ってるほうは食べても大丈夫で、左に持ってるのは食べたらダメなのか。うん、見分けがつかない。

うーん、じっくり見ても全然分らないぞ？ お兄ちゃんたちはどうやって見分けをつけてるんだろう。

「お兄ちゃんたちはどうやって見分けをつけてるの？ 全然分らない」

「ん？ 見てもわかんないよ？ これはおいで区別するの」

説明はお姉ちゃんがくれました。におい？ におい……。

「くちやつー！」

た、食べられないほうの草のにおいが恐ろしいほどやばい！ すっごくいきさい！ ありえないにおいだ！

そうしていると、不意に私たち以外の声が耳に届いた。その瞬間、カーヴお兄ちゃんは人態を解き、ドラゴンの姿に戻って私たちを庇う。

何か話す声だね、何て言ってるのかはよく分らないんだけどさ。

「お、おい……、ここどこだよ……」

「知るかよ！ でも、早く戻らないと……」

「ここって、竜神様のいらっしゃる山だぜ！？ 無礼にならないうちに帰らなくちゃ」

「なら、帰るための道を探して来いよ！」

……？ 竜神様？ っていうか、迷子？

「しっ。エーデルファイア、喋らないで」

「きゅ？」

「人間は絶対に敵ではないと言い切れないの。今からお兄ちゃんが追いつくから、それまで黙っていて」

人間って、敵なの？ 微妙なところなのか。そうしていると、さすがに大きなドラゴンの姿に戻っているカーヴお兄ちゃん存在に人間たちが気がついたようだ。

「りゅ、りゅりゅりゅ、竜神様！ も、申し訳ございません、迷ってしまいました！！」

「町へ戻るなら、あっちの道だ。早く帰れ」

カーヴお兄ちゃんはそう言って、ある方向を指差す。あっちに町があるのかあ、行ってみたいなあ。

そうしている間も、お兄ちゃんは人間たちが町へと戻るのを待っていた。……あれ？ 人間と目が合った？

「ち、小さなドラゴン！？」

「きゅ！？」

あ、あわわ。思いつき目が合った。ガン見された！ あわ、あわわわ。げ、限界！

「――ぴぎゃーっ！！」

思い切り叫んじゃったよ。だって、あんなにしつかり見られると怖いじゃん！

「とつとと帰れ。弟妹たちに手を出したらそのときは………」

そうやって私が叫んでお姉ちゃんにしがみ付いたからか、カーヴお兄ちゃんのまとう雰囲気が怖くなった。あわわわわ。

お兄ちゃん怖い。人間怖い。お兄ちゃん怖い。人間怖い。

「————おかーさんっ！」

ばさっ。

呼ぶと同時に羽を動かす音が耳に響いた。ぴぎゃーっ、お母さんのドラゴンの姿は大きくて怖いよう！

お母さんはそれに気がついてくれたのか、私たちの目の前に下りると同時に人態を取った。人の姿になったお母さんに、とりあえず飛び込む。

「おかーさん！」

「エーデルフィア！ 何？ その人間が何かしたのね、覚悟なさい」

はわわ、お母さんも怖いよう。でも、今さらお母さんから離れるのはもっと怖いよう。そんなこんなで、私はお母さんの頭の上でしっかりと髪を掴んでいた。

ちなみに、その恐ろしいお母さんを止めたのは、お兄ちゃんたちだったりする。

「お母さん、ちょっと目が合っただけだから手加減してよ！？」

「何かされたって言うわけじゃないの。なら、この姿で一回ずつ殴

るだけで許してあげる。その後は町に戻してあげるからね」

い、一応手加減されてる、のかな？ 一発ずつ殴っただけで許すって言ってるし……。ってあれ？ そもそも、その人間悪くないんじゃないね？

「きゅ、きゅー……」

それを訴えるために、少し強めにお母さんの髪を引っ張ってみた。でも怖いからうまく喋れない。

「ああ、大丈夫だからねエーデルフィア。何も怖くないから」

いやいやいや、そう意味じゃなくてですね。でも、今の私じゃ普通に話せないしなあ。

うん、ゴメンね人間さん。私じゃ、このお母さんを止めることは無理です。

結局お母さんは私を頭の上に乗せたままですその人間を殴りました。一発、グーで一撃入れました。

思い切り振りかぶって殴るものだから、私が落ちるかと思ったよ。咄嗟に髪を掴んだから落ちなくて済んだんだけどね。

「よし、これでいいわ。後はさっさと山を下りなさい」

い、痛そう……。殴られた人間の頭には、きれいなたんこぶが出来上がっていた。ゴメンね、人間さん。

「町はあっち。こっちに来ないでくれる？ 可愛いこの子が怖がるから」

「は、はははい！ 申し訳ありませんでした、竜神様」

と、とりあえず早く目の前から消えてよう。目が合いそうで怖いんだよう。人間大きいから怖い！

目に涙を滲ませ、人間が見えないようお母さんの髪にしっかりと頭をつけていると、その間に人間は山を下りたらしい。お母さんが頭の上から私を抱き下ろした。

「もう大丈夫だから。ほら、人間なんていないでしょう？」

言われてずっと瞑っていた目を開く。うん、何もいないね、よかった。

「エーデルファイア、泣いてたんだね。可哀想に」

「きゅう」

お母さんに抱かれた私にお兄ちゃんたちは近寄り、私の目尻に光る涙を拭ってくれる。ありがとーお兄ちゃん、好き。

でも、転生して初めて人間を見たけど、この小さなドラゴンの姿で人間を見ると、本当に怖いな。

今日は人間の姿を取ったお兄ちゃんたちがいてくれたから怖くなかったんだけどさ、私一人で、この姿であったら絶対に泣いて帰るね。

「また人間が来ないとも限らないし、今日は帰ろう。エーデルファイア、お母さんと一緒にいてね？ 危ないからお母さんから離れたらダメだよ」

「きゅ、きゅう……」

ダメだ、まだ怖くて普通に話せやしないや……。この、怖いとき

とか咄嗟のときに普通に話せなくなるっていうの、何とかならないかなあ。

そう考えながらも、私はお母さんの頭の上で、ドラゴンの姿のお兄ちゃんの背に乗り、洞窟へと帰還するのであった。

竜神って何ですか

お兄ちゃんの背に乗って洞窟に帰って来た私たちだったが、帰ってからの私は完全にお母さんの頭の上だ。飛んで逃げようとしても、何故かすぐに捕らえられるのだ。

「お、お母さん？」

「いいから、エーデルフィアはお母さんのそばにいてちょうだい」
「きゅい？」

何でかな？ どうしてかな？ どうしてお母さんはそうやって私を捕獲するの？

何となく危険を感じるから、お父さんのところにでも逃げたいのに、お母さんは逃がしてはくれない。

「お母さんばかりエーデルフィアを抱いて、ずるいよ。エーデルフィア、こっちおいで」

そうしていると、救い主が現れた。お姉ちゃん！

「きゅいーっ！！」

「って、喋ってくれないの？ ああ、お母さんの無言の訴えが怖かったんだね」

「きゅい！」

怖かったよ、お母さんの頭の上から飛び立とうとするたびに捕獲の手が伸びてくるし、どうして捕まえるのか聞いても、そばにいてとしか言わないし。

だから、お姉ちゃんに呼ばれて飛んで、お母さんに捕まらなかつ

たのはよかったよ。

そういえば、お姉ちゃんに聞いたら答えてくれるかな？　ずっと、疑問だったんだ。

「ねえ、お姉ちゃん。人間たちが竜神様って言ってたの、なあに？」
「ああ、それは私よりも、お兄ちゃんかお父さん、お母さんに聞いて。私もよく分かってないんだ」

なぬ？　ならばっと。

「おかーさん、竜神様って、何なの？」

「1000年位前に、人間たちが魔物と戦っているときに手伝ってあげたら、勝手に竜神扱いされたの」

「まもの？」

この世界、そんなものもあるんだ。

「そう。この山はお父さんやお母さんがいるから魔物もいなくて安全だけど、この山を一步でも出ると危険だからね。エーデルフィアはまだまだ出たらダメだからね」

「きゅ、きゅ！！」

それを言うお母さんが怖いです。まず、お母さんが怖いから勝手に山から下りたりしないよ。そもそも、ちびちびの私じゃ、一人で山を下りたりは出来ないよ。

私一人でパタパタ飛んでたら、山を下りる前に日が暮れちゃうって。それに、まだお母さんたちに甘えたいお年頃だから、絶対に一人はイヤ。

だから、思い切りお母さんに抱きついた。甘えたいから。いっぱ

いいっぱい甘えたいから。

「お母さん。私、お母さん大好きだよ。だから、一人にならない。絶対に誰かと一緒にいる。一緒にいて？」

「私たちの可愛いエーデルファイア。いつまでも、ずっとお母さんたちはあなたと一緒にいるからね」

「うん」

ずっと一緒にいて。私を一人にしないで。一人は、寂しい。

最近、夢を見るんだ。私が一人ぼっちになる夢。私はドラゴンの姿じゃなくて、人態を取れていて、まわりにお母さんたちがいるだろうと思って探しても、誰もいないんだ。

——誰もいない、一人だけ。私しか、いない。寂しい。

「大丈夫、お母さんたちはずっと一緒にいる。エーデルファイアを一人にはしない。絶対に、……絶対」

お母さんはそう言って私を抱きしめた。

「カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス。ちょっと来なさい」

「ん？ どした？」

「どうしたの、エーデルファイア。……って、泣いてない？ あー、何かよく分からないけど大丈夫だよー」

「何がどうだっていうの？ 大丈夫だよ、エーデルファイア」

お母さんが呼ぶと、お兄ちゃんたちはすぐにそばに来てくれる。そして、代わる代わる私を抱き寄せた。

お兄ちゃんたち、温かいな。この温もりを失いたくない。だから、足掻くよ。何があっても足掻くから。

「ほら、涙を拭こうね、大丈夫だから」
「きゅ、きゅー」

もうまともに話せない。今の私の口から発せられる言葉は鳴き声だけだ。

「ただいまー」

そうしていると、お父さんが帰って来た。……そういえば、お父さんどこに行ってたんだろう。

「ちょっと町に出て、人間どもに忠告してきた。これでしばらくは山に入り込むバカはいないだろ」

「お疲れ様、フォンシュベル。少しくらい、人間の王を痛めつけてきた？」

「少しといわず、徹底的に殴ってきたよ。……宰相を」

哀れ、人間の王。っていうか、宰相。いないなあと思ってたら、山を下りて町に出てたのか。そして、王を、というか宰相を殴ってきたのか。

あー、いろんな意味でごめん、人間たち。私が怯えたせいだね、ここまで宰相がやられたのは。

そう思ったのが顔に出てたのかな？ お父さんは不意に私の頭に手を置いてきた。温かくて気持ち良いんだよね、これ。

「エーデルフィア、大丈夫だよ。あれはそれ相応の報いだから」

奴らはあることか、エーデルフィア、君を怯えさせたんだ。それくらいは普通、というか手加減したほうだよ。

お、お父さん怖い……。にっこり笑ってその言葉を放たれると本気で恐ろしいです。

家で一番怖いのはお母さんだろうけど、お父さんも結構怖かったんだね。今思いつきり実感したよ。

「きゅー！ きゅるきゅいーっ！」

だから、助けてお兄ちゃんたち。私をこのにっこりと微笑みながら怖い言葉を放つお父さんから逃がして！！

お父さんが本気で怖いです。私を捕まえて、目を合わせてにっこりと微笑みながら言うから、余計怖いです。

「お父さん、エーデルフィアが本気で怯えてるから。冗談もほどほどにね」

「きゅい？」

お姉ちゃんがお父さんから私を回収してくれたよ、その瞬間思い切りお姉ちゃんにしがみ付いたよ。

それにしても、何ですと？ 冗談ですと？ 本気にしか聞こえなかったんだけど。

「ああ、本気にさせてしまったか。安心しろ、冗談だ。——半分くらいは」

「残り半分は！？」

「いいじゃないかそんなこと。それにしても、もう怖くなくなったみたいだな、よかった」

……はっ！ まさか、私の恐怖心を拭い取るための作戦！？

——あーうん、違うわ。目を合わせようとしたら露骨に目線外すし。

「おとーさん？」

「なななな、何だい？」

「残り半分は、何？」

「エーデルフィアが気にすることじゃないから大丈夫だよ。ほら、
疲れただろう？ お昼寝しような」

「話変えたね？ おとーさん、本気で考えてるー！」

きゅいーっ！！ 鳴きながらも、私はお父さんの手によって強制的に私専用ベッドに下ろされた。くそう、まだ寝ないぞ！

「ダメだよ、寝なきゃ」

「やーあだ！ 眠たくないし、さっきのお話まだ途中だよ？」

「ダメだったら。初めて人間を見て、びっくりしただろう、今日は
だから、いつも以上に休もうか」

「そうそう。疲れて寝てってしなきゃ、大きくなれないよ？ いい
の？」

「きゅい！？」

く、くう……、お兄ちゃん、お姉ちゃんの説得が恐ろしくなってきたぞ……。確かに、大きくなれないのは困る……。

「ほら、大きくなりたいなら寝ようね。って言うか、そろそろ寝ないと限界が来ると思うんだけど」

「へ？」

「エーデルフィア、確か5時間以上続けて起きてたこと、ないよね？」

はっ！ そういえばそうだよ。言われてみればそうだよ！ ああ、聞いたら眠たくなってきた……………。

とりあえず、ベッドでくるっと丸くなる。

「よしよし、素直ないい子は大きくなれるよ。おやすみ、エーデルファイア」

「きゅ……、おやすみなさい」

素直な私は早く大きくなるよ！　そのためにも今はご飯までぐっすり眠ってしようっと……………。

「エーデルファイア、ご飯だよ。お腹空いたろう？　食べよう」
「んきゅ？」

ふわぁ、よく寝た。起きて、鼻をすんすんと動かすと、いいにおいがする。今日のご飯は、昨日のお肉の残りかな？

そう思いながら、私は少し飛んで私を起こしに来たお兄ちゃんの肩に乗ってそのまま連れて行ってもらおう。人間、^{ドラゴン}楽するためにはいろいろと考えなくては。

「エーデルファイア、自分で飛んで行こうよ。甘えてばかりじゃダメだよ？」

「だって、寝起きって上手に羽動かせなくて、前一度落ちたもん。……だから、怖いんだ。ダメ？」

「う！　そ、そうだったね。でも、ご飯食べた後は、きちんと自分で飛ぶんだよ！？」

「うん！　ありがとうカーヴお兄ちゃん！　大好き！」

ちなみに、これ事実。前、寝起きの大寝惚け状態でフラフラ飛んで、落っこちた。あれは痛かった。痛みで目は覚めたけど、最初は

何で床にいるのか、何で痛いのか分からなかったもん。

目を白黒させてたら、私が落っこちたことに気がついたお父さんたちが来て、全力でかまってくれたんだっけ。

「ああ、痛いだろう可哀想に」

「よしよし、大丈夫よ。ほーら、痛いの痛いの、どこか行けー」

子供用のこういう言葉、この世界にも、って言うかドラゴンにもあるんだね。あの時は本気でそう思った。

ただ、飛んで行けじゃなくて、どこか行けなのが若干リアル。

そして、この世界でもお母さんの手はすごい。お母さんに撫でられたら、本当に痛いのだこか行っただしね。

前世の小さい頃はお母さんの手は魔法の手だ！ って本気で信じてたけど、この世界でもそう言うのはありそうだ……。

おっと、そんなことを考えている間に、カーヴお兄ちゃんは既に私の席の前に立っていたよ。んちよ、よいちよ。羽を広げて席へと下りる。

「よし、エーデルファイアも来たしカーヴも席に着いたし、食べようか」

それからは食事の時間ですね、分かります。これは昨日のお肉ですね、美味しいです。

昨日とは味付けが変わっている、というか、昨日は焼いていたけど今日は煮込んであるようだ。味がしみていてすごい美味しい！

というわけで、やっぱり今日も。

「お姉ちゃん、お肉取って？」

「ふふ、貸してごらん」

お肉と骨は別々に味わいたいから、きれいにお肉と骨を分けてください、ティアお姉ちゃん。

私が皿を押しやりながら頼むと、お姉ちゃんはにっこりと微笑み、肉を取り始めてくれる。うきうき、楽しみだな。

「はい、取れたよ。きれいに取れたから、純粹に肉と骨と別々に味わえるよ」

「うわあい、ありがとーお姉ちゃん！」

言われて見てみると、本当にきれいに肉と骨とが分かれていた。

お姉ちゃん大好きー！

はぎゅはぎゅはぎゅ。お肉美味しい、幸せ。がぶがぶがぶ。骨美味しい幸せ。も、最高すぎる。

「エーデルファイア、肉や骨ばかりじゃなくて、草も食べるんだぞ？」

あ、草もあったんだ。気がつかなかったや。あるなら食べるー！

「はい、最低これくらいは食べることに」

……いや、食べるって言っても、これは多くない？ しかも最低？

現在、私の目の前の皿には、草が山のように積まれています。お父さん、私の体の大きさ考えて。私の体と同じくらいに積まないで。

「ふう、盛りすぎよ、フォンシュベル。せめてこれくらいにしなさいよ」

そうしていると、お母さんがその半分以上をこっそりと移動させ

てくれた。ありがとーお母さん！ うん、このくらいなら食べるよ。

うん、食べ過ぎた。お腹がぽっこりと膨らんでるよ。いやいや、草の量が多かったからね。でも、これだけ食べても全部成長に行くのは嬉しいわー。

「エーデルファイア、いっぱい食べたね。ベッドまで飛べる？」

……、はっ！！ よし、やってみよう！

羽を広げて、羽ばたかせて……、ぼとっ。自分のお腹が重たくて飛べなかった、くそう。

「あー、やっぱりね。ほら、行こうか」

そうしていると、お兄ちゃんが落ちた私を拾い上げてベッドまで運んでくれた。ありがとーお兄ちゃん。

さあ、いっぱい食べた後には寝なくては。いっぱい食べていっぱい寝ていっぱい遊ぶ。これが、今の私が大きくなるための一番の近道なのだから。

あの二人に会いに行こう

今日の私たち兄妹の目的地。それは、じいちゃんとかあちゃんのところ。

じいちゃんとかあちゃんって、私、初めて会う気がするよ。じいちゃんとかあちゃんも一応この山に住んでるのに、何故か会わないんだよね。

っていうか、どうしてお兄ちゃんたち、そんなに嫌そうなの？
どうして？ どうして？

「ああ、大丈夫だよエーデルフィア。エーデルフィアはきつと大丈夫」

「そうね。まだ小さいから」

「ああ、気が重い」

「？」

お兄ちゃんたち、何でこんなに嫌そうなんだろう。それに、私は大丈夫って、何？

そんなことを考えている間に、私たちはじいちゃんたちの暮らす洞窟の前に立っていた。お兄ちゃんたちが先に進むのを躊躇しています。じいちゃんたち、どれだけ怖いのです？

「早く入れよ」

そうしてたら、いきなりサーファお兄ちゃんが誰かに蹴飛ばされた。……この人が、じいちゃん？

「おー？ エーデルフィアか？ 大きくなったなあ、おいで」

「きゅ？」

「どした？　じいちゃん怖くないぞ？　ほら、中に入ろうな。カーヴァ、ティア、サーファ、お前らも早く来い」

やっぱりこの人がじいちゃんなのか。そう思いつつ、抱かれたままで洞窟へと入っていくと、そこにもう一人いた。つまりこの人が。

「ばあちゃん？」

「エーデルフィア！　ジャン、エーデルフィアを私にも抱かせてちょうだい」

「じゃん？」

「ああ、ジャンって言うのはじいちゃんの名前だ。ジャンストリスを略してジャンだな」

「じゃあ、ばあちゃんは？」

「ばあちゃん？　ばあちゃんの名前はシフォニアって言うの。だから、ジャンからはニアって呼ばれてるわ」

へー。って言うか、じいちゃんもばあちゃんも優しいじゃん。お兄ちゃんたち、何であんなに怯えてたのかな。

現在、ばあちゃんにしっかりと抱きとめられている私。さすがばあちゃん、抱き方優しくて気持ち良いな。

「最後に見たのは、エーデルフィアがまだ生まれたばかりの頃だったかしら？　本当に大きくなって」

「知らない。覚えてないよ」

「当たり前よ。エーデルフィアはまだ生まれたてのちっちゃなドラゴンだったんだから」

「きゅ？」

それ、本当にいつの話？　全く知らないんだけど。全く全然記憶

にないんだけどさ。

「だから、それが当たり前よ。生まれたばかりの頃を覚えてる子なんていないわ」

それもそうか。なら、今から新しく思い出を作ろう！　ってことで、目いっぱい甘えよう！

「きゅーっ！」

ばあちゃんに思い切り頼ずりする。ばあちゃん、すごーい嬉しそうだ。……それを見るじいちゃんの目が怖い！！

じ、じいちゃん、そんな目でこっちを見るのはヤメテ！

「ニア、俺にもエーデルフィアを抱かせてくれ。エーデルフィア、じいちゃんにも頼ずりしてくれないか？」

「んきゅっ」

そう鳴いてじいちゃんの元へ向かっていると、後ろから怖い声が聞こえた。

「――あなたたちは、何もせずに帰るつもり？」

「きゅーっ！？」

あわ、あわわ。ばあちゃんが、ばあちゃんがすごーい怖い！

「ああ、エーデルフィア、あなたは何も悪くないから怖がらなくていいの。私が言ってるのは、あなたたちよ。――カーヴァンクス、オースティア、サーファイルス」

へ？ お兄ちゃんたち？ どゆこと？

「せっかく来たのに、どうして何もせずに洞窟から出ようとしているの。ほら、あなたたちも来なさい」

「う……うん……」

んう？ どうしてお兄ちゃんたちそんなに怯えてるんだろ。じいちゃんもばあちゃんも優しいのに。

そうやって恐る恐る近寄ってきていたお兄ちゃんたちだったが、ばあちゃんの射程距離内に入った瞬間に、蹴り飛ばされた。

「きゅ、きゅいー！！」

カーヴお兄ちゃん！ ちょ、大丈夫！？ そう思ってたら、起き上がったお兄ちゃんが盛大にばあちゃんに文句を放っていた。

「ばあちゃん！ いつもいつも、近寄って来た孫を蹴飛ばすのやめろよ！」

「おー、生意気になったな、カーヴァンキス。教育的指導っ！」

こ、今度はゲンコ！？ ゴンツて言う音がしたよ！！ お兄ちゃん大丈夫？ 大丈夫？

駆け寄りたいのに、私はじいちゃんに捕まって近寄れない、くそ
う！

「……ってー。孫に問答無用で鉄拳かますなっの。ほら、エーデルフィアが怯えてるじゃないか」

「あ、ホントだ。エーデルフィア、こっちおいで。じいちゃん、エーデルフィア離して」

お兄ちゃん！ 行く、行くから！　じいちゃん、離して！

「離すわけないだろう、バカガキ共。エーデルフィア、まだかまい足りないから離さない。カーヴアは大丈夫だ、ニアが手加減をしてるからな」

そう見えない！　どう見ても手加減してるように見えない！　カーヴお兄ちゃん！

ああっ！　ティアお姉ちゃんとサーファお兄ちゃんがカーヴお兄ちゃんを犠牲にして、若干引いてる！

じいちゃん、私もお姉ちゃんたちのところ行きたいから離してよーっ！

「きゅい、きゅいきゅいーっ！」

離してー！　そう言いたいのにうまく言葉が発せなかった！　くそう！

でも、行動で大体何が言いたいかは分かるでしょう？　じいちゃん、離して、離してったら！

「エーデルフィア、きちんと言わないと分からないよ？」

くうっ！　じいちゃん、分かっているからね！？　咄嗟のときはうまく言葉が発せないんだ、勘弁してよ！

「きゅい！　きゃきーっ！！」

「あっはっは、分からないなあ」

「きやるるるー！」

「あー、全然分からんなあ」

おのれ、じいちゃん。分かっているながら徹底的に無視か。そう思
いながらじいちゃんを睨んでいると、突然視界が揺れ動いた。

「よし、エーデルファイアゲット。帰ろうか」

「よくやった、サーファイアス。走れっ！」

「ティア姉、エーデルファイアをお願い！」

「分かった。エーデルファイア、しっかり掴まってね！」

へ？ え？ いつの間にか私はサーファお兄ちゃんに捕獲され、
ティアお姉ちゃんに掴まっていた。そして、私をしっかりと捕まえ
たお姉ちゃんたちは、走る。洞窟の入り口まで徹底的に駆けていた。
だが、やはりじいちゃんたちは強かった。気がついたら二人とも
目の前にいたよ。目の前でにっこりと微笑んでたよ。

それを見たお兄ちゃんたちは、その場でしつかりと足が止まっ
た、怖かった。

でも、仕方ないよね。間違いなく後ろにいたはずのじいちゃんた
ちが目の前に、洞窟の入り口を塞いでたんだから。

「そう簡単に逃げられると思うか？ もう少し精進するべきだな」
「あらあら。この程度で逃げれると思われてるなんて、ばあちゃん
悲しいわ」

「ちょ、じいちゃんたち怖いって………！」

あわ、あわわわわ。にっこり笑うじいちゃんたちが本気で怖いよ。
そんな意味を込めて、しつかりとお姉ちゃんの髪を掴んだ。
じいちゃん怖い、ばあちゃん怖い。———ぴぎゃーっ！

「おかーさーんっ！！」

もういやもうダメ助けておかあさーんっ！！

「エーデルファイア!!」

「おかーさん助けてもうやだー!　じいちゃんもばあちゃんも怖いー」

「この子に何をしたの!?　お義父さん、お義母さん!」

「ん?　可愛がる以外は何もしてないぞ?　なあ、ニア」

「もうヤダ怖いー!　きゅー!」

「大丈夫、大丈夫だからね」

じいちゃんもばあちゃんも怖いよー。もうお家帰るー。

「大丈夫よ、お母さんと一緒に帰ろうね。カーヴ、ティア、サーフア、帰りましょ」

「了解」

カーヴお兄ちゃんは言うと同時にドラゴンの姿に戻る。うん、帰ろう。もう帰る。じいちゃんたち怖いよう。

「んきゅー、きゅるー!!」

じいちゃんたち怖いー!　もうやだー!　そう言いたいののに、恐怖のせいか、鳴き声しかあげることが出来ない。くそう。

でも、お兄ちゃんたちはその間にじいちゃんたちのいる洞窟を抜け出して、大空を駆けていたよ。

「エーデルファイア、俺たちがあんまりじいちゃんたちに会いに来ない理由、分かっただろ?　あんまり会いたくないだろ?　扱かれたくないだろ?」

「きゅっ?」

あれ？ 質問の最後に気になる言葉があったのだが、まだ鳴くことしか出来ないため、尋ねることができなかった。くやしい。

でも、帰る間、とにかく私は頑張って尋ね続けていたよ。――全部鳴き声にしかならなかったけどね。

「んきゅ？」

扱かれるって、どういうこと？

「んきゃう？」

お兄ちゃんたち、ずっと扱かれてたの？

「きゅー、きやるる？」

じいちゃんたち、昔からそんなに怖いの？

――って、いい加減恐怖よ飛んで行け！ そろそろ普通に話させろ！！

ちなみに、お母さんたちは私がずっと鳴き声しかあげないものだから、よっぽど怖かったのだろうと、とにかくずっとかまってくれたよ。それは嬉しかった。

事実、かなり怖かったからね、じいちゃんたち。最初は優しいじいちゃん、ばあちゃんだと思ってたから、余計怖かった。

「よしよし、怖かったね。でも、もう大丈夫だよ」

そうやって撫でてくれる手が優しくくて。ドラゴンの姿のままて顔を舐めてくれるお兄ちゃんの瞳が優しくくて。

「もう平気。ありがとー、おかーさん、おにーちゃん、おねーちゃん。――大好き」

「お母さんも大好きよ、エーデルファイア」

「俺もね」

「俺も」

「もちろん、私もね」

うん、みんな大好き。

「おっと、お父さんも忘れないでくれなー？ お父さんもエーデルファイア好きだぞ？」

「うん！ お父さんも大好きー！」

そしてこれは後日談。お父さんはこの日、私が寝たあとにじいちゃんたちに文句を言いに行っていたらしい。

お兄ちゃんたち曰く、それは話し合いという名の喧嘩だったらしいよ？ じいちゃんたちとお父さんって、どれだけ怖い勝負になるんだろう。

とりあえず、私たちが手を出したら間違はなく巻き添えを食らうくらいに恐ろしいものだろうね、きっと。

だって、竜神様だし。お父さんも竜神様、お母さんも竜神様。なら、絶対じいちゃんたちも竜神様だろ。竜神同士の勝負なんて、考えただけでも恐ろしいや。

「だから、安心しなさい」

次の日の朝、顔を合わせたお父さんにそう言われて本気で何かと考えたよ。お父さん、じいちゃんたちに何したの？ みたいだね。そしてね、この疑問はまだ解決してないんだよね、お兄ちゃん、お姉ちゃん。

「お兄ちゃんたち、じいちゃんたちに扱かれたの？」

「……………思い出したいくない過去だ」

「うん、お兄ちゃんもそうよね」

「確かに思い出したいくないな、あれは」

「んきゅ？」

そそ、そんなに辛い過去なのか……。

「あ、不安にさせたみたいだね。でも、エーデルフィアはまだ大丈夫だから安心して。100くらいになったら、じいちゃんたちに近寄らなくすれば扱かれないよ」

曰く、人態を取れるようになったら徹底的に魔術、肉体的両方で扱かれる、らしい。こわ。

つまり、今の私で考えれば扱かれるのはまだまだ先ということですね、分かりました。極力近寄らないようにします。

教えて欲しいな

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、魔術教えて？」

小さいうちから、普通の魔術なら使えるんでしょ？ 人間の姿を取るのはまだ先でいいから、簡単な魔術くらい、使えるようになりたいな？

「うーん、まだエーデルファイアには早いと思うんだけど……」

「確かに。ね、エーデルファイア。自分の年言ってごらん？」

「きゅ？ 10だよ？ 10歳」

「そうだね、10だよ。10で魔術は早いよ」

んきゅ？ 10で魔術を習いたいって言うのは早いのか？ 基準が分からないからなんとも言えないね。

だって、まわりに同じくらいの年のドラゴンはおろか、私たち家族とじいちゃんばあちゃん以外のドラゴン知らないしね。

でも、そんなことどうでもいい。だからさ。

「おーしーえーてー？」

「だ、ダメだったら！ そうだね、50くらいになったら教えてあげる」

「そんな先の話、いやー！」

50とかまだ先すぎるよー。この山じゃすることがあんまりないから退屈なんだよー。魔術教えてー！

「ダメだって。エーデルファイアにはまだ早いよ」

「でも、たいくつー！」

「うーん、じゃあ明日、町にでも下りてみる？ お父さんとお母さんがいいって言ったら連れて行ってあげるよ？」

町！？ はい、行ってみたいです！！

「よし、じゃあお母さんたちに話しに行こう」

「町？ 別に良いんじゃない？ ——何かあったら町が減じるだけだし」

こわっ！！ そしてかるっ！ でも、お母さんからは許可をもらったぞ。次はお父さんだ！

「ダ・メ」

お父さん、超につこり。これは手強そうだ。

「じゃあ、魔術教えて？」

「それもダメ」

「魔術教えてくれるか、町に行かせてくれるか、どっち？」

「どっちもダメ」

「でも、退屈だもん」

んきゅー。しょんぼりとした私の鳴き声があたりに響く。それを聞いたお父さんが少し焦り始めたよ。

……してやったり。心の中だけで、にやりとほくそ笑む。お父さん、そのまま落ちて欲しいな。下を向きながら、ずっと悲しんでいるように見せつけ、お父さんの心変わりを待つ。お父さん、まだ？

「だ、だがな、町は危ないんだぞ？」

「俺たちがいるから大丈夫だよ」

「そうそう。エーデルフィアに害を成そうとするバカがいたら、即、引き裂くし」

「それか、ちょうどいいから新しい魔法の実験台になってもらうわ」

お兄ちゃんたちがお父さんを黙らせに入った！ 傍観者は参戦者となったよ。だから、お父さん、ね？

「あーもう、分かった分かった。但し、一人で勝手にどこかに飛んで行かないこと。絶対にカーヴたちに引っ付いていること。守れるか？」

「んきゅ！ 守る！ 守れる！」

顔を上げたら超笑顔。これもある意味必殺技。溢れんばかりに喜びを感じさせて、ここまで喜ぶのならばと、次を考えさせる方法だ。――ドラゴンとして生を受けて10年。前世のお父さん、お母さん。娘はあなたたちの子でいた頃以上に腹黒になりました。

そして翌日。いつも以上にぐっすりと休まされ、私たちは町へと向かう。いつものようにカーヴお兄ちゃんがドラゴンの姿を取り、私たちがその背に乗る。

さあ問題です。現在、私はどこにいますでしょう。見えないよね？ 見えないでしょ？

正解は、フードをかぶったお姉ちゃんの頭の上。お姉ちゃんのフードで殆ど私の姿は隠れていて見えないらしい。でも、私からはしっかりと外が見える。最強のだ。

「よし、行くか」

「カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス。気をつけろよ、エーデルフィアを絶対に守るんだぞ、何かあったら手加減するな。責任は俺が持つ」

「了解。エーデルフィアに害を成すバカには手加減は必要ないな」

うわー、お父さんもお兄ちゃんたちも怖いな。でも、町が楽しみだから何にも言わない。

「おっと、それとこれをオースティアに渡しておこう。いいものがあったら買ってくるといい」

「あ、ありがとうお父さん」

そう言ってお父さんがお姉ちゃんに渡したものの、お金かな？　そういえば、この世界のお金って見たこと無いや。後でお姉ちゃんに見せてもらおう。

そうしたやり取りの後、私たちはやっと出発する。山の入り口まではお兄ちゃんがドラゴンの姿で飛んでいくらしい。山を下りたら、後は歩くというか、走るんだってさ。

まあ、今は初めての町に期待を抱いて、お姉ちゃんにしがみ付いておくことにしよう。

でもその前に。

「お姉ちゃん、お父さんにもらったのって、お金？」

「ん、そうだよ。ってあれ？　エーデルフィアにお金の話、したことあったっけ？　お金ってどういうものか分かってる？」

「うん！　お金とモノを交換するんでしょ？　お金ってどんなの？　見たいなあ」

「うん、合ってるよ。人の世界ではね、お金を渡してモノをもらう

んだよ。とりあえず、お金は町について落ち着いたら見せてあげるね」

おうけい、楽しみにしてるね。うーん、お金見せてもらったら、この国の金銭事情も軽く聞きたいかな。……って、10歳のドラゴンが聞くようなことじゃないか。

でも、この世界でのお金やモノの価値って分からないから、興味あるんだよねー。

「よし、山を下りたな。下に下りるから気をつけろよ」

そうしている間に山を下りたらしい。さすがカーヴお兄ちゃん、早いなー。

その後、人態を取ったカーヴお兄ちゃんとティアお姉ちゃん、サーファお兄ちゃんはすごい速度で走り始めた。ドラゴンだから？ 竜神様だから？ だからこんなに早いのか？ とりあえず、しっかりと掴まっていないと風圧で飛ばされそうだな。

「エーデルファイア、しっかりと掴まってるねー」

「ううううううん」

あわわ、風圧でしゃべりにくい。今はとにかくしっかりと掴まっていたほうがいいな。

「大丈夫？ 町についたよ」

おう！ あまりの風圧に、いつの間にか意識が飛んでたみたいだよ。気がついたら町についてたっぽい。

「んきゅ……、へーきい……」

ホントはまだ風圧の影響できついけど、でも心配はさせたくないからとりあえず大丈夫だと答えておくよ。

「まずは、落ち着ける場所に行くか。喫茶店系でいいだろう？ 行こう」

この世界にも喫茶店はあるのか。ああ、まあ普通にあるか。うん、失言だった気にしないで。

そしてついた喫茶店。そこではまずお姉ちゃんがフードを脱ぐ。え？ そしたら私丸見えなんだけど！？

「これはこれは、いらっしやいませ、竜神様方。あら？ 今日随分と小さなお客様まで。どうぞ、お席のほうへ」

……あれ？ 奇異の目で見られなかった。山で初めて見た人間は思いつきり奇異の目で見てきたから、町の人間みんながそうなのかと思っただけ、違うのか。

って言うか、町の中でもお兄ちゃんたちは竜神として有名人なのね、実感した。私たちがこの喫茶店に入ってから、入ろうとする人はいるけど、私たちを見て回れ右して帰っていくよ。

「とりあえず、エーデルファイアには深皿に何か甘いものを、俺たちはいつものやつな」

「畏まりました。少々お待ちくださいませ」

いつもの？ お兄ちゃんたち何気に常連さん？

そう思っていると、私の目の前に何かが広げられた。お姉ちゃん、これ何？

「これがさっきエーデルファイアと話したお金だね。まずこれが一番小さなお金、鉛貨。これが10枚集まると次のお金、銅貨になる。で、銅貨を100枚で、銀貨。銀貨が10枚で金貨。金貨が10枚で晶貨になるの」

ん？　へ？　えっと、ちょっと待って。

まず、一番小さなお金が、鉛貨で、それが10枚集まったら銅貨にランクアップして、銅貨が100枚で銀貨になって、その銀貨が10枚で金貨、金貨が10枚で、一番上のお金の晶貨になるのか。よし、おっけい。

「ほら、一枚ずつ持ってごらん？　なくしたらいけないから、私たちの目の届かない場所に持っていないようにね？」

「うん、ありがとうー！」

そうして一枚ずつ持っていくのだが、これは見た目の判断がかなり簡単だな。まず、第一に色が違う。

晶貨は水色というか、少し透明味を帯びた感じの色で、その下の貨幣たちはそのままだ。金貨は金色で、銀貨は銀色、銅貨は銅色、というか茶色で鉛貨は鉛色。

でも、全部きれいだなあ。

「もういいかな？　なくしたら怒られちゃうから片付けるよ」

「……え、あ、うん。ありがとう」

いやいや、10歳にしてようやく初めてお金を見ることが出来たよ、私。10歳にして初めてお金を使う状況に来たよ。

——遅すぎじゃね？

「お待たせしました。小さな竜神様にはこの近くで取れた果物のジュースをお持ちしました。気に入っていただけるとよいのですが…」

そうしてたら頼んだものが来たみたいだね、果実100%ジュースだね！

でも、知らないものは最初は怖いんだよね。というわけで、恐る恐る口を近づけ、舐めた。……美味しい。

ぺちぺちぺちぺち。私が舌でジュースを掬って飲む音があたりに響く。うん、これ美味しいよ。甘くて、何だか優しい味。

「気に入っていただけたようで何よりです。もっと飲みたいのでしたら、まだありますので遠慮なく仰ってくださいね」

「んきゅ！」

ならば遠慮なく！　っていうか、ホントこれ美味しいわ。

「よっぽど気に入ったみたいだね」

「美味しそうに飲んでるもんね」

「エーデルファイア、可愛い」

だって、美味しいもん。そういえば、お兄ちゃんたちは何を飲んでいるの？　ねえ、一体何を飲んでるの？　ちよびつとちようだい？

「あー、あげてもいいんだけど、多分エーデルファイアには苦いよ？」
「シロップを入れても、多分まだ苦いよね」

「だろうね。ほら、論より証拠。飲んでごらん、これはシロップが入ってるから少しはマシだから」

サーファお兄ちゃんはそう言って自分の持つカップを傾けて私に

飲みやすいようにしてくれた。

って、あれ？ この色、この匂い。——これってコーヒーじゃないか！！

確認のために、その液体に舌を伸ばす。舌で掬って飲む。うん、やっぱりコーヒード。

久しぶりの味だー。でも、ちびちびドラゴンの舌にはかなり苦いよ……。

「にぎゃい………」

「だから言ったでしょ？ この子にさっきのジュースもう一杯もってきてあげて」

「畏まりました」

もう少し大きくなれば、懐かしきコーヒートの味も美味しく感じられるようになるかな？

前世の私って、一応コーヒード大好きで殆ど毎日飲んだのに、転生してからは無いと思ってたから全然飲んでないんだよね。いろんな意味で、禁断症状出てたよ。

でも、その禁断症状はさっきの苦味で完全に吹っ飛んだ。これを美味しいと感じられる歳になるまではコーヒードいらぬ。苦い。

そのためにも、早く大きくならんちやね。

教えて欲しいな（後書き）

ストックが尽きました（泣）

これからは一話出来次第更新となります。
さすがに二作品毎日更新は辛いですね。

10／31日、銀貨から金貨へのランクアップの枚数に
誤りがあったため、訂正しました。

番外編・愛するエーデルフィア（前書き）

ごめんなさい、ストックが尽きていながら、
気分的に番外編なんぞを書いてしまいました……

時系列的には二話目あたりですね。
転生直後です。

それを、エーデルフィア目線ではなく
外の第三者目線（？）で書いています。

後、若干残酷描写があります。
苦手な方は避けてください。

番外編なので、読まなくても本編には
まったく害を齎しません。

番外編・愛するエーデルファイア

「ぴぎゃーっ!!」

エーデルファイアが生まれて、叫んで気を失った直後、フォンシュベルとエイシェリナ、そして外で生まれるのを待っていた子供たちは焦っていた。

生まれた子供が、可愛い妹が叫び声を上げて気を失ったからだ。ちなみに理由は、この場にいる全員がドラゴンの姿をしていて、驚いたからだということを彼ら、彼女らは知らない。

そしてその後目を覚ました幼子。エーデルファイアはやはり大きなドラゴンの姿をした両親、兄弟を見て驚く。

両親や兄弟たちはそれに気がついたらしく、人態を取った。それと同時にエーデルファイアは目を見張らせ、恐る恐るフォンシュベルやエイシェリナに近寄ってきた。

そんなエーデルファイアをエイシェリナが優しく抱き上げる。

「よく、生まれてきてくれたねエーデルファイア」

「あなたの名前は、エーデルファイアよ。私たちの可愛い子」

「んきゅ?」

そうして声をかけられたエーデルファイアだったが、意味が分からないらしく首を傾げた。その動作にフォンシュベル以下、母子四名は胸を打たれる。

守らなくては。数少ない竜族、ドラゴンたちは、基本的に子供が生まれづらい。その上、竜族は一所にまとまっていないため、どこかの家族に子供が生まれても、滅多に会うことは無い。

だからこそ、竜族は子供を慈しむ。滅多に会うことの無いドラゴ

ンの子供。出会ったときは、絶対を守る。それが自分の子、兄弟ならばそれ以上に守るのだ。

「エーデルファイア、お兄ちゃんだよ。カーヴァンキスっていうんだ、よろしくね」

「お姉ちゃんよ。オースティアっていうの。でも、お姉ちゃんって呼んでね」

「サーファイルスだよ、エーデルファイア。俺たちの可愛い妹」

慈しむべき小さなドラゴン。生まれたてで、人態を取った彼らの両の手のひらにやっと乗るくらいの大きさしかない小さな子。

「きゅー」

可愛い鳴き声をあげながら、兄弟たちを敵ではないと判断したのかすり寄るエーデルファイア。

「か、可愛いよこの子……」

「お母さん、ちょっと可愛すぎない？」

「いいじゃない、可愛くて。エーデルファイア、こっちおいで」

「んきゅー」

呼ばれても言葉が理解できていないため、頭に疑問符を並べるエーデルファイアをエイシェリナは抱き寄せる。

「よしよし、可愛い子」

そうやって抱き寄せられるのは気持ちがいいのか、エーデルファイアは目を細める。それからさほど経たずに、ぐっすりと眠ってしまった。

「うふふ、寝る子は育つわ。大きくなりなさいね、エーデルファイア」

気持ちよさに眠りに落ちたエーデルファイアを、エイシェリナは彼女のために用意したベッドへ運ぶ。小さな小さな籠。それに柔らかい毛布を置いて設えた彼女専用のベッド。

エイシェリナはそれに、エーデルファイアが起きないように優しく下ろす。下ろした瞬間、エーデルファイアが身じろぎしたため、エイシェリナは焦ったが起きなかったのでよしとした。

下ろされたベッドで気持ちよさそうに眠る我が子。フォンシュベルや子供たちが競い合って覗きあう、小さな小さなドラゴン。

——それが、五月蠅かったのか。

「……………ぴぎゃーっ！！！」

すやすやと眠っていたエーデルファイアは、大きな鳴き声を上げて目を覚ました。何度も鳴きながら、何かを求めるように前足を伸ばす。

「んきやつ、んきゅーっ！！」

その姿が何故か痛々しくて。その姿が、愛らしくて。

だから、一番近くにいたエイシェリナはエーデルファイアを抱き締めた。小さな我が子が痛くないように、力加減をしっかりと、それでも、強く。

「大丈夫よ、エーデルファイア。大丈夫、大丈夫」

「きゅ、んきゅきゅ……………」

それでもまだ不安なのだろう、エーデルファイアの体は小刻みに震えている。

「大丈夫よ」

だからエイシェリナは淡く微笑みかける。エーデルファイアが安心できるように優しく微笑みかけた。

それでようやく安心したのか、エーデルファイアは再び目を細め、眠りに落ち始めた。

そしてエーデルファイアはエイシェリナの腕の中で、気持ちよさそうに眠りに落ちた。

その後、空腹で目を覚ましたエーデルファイアは、再び恐ろしいものに襲われることとなる。

「お腹空いたでしょう？ エーデルファイア」

ドラゴンの姿に戻ったエイシェリナはそう言いながら、自分の鋭い爪で自分を傷つけ流血させる。ドラゴンの姿と流血が、エーデルファイアを怯えさせた。

「きゅ、きゅうう……」

「あら？ お腹空いてないの？ ——ああ、この姿が怖いよね。ちよっと待ってね」

エイシェリナはそう言うと、人態を取る。その腕からは血が流れ続けていて、それがエーデルファイアを怖がらせた。

「ほら、飲みなさい。お腹空いてるでしょ？」

「きゅい、きゅうー」

その鳴き声は、どう聞いても嫌がつているようだった。それに、エイシエリナは首を傾げる。

ドラゴンの子供は、最初の数年は親の血を飲み、それを栄養に生きていく。親の血がどれだけ美味しいか、小さなドラゴンは本能的に悟っている。故に本来、親の血の臭いがすれば、小さなドラゴンは食事と判断して喜ぶはずだった。

だが、小さなエーデルファイアの反応は逆だった。エイシエリナの流す血に怯え、頭を抱え、見なくてもいいようにベッドに顔を埋めていた。

「どうしたの？ ほら、飲まなくちゃ大きくなれないよ？」

エイシエリナが何度声をかけても、小さな小さなエーデルファイアはエイシエリナの血を飲もうとしない。頑として顔をベッドに埋めたまま動こうとしなかった。

「んもう、仕方ない子ね」

エイシエリナは言うと同時に、片手でエーデルファイアを持ち上げた。エーデルファイアの正面に、エイシエリナの血の流れる腕が来る。そしてエイシエリナはその腕を無常にもエーデルファイアの口元へと近づけた。

「ぴぎゃーっ！　ぴきゅーっ！　ぴゃーっ！！」

エーデルファイアの悲鳴は続く。悲鳴を上げながらも、必死で血を

飲むまいと足搔いていたのだが、結果的には本能が勝つこととなった。

鼻先を漂う美味しそうな匂い。立派なちびちびドラゴンのエーデルフィアは、その本能には抗えなかったのだ。

「んくっ、こくっ」

一度飲んでしまえば、後はなし崩しに飲み続けた。ごくごくごくぐくと、どれだけ空腹だったのか、エーデルフィアはとにかくエイシエリナの血を貪り飲み続けた。

「きゃふっ」

そしてしばらく飲み続けて満足したのか、エーデルフィアはようやくエイシエリナの腕から離れた。その後は、エイシエリナによってベッドに戻される。

「いっぱい飲んだね。なら、後はゆっくり寝ようね」

「んきゅ、きゅる………」

エイシエリナはベッドに下ろした我が子の体を優しく撫でる。それが気持ちいいのだろう、エーデルフィアはそのままうとうとと船を漕ぎ、そして完全に寝入ってしまった。

それからソーっと、眠るエーデルフィアの元に現れたものがあった。それは、カーヴァンキスたち兄妹たちだ。兄妹たちは新たな兄妹を見たいのだが、見に行つて泣き叫ばれたらどうしようかと考え、眠った頃にやってきたのだ。

「エーデルフィア、寝た？」

「ええ。この子が起きてる間に来なさいよ。大丈夫よ」

「でもさ、俺、オースティアの時に……」

「ああ、避けられたわね」

「聞いた聞いた。だからさ、余計怖いんじゃない？　自分がやったことだしね」

「俺は初めての年下の兄妹だから、何となく怖い」

兄妹たちとエイシェリナは、そう言ってエーデルフィアの眠るベツドのそばで話し続ける。そんなところで話したら、起きるとは考えないのかこの家族は。

だが、現在満腹状態のエーデルフィアは完全に熟睡状態に入っているため、そう簡単に目を覚ますことはしない。だからこそ、エイシェリナたちはその場で話し続けているのだ。

「大丈夫よ、人態を取っていれば泣かれたりしないから」

「ああ、だからお母さんも人態なのか」

「珍しいと思っていれば、そういうことかあ」

「なら、この子の前で本来の姿は厳禁ってこと？」

「そうしないと、――泣かれるわよ？」

『この子の前では人態をとります！！』

エイシェリナの言葉に、子供たち三人は声を合わせて宣言した。

小さな妹に泣かれたくない、その一心だった。

彼らの前ですやすやと眠る小さな妹。小さな小さな、生まれたばかりのドラゴン。慈しむべき対象。

「エーデルフィア、君は俺たちが守ってあげるね」

「愛してる、私たちの可愛い妹」

「絶対に、守ってあげるから安心して大きくなって」

眠る幼子に向けられる優しい瞳。小さな子供の健やかな成長を願

った優しい言霊。

小さな子供はその言霊を受けて、すやすやと、気持ちよく眠り続けていた。

町は未知の場所です

人！ 人！ 人！

先ほどの喫茶店を出て、冷静に町を眺められるようになった私は思う。見事に人だらけだ。

それにしても、この町っているいろいろな髪の色の人がいるな。金とか、紫とかね。

でも、どれだけ見渡しても青い髪、赤い髪の人は見当たらない。どうしてだろう。

「ねえ、人間の髪の色って、どうなってるの？ 人間には赤い髪の人とかいないの？」

「髪の色？ ああ、赤は俺たちドラゴンだけだ。後、青と白、黒、茶、緑もそうだね、人間にその髪色はない。その色はドラゴンだけだ」

へー。って、どうしてドラゴンはその色なの？ 尋ねるとあっさりと答えが返って来た。

「属性だよ。赤は火を表し、青は水を表す。緑は風を表し茶は土を表す。そして、黒は闇を表し、白は光を表す。全部、ドラゴンが司るんだ」

「で、その属性って言うのがどうなるの？」

「…………え、あーっと、それはお父さんたちに聞いてくれるかな？ 私たちにはちよつと説明が難しいや」

「教えてくれないの？」

「教えてあげられないの。わざと教えないんじゃないんだよ？」

何だ、教えてもらえないのか。お姉ちゃんたちも完全に理解でき

てないってことかな。残念。まあいいや、帰ってからお父さんたちに聞いてみよう。

「あ、それか王都に行く？　王都に長老がいるから、長老に聞けば簡単に分かるけど」

「王都？　近いの？」

「隣町。走っていけばすぐにつくよ。行く？」

「……行ってみたい」

王都には興味あるしね。人間の作った王都って、どんな風なんだろう。

「あー、でも、王都も一応お父さんたちの許可を取らなくちゃ。また今度だね」

「えーっ、今行けないの？」

「勝手に行ったらお父さんやお母さんに怒られちゃうからね。我慢して」

何だ、残念だな。でも、王都っていつかは行ってみたいよね。それに、お兄ちゃんたちがさっき言ってた長老って言うのも興味あるし？

多分、長老って何でも知ってるんだよね？　私の疑問なら大体答えてくれそうだよな。

「とりあえず、今日はいろんな店を見て帰ろうか。エーデルフィア、何か見たいものはある？　さっき飲んだジュースみたいなのとか、甘い食べ物とか」

ん？　甘い食べ物って、お菓子かな？　それは見たい！　見る！

「甘いを見る!!」

「よしよし、じゃあ行こうね」

甘い、甘い。楽しみだな、甘い。こっちの世界で食べられるお菓子はこういうものがあるのだろう。今のうちからとっても楽しみだ。

そしてそれは、お兄ちゃんたちには即バレだったらしい。お兄ちゃんたちの移動速度が早まってたよ、ありがとう。

「ほら、ついた。欲しいのがあったら言ってごらん、買ってあげる」
「うん! ありがとう!!」

おお、お菓子いっぱい、見たこと無いのがいっぱい。うわあ、うわあ!!

「ふふっ、エーデルフィア、楽しそうだな」

「いいじゃないの、可愛くて。ちゃんと見える? 見えないなら下りて、抱っこしてあげるから言ってね」

「ほら、こんなのはどうか? 美味しいよ」

店につくとすぐに、お姉ちゃんは優しい言葉をかけてくれ、お兄ちゃんたちはその店に展示されているお菓子のいくつかを見せてくれる。うん、美味しそうだ。

だがしかし、やっぱりお姉ちゃんのフードに隠れたままでは見づらいよ。

「おねーちゃん、抱っこして? 見づらい」

「はいはい。おいで」

お姉ちゃんはそう言って不フードを下ろす。それと同時に私はお

姉ちゃんの胸へと飛び込んだ。よし、よく見える。

ただ、そのかわりに私たちのまわりにいた人たちが息を飲む音が聞こえたよ。お兄ちゃんたちがドラゴンだって言うことは知っていても、私という存在は知らなかったんだろうね。

——人態を取れない小さなドラゴン。それが今の私。

そんな私は、この町の人からすればとても珍しい存在なのだろう、と私は考えている。

そしてこれはオマケ。お姉ちゃんがフードを下ろして私が見えるようになると同時に、お兄ちゃんたちはあたりに威嚇の気を飛ばしてたよ。あはは、ゴメンね。

「何か食べてみたいものはある？ エーデルファイアが欲しがるなら、何だって買ってあげる」

「んと、えとね！」

いっぱいありすぎてどれがいいって決められないよ！ だって、どれを見ても知らないものばかりで食べてみたい感じがするんだもん。

「ここからここまで、全部一通り包んでくれる？」

そうやって考えてたら、お姉ちゃんが勝手に頼んでたよ。ここからここまでって、結構範囲広いよ、いっぱいだよ！

そそ、そんなにいっぱい買っても大丈夫なの！？ ねえ、大丈夫なの！？

「これで、大体どのくらい？」

「はい、これで銅貨25枚です、竜神様」

「そう。エーデルファイア、今度は中を見ようか。欲しいのあったら遠慮なく言ってね」

え？　まだいいの？　銅貨25枚って、どのくらいなの？　この世界の金銭感覚がよく分からないから何とも言えないが、さっきの喫茶店以上にお金を使ってるってことは分かるぞ！　んきゅ！　でも、このくらいならまだまだ余裕の範囲だったらしい。

「銀貨3枚くらいまでならお菓子買ってもいいよ。あ、お菓子って言うのがこの甘いよね」

ぎ、ぎぎぎ、銀貨3枚まで！？　えっと、さっきの喫茶店でかかったお金が大体銅貨20枚だったから、えっと、んっと……。私の感覚で行けばどのくらいだろ……。よし分からないから放置。

で、確か銀貨って言うのは銅貨が100枚で1枚だから、銀貨3枚は銅貨300枚！？　デカイ、デカイよ……。

一応気持ちは小市民な私には、それは大金にしか感じられません、無理です。

「って、どうして涙目？　どうしたの？　大丈夫！？」

「きゅう……」

ダメだ、そんなの大金だよ、私には無理だよ。

「どうしたの！？　何？　そこらの人間が見てくるの怖い？　なら、殲滅するよ！？」

「きゅいーっ！！」

ちょ、殲滅って怖いよ！！　そこまでしなくても大丈夫！　っていうか今回は人間は何も悪くないから！！　私は全力でお姉ちゃんを掴み、何とか踏みとどまらせる。

だがお兄ちゃんたちを完全に止めるのは少々きつい。お兄ちゃん

たち、完全に目が本気だ。^{マジ}

「え？ 違うの？ ならどうしたの？」

でも、人間は悪くないって言うことはお姉ちゃんが早く気づいてくれたから、お兄ちゃんたちが人間を殲滅しに行かなくて済んだよ、よかった。

「どうしたのかお姉ちゃんに教えて？ じゃないと、人間に原因があるって考えちゃうからね。——本気で殲滅したくなるから」

こわっ！ お姉ちゃんたち怖いよ！ って、何気にお兄ちゃんたちも殺気を放たないで！

「違う！ 違うよ、人間は悪くないよ！ ただ、お金の使い方について、無理だと思ったただだよ！！」

「お金の使い方？ どうしたのエーデルフィア。エーデルフィアはそんなこと考えなくていいんだよ、いい子だから」

「でも、お金って出来るだけ使わないほうがいいんじゃないの？」

お金はあって困るものじゃないんだし、そもそも、お金ってどうやって手に入れてるの？

「気にしないでいいよ、というか、気にしちゃダメ。エーデルフィアは子供なんだから、大人しく私たちに甘えてればいいの。ね？」
「んきゅい？」

でもさ、やっぱダメ。小市民感覚が抜けない今だと、ただ甘えるだけならともかく、お金のかった甘えはイヤだよー。

でも、お姉ちゃんたちはそれを許してはくれないみたいだね。人

間を人質に私に甘えるように言ってくる。

「ほら、遠慮なく甘えなさい。じゃないと、そこいらに当たりに行く、かもね」

当たりに行く？ ……八つ当たり！？ それはダメだよ！ 私のせいでよけいな怪我なんてさせたくない！

「ほら、甘えて？ 何が欲しい？」

「ん、んきゅ……」

えっと、んっと……。

「んにゅ、きゅいつきゅー、きゅる」

これと、これとこれ。

「ん？ ああ、これとこれとこれね。包んでもらえる？」

「少々お待ちください」

よし、これだけ頼んでればいいよね、そうすれば人間も八つ当たりされないよね。

「ほかは？」

でも、それだけでは許されなかった模様。お姉ちゃんは暗に”もっと甘えないと人間に八つ当たりが飛んじゃうよ？”と訴えていた。怖いよ。

ええい、こうなったら。野となれ山となれ作戦だ。

「んと、じゃあこれと、これと……」

とにかく適当にたくさん選んでしまえ！　それがいくらになろうが知ったものか！　お姉ちゃんたちがいいって言ったんだから、適当上等！！

そしてお姉ちゃんは私が次々に指をさすたびに店員さんに包んでもらっていたよ。手加減は本気でなしでいいんですね。

そして、これまたオマケだが、私が次々にお菓子を指差している間、辺りを警戒していたお兄ちゃんたちは、表情だけはとってもにこやかだった。うん、それで殺気放ってるから余計怖いです。

結果的には、洞窟に帰るまではお姉ちゃんたちに引っ付いたままで、帰ってきて、お母さんの姿が見えた瞬間にお姉ちゃんの服のフードから抜け出してお母さんに飛びついたよ。めいっぱい。

「どうしたの？　人間に何かされた？」

違う。そんな意味を込めて首を横に振る。

「じゃあ、カーヴァンキスたちにいじめられた？」

いじめ……られた。――そうかも。

「そう、なのね。――カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス。こっちに来なさい」

「え！？　ちょ、俺たち何もしてない！」

「そそそそ、そうよ！　私たちがエーデルファイアをいじめるわけないじゃない！」

「だから、拳振り上げるの止めてくれ！俺たちは無罪だ！！」
「いいから来なさい。早く来ないと力加減が分からなくなるけど、いいの？」

お母さん、怖いです。ああ、何故私のまわりには怖い人しかいないのでしょうか。怖くない、普通のドラゴンに会いたい……。そう思う今日この頃です。

ちなみに、この後私が細かい説明をして、お兄ちゃんたちはお母さんに思いつき殴られました。ついでにお父さんにも殴られました。そしてその後、殺気をそう簡単に出さないようにするために、扱かれたらしいよ？

扱かれた後か前か、軽く睨まれたけど自業自得だよ？ 私悪くないよね？ 甘えないとそこらへんの人間に害を成すって言ってるお姉ちゃんたちのほうがよっぽど悪いしね。

「そういえば、今度王都に行ってみたいなあ」

「あら、ちようどいいじゃない。カーヴ、ティア、サーファ。特訓よ、エーデルファイアを怖がらせずにお出かけしてきなさい」

「怖がらせたらどうなるか——分かってるな？」

『わわ、分かってるよ！！』

この後も、また軽く睨まれたよ。でも、お兄ちゃんたちは私には甘々。すぐに睨むのをやめて、いっぱいかまってくれた。楽しかったよ。

エーデルファイアとしてドラゴンに転生して10年、私は相当腹黒くなっているようです。

未知の場所二箇所目です

今日の私たちの目的地、それは王都！ お兄ちゃんたちに聞いてから、王都に行ってみたかったのだ！

「一応この国の国王には忠告はしておいたが、気をつけるんだぞ。いいな？」

「うん？」

忠告？ この国の国王さんに？ わざわざ。

「何でそんなことしてるのっ！？」

「何でって、まだまだ小さなエーデルフィアが心配だからだろう。サーファたちは魔術も十分使えるから安心だが、エーデルフィアはまだ使えないからね」

だから心配で、わざわざ国王さんに忠告をして、私に害を成さないようにしている、と。過保護だなあ。

でもまあ、今日もお姉ちゃんたちいるし、何かあったら守ってくれるだろうからいいか。

というわけで、今日も私はお姉ちゃんの上で、フードに隠れている。今日はお姉ちゃんたちが怖くならないことを強く祈ります。

あ、でも今日はお目付け役のようにお母さんがいるから大丈夫かな。何かあったらお母さんに飛びつけばいいしね。

「大丈夫よ、フォンシュベル。私もいるし、何かあったら長老に話して、王都を更地にしてくるから」

「ああ、それなら長老の説得を手伝おう」

はい、王都を更地にするのはやめてください。そうならないよう私も頑張るよ！ 自分のせいで更地なんて作りたくないよ！

「じゃあ、行ってきます。んきゅー」

楽しみだな、王都楽しみだな。長老っていうドラゴンに会えるんだよね、ね。というわけで、今日もカーヴお兄ちゃんの背に乗って町へ下りる。が、今日は王都までずっと飛んでいくらしい。曰く、すぐ下の町から走って王都に行くのが面倒だったらしいよ？

とりあえず、楽しみだな。王都楽しみ。うふふー。

「エーデルファイア、王都に行くの、そんなに楽しみなのね」

「うん！ すっごい楽しみだよ！」

王都っていうか、長老に会うのがね。長老に会って、私の疑問をいっぱい尋ねるんだ！

そしてついた王都は、……超デカイ。おっきいよ、すごいよ。さすがは王都だよ。

でも、この辺山見当たらないよ？ 長老たちはどこにいるの？ どこに住んでるの？

あ、あっちにすごい大きい建物がある！ あれがお城？ あそこ人間が王様がいるの？

あれ？ あっちの建物も大きい。あっちがお城？ さっきのがお城？ ねえ、どっちー？

いやあ、軽く暴走しちゃった。いやだって、この間見た町よりもおっきいし、おっきい建物多いし、何か分からないものもいろいろあるし、ね？

ちなみに、まだ暴走は収まってないよ、小さな子供の探究心は抑えられないのだよ!!」

「おねーちゃん、あれ何!?! あそこのあれ!!」

「へ? どれ?」

「あれ! ほら、あれだよ!」

私は少し先にあるモノを指差し、お姉ちゃんに尋ねる。本当にあれ何? 食べ物? 雑貨?

「ああ、あれかな? あそこの店先に吊るしてあるやつ」

「それ! なにー?」

「あれは魔除け。王都だから、街の入り口に魔物除けの呪い^{まじな}はしてあるけど、それでも不安なところはあぁやって魔除けを吊るしてたりするの」

「へー。でもあれで、本当に魔物が来ないの?」

「来ないよ。あれは魔物が大嫌いなにおいを発してるから」

魔物の大嫌いなにおい……。それは一体どんなにおいなのか……。

「あのおいは嗅がないほうがいいよ。俺たちの鼻には、かなり痛いぞ」

先に釘を刺されたか。っていうか、私たちに痛いにおいって、人間は大丈夫なのか?

「人間は私たちほど鼻がよくないからね、大したこと無いの」

なるほど。つまり、このにおいにやられるのは鼻のいい魔物と、

私たちドラゴンですと。けっ、厄介だな。

私がそんなことを考えている間も、お兄ちゃんやお姉ちゃん、お母さんはどこかへ向かってどんどん突き進んでいた。目的地、どこなんだろ。

——って、これはまさか王城？ おっきいし、門のところに兵士の人がいるし。

「ここここ、これは、デリアの町の竜神様！ 長老様への面会でしょうかつ！？」

「ええ。長老はいる？」

「はいっ！ えーっと、人数は四名様でよろしかったでしょうか？」

「いいえ、五人よ。——エーデルファイア」

「きゅい？」

「——！ 小さな竜神様もいらっしやいましたか、申し訳ございません」

呼ばれたからお姉ちゃんのフードから出て顔出してみただけど、何だったの？ まいっか。

それから兵士さんは城に入って行き、私たちはその後ろを追った。うん、私だけ状況が全く読めない。何なんだ、こんちくしょう。——おっと、失礼。10歳のドラゴン（雌）が言うような言葉じゃなかったよ。

そして、通された部屋には一人、白い髪のおじいさんがいた。うん、誰？

「おお、久しぶりじゃな、エイシェリナ、カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス」

「久しぶりね、長老。今日はちょっと、この子が王都に来たがった

から、顔を出してみたの。迷惑だった？」

「この子？　——おお、お前がエーデルファイアか」
「んきゅい!？」

ちょ、お母さん、いきなり私をお姉ちゃんの服のフードから取り出さないで！　いきなりほかの人に渡さないで！　怖い、怖いって！

「おお、怖がらんでいいぞ、エーデルファイア。儂はドラゴンたちを取りまとめる長老じゃ。そうじゃな、大じいちゃんとも呼んでくれ。カーヴァンキスたちもそう呼ぶように言っているからな」

「お、おお、じいちゃん？」

確かに、今まで見た中では一番年に見える。それもそのはず、後から聞いたのだが大じいちゃんは既に数万年生きているとのこと。つええ。

うん、まあとりあえず、この人もドラゴン。長老で大じいちゃん。つまり、怖くないし質問にも答えてくれる、と。

「ふむ、さすがは現在の一番小さなドラゴン。愛らしいな。……この子の前に生まれたドラゴンは、どこの誰じゃったかのう？　サーファイルスだったか？」

「違うわよ長老。この子の前は、アンジェの町のキースエリナよ。サーファはその前」

「おお、そうじゃそうじゃ。キースエリナじゃったな。しかし、あの子ももう150くらいかの？　立派な大人じゃな」

うおー、大じいちゃんとお母さんで雑談タイムだ。そして、アンジェってどこ？　キースエリナって誰？　私のすぐ前に生まれたドラゴンですら、150年も前ですか？　ついでに言うなら、その前がサーファお兄ちゃんか。

私がそんなことを考えている間も、お母さんと大じいちゃんの話は終わらないみたいだ。

「ふむ、キースエリナの様子も今度見て見らねばのう。エイシェリナ、子供たちを連れて一緒に行くか？」

「うーん、そうね。一度挨拶に行ったほうがいいかしら？ ザツカスたち、キースエリナが生まれたあとに挨拶に来てくれたしね」

何々？ つまり、子供が生まれると、その前に生まれた子供のところに挨拶に行くって事か？

「ふむ、ではさっさと行くか。街を出たら儂はドラゴンに戻るからその背に乗るがいい。よいかの？」

「ええ、お願いね長老」

「しかしエイシェリナ、お前はいつから儂を大じいちゃんと呼んでくれんようになったのかのう、ちと寂しいわ」

「あら？ 大人になったら呼び方を変えるものではないの？」

「そんなもん関係ないのう」

って、いつの間にかどんどん話が進んでない？ ついていけないんだけど。ちなみにそれはお兄ちゃんたちも一緒らしい。

「ちよ、長老！ ちょっと待って、俺たちがついて行けない！」

「おお、カーヴァンキス、お前も大じいちゃんとは呼んでくれんのか」

「それは後！ いいから説明をくれ！ 今から、どこに、何をしに行くんだ！？」

「何って、キースエリナの様子見と挨拶よ。ほら、いいから街を出ましよう。早くしないと、いくら長老でも帰ってくる頃には日が暮れちゃう」

うん？　つまり、今から街を出て、大じいちゃんの背に乗って、アンジェって言う町にいるキースエリナという名の私の生まれるすぐ前に生まれたドラゴンに会いに行くと、そういうことか？

展開急すぎない？　王都に来てすぐ、また別の町に行くことになるとは思わなかったんだけど！

って考えている間に、私を抱いたまま大じいちゃんは城を出て、街の出入り口に直行していた。ちよつと待って！　心の準備がまだだよ！！

って、もう街出てる！　大じいちゃん、ドラゴンの姿に戻るのもうちよつと待って！　お願いだから待ってえええ！！！！

「ぴぎゃーっ！！！！」

大じいちゃんのドラゴンの姿おっきいよ、怖いよう。お母さん助けて、お兄ちゃんたち助けて。怖い、怖い、怖い、怖い、怖い！！

「どど、どうしたエーデルフィア！？」

「ああ、そうだったわ、長老。この子、カーヴたち以外のドラゴンの姿、怖がるのよ。おかげで私もこの子の前じゃ、基本人態でね」

「それなのに、目の前で長老、ドラゴンに戻ったから余計怖かったんだね」

「ほら、おいでエーデルフィア。お姉ちゃんの服のフードに隠れちゃいなさい」

「ぴきゅーっ！！」

「ああ、よしよし怖かったね」

ふええ、怖いよおっきいよ怖いよお。私がお姉ちゃんの頭の上に飛んで移動すると、お姉ちゃんはすぐにフードをかぶり、私を隠し

てくれる。お兄ちゃんたちはその状態で、私をよしよしと撫でてくれた。ありがとー。

「ううむ、ここまで怖がられるとは思わなんだな。予想外じゃ」

「多分、成長に伴って怖くなくなると思うから、それまではこの子の前では出来るだけ人態を取ってあげてもらえる？」

「分かっておる、怖がらせたくはないからのう」

ふええ、本気で怖いよう、大じいちゃんのドラゴンの姿大きすぎだよう。お父さんやお母さんがドラゴンに戻ったときよりも大きいよ、当然ながらカーヴお兄ちゃんたちよりも大きいよ。

でも、大じいちゃんの鱗は真っ白で、それはきれいだと思う。にぎりも何もない、純粋な白、純白だから。

でも、それでもドラゴンの姿は大きすぎて怖いです！！

「…………ア、エーデルファイア」

「んきゅ？」

「よく寝てたね。アンジェについたよ、そろそろ起きよう？」

ふわ、よく寝たな。っていうか、いつの間に寝たんだろう。

「よっぽど大じいちゃんのドラゴンの姿が怖かったのかな？ 私の頭の上に来て、すぐに寝ちゃったね」

「そなの？」

「うん、大じいちゃんの背に乗ってすぐに気づいたからね、エーデルファイアが寝てるって」

ううむ、そんなに早い段階で寝ていたのか。どうなんだろう、そ

れ、人として。……って、私今ドラゴンだったし。しかもまだ10歳で人の姿にもなれないちびちびだったし。深く考えちゃいけないよね、うん。

そう思いつつ、辺りを見渡す。おお、山だ。立派な山だ。緑がいっぱいで空気がきれいで、癒される山だ。

この山に、私のすぐ前に生まれたドラゴンが住んでるんだね。会うのが少し楽しみだ。——でも、出来るならばドラゴンの姿じゃなくて人態を取っていて欲しい。

その願いが叶うよう、会うまでの間、ずっと願い続けていたよ。この願い、叶ってくれないと私やバイし。

未知の場所三箇所目です

現在、私とお兄ちゃん、お姉ちゃん、お母さん、大じいちゃん、アンジェの町にいます。正確には、そのすぐそばの山にいます。目的は、私のすぐ前に生まれたドラゴンの様子見と挨拶らしいです。そして私は現在、しっかりとお姉ちゃんの服のフードに隠れています。だって、仮にドラゴンの姿を取ってたら、見た瞬間また叫んじゃう自信あるし。

「大丈夫じゃよ、エーデルフィア。じゃから、顔を見せてくれんか？　のう？」

「きゅ、きゅう……」

あ、やっぱ怖いわ。普通に話せない、鳴くことしか出来ないもん。

「む？　話してはくれんのか？」

「エーデルフィアは怖いときとか咄嗟のときは話したくても話せなくなるんだよ」

「ほうほう。まあ、まだ10歳じゃしの、問題はあるまいて」

「んきゅい……」

どうやって怖いよう。大体、どうして今日一日で家族以外のドラゴンに複数会わなくちゃいけないの？　今日は大じいちゃんだけでいいじゃんか、怖いよう。

ってしてたら、その私の前に生まれたドラゴン一家の住む洞窟についた、らしい。とりあえず私は今まで以上にお姉ちゃんに隠れるか。

「久しぶりじゃの、ザッカス。キースエリナはおるかのか？」

「ん？ おお、久しぶりだな長老。お？ エイシェリナたちも来たのか」

「ええ、子供が生まれたから挨拶にね。エーデルファイア、出ておいで。それとザッカス。エーデルファイアがドラゴンの姿を怖がるから、人態を取ってもらえる？」

「怖がる？ 分かった、ちょっと待ってくれ」

見えない聞こえない。私は何も聞いてない。出てくるように言われた言葉は聞こえてない、ドラゴンの姿は見たくない。怖いからイヤ。

って、お姉ちゃん、フードを下ろさないで！ 怖い！ 怖いってば！

「大丈夫だって。ほら、見てごらん。ちゃんと人態を取ってくれてるから」

「んきゅ……………」

なら、一応……………」

「おお、可愛いな。さすがはエイシェリナとフォンシュベルの子だ」

「きゅい！？」

じっと見ないで！ 怖い、怖いんだってば！！

「さて、キースエリナちよつとこっちへ来なさい」

「ん？ 何おとーさん」

きゅいーっ！ ドラゴンの姿だよ、お兄ちゃんたちよりも小さいからそんな激しく怖くは無いけど、やっぱり怖いよ！！

「キースエリナ、久しぶりね。私たちを覚えてる？」

「うん、久しぶり、エイシェリナさん」

「今日は私たちの子を紹介しに来たの。でも、ドラゴンのままだと私たちの子が怖がるから、悪いんだけど人態を取ってもらえる？」

「え？ うん、エイシェリナさん新しく生まれたの？」

「ええ、ほら、エーデルファイア出ておいで」

んきゅ、怖い、怖いって！ お姉ちゃん、私を頭から下ろしてお母さんに差し出さないで！

「この子がエーデルファイア。エーデルファイア、彼女はあなたの前に生まれた子よ。キースエリナって言うの」

「初めまして、エーデルファイア？ 私はキースエリナ、よろしくね」「よ、よよよ、よろしくおねがい、します？」

はう！ 疑問形になっちゃったよ！！ 疑問形にするつもりは無かったのに！！

「緊張してるんだね、可愛い」

「あわ、あわわわわ」

「すごい緊張してるね。そこまで身構えなくても大丈夫だよ？ね？」

わわ、分かってもそう簡単に緊張はほぐれないものなのです！
！ お願いだから今はお母さんたちと一緒にいさせて！ 怖い！

「ふむ、キースエリナ、エーデルファイアが怖がっておるようじゃし、今はこのくらいにしておれ。それに、今回の目的はお主の様子見じやしの。最近、体に違和感を感じたりはせんか？」

「うん？ 大丈夫だよ？ それがどうかしたの、大じいちゃん？」
「いやいや、たまにおるでの。気に掛けとるんじゃ」

とりあえず今は、おかーさん！！

「んもう、大丈夫だったら。怖くないからね」

お母さんはそう言いながらも、私を優しく抱きとめてくれる。お母さん好き。

「ほら、見てごらん。キースエリナは全然怖そうじゃないでしょう？ 大丈夫」

「きゅ、きゅい………」

うんと答えるはずが、また鳴き声か。どうしても、怖いときかは普通に話せないよね。それも、いつになったらそうならなくなるんだろう。そうならなくなる日が早く来てくれないかな。

ちなみに、今日はこの町、というかこの洞窟にお泊りらしいよ？ お父さんには先に伝えてあったとか。――いつの間に。

ん？ つまり今日は、私はこっそり知らないドラゴンたちと顔を合わせなくてはならないということか！？ 死ぬ！ 怖さで死ぬる！

「お、お母さん、帰ろ？ 帰ろうよ」

「ダメ。今から帰っても真夜中よ。こんな時間に帰ったら、フォンシュベルが驚いちゃう」

「帰ろうよ、怖いよう」

「大丈夫だったら。エーデルフィアのそばには、絶対にお母さんがいるからね」

あわわ、それでも何だか怖いんだよう。大じいちゃんですら、ま

だちよつと怖いのにその上ほかのドラゴンなんて、怖い対象以外何者でもないよ！

お兄ちゃん、お姉ちゃんもそばにいても、それでもやっぱり怖いものは怖いんだよう！ 帰る、お家帰るう。

「ぴきゅーっ」

「わ、どうして泣いてるの。大丈夫よ、ね？」

「そうそう。俺たちだっているんだから。だから泣かないで」

「ぴにゅー、怖いよー」

ふええええん。って、今日かなり泣いてるな。鳴いてもいるけど、それなりに泣いてもいるよ。

「だから、怖くないったら！ 大丈夫だよー」

お兄ちゃんたちは必死で宥めてくれるけど、やっぱり怖いよお。

「大丈夫だから。お泊りは決定なの」

「ふみゃああああああ！！」

「ど、どうしたの！？ エイシェリナさん、エーデルフィアどうしたの？」

「いやいや、ちょっと怖がつてるだけだから！」

「怖がつて、ああ！ 私たちが怖がられてるのかあ。エーデルフィア、私たち怖くないよー、何もしないよー。ほら、握手」

「きゅいっ！？ きゅるーっ！ きゃつきゅーっ！！」

「きよ、拒否られた……………」

あ、ごめんなさい。つい、本能的に……。ででででも、本能的な恐怖だからそう簡単に拭えないんだよう！

「きゅーっ！ きやるるー！！」

「あわわわわ、怖くないからね、怖くないよ！」

あのね、怖くないっていうのは感覚的に分かってるの。だが、だがね、本能が怖いって訴えてるんだよう。

しかも、キースエリナさんが私に話しかけてるときは、お母さんもお兄ちゃんたちも傍観者化してるから、助けを求めることも出来ないんだから。

「きゅー！ きーっ！」

そろそろ限界なんだよ、助けておかーさん、おにーちゃん、おねーちゃん！

「あらら。キースエリナ、そろそろ口挟むね。エーデルファイア、おいで」

「きやうー！！」

助けておねーちゃん！！ もうヤダ怖いー！ 本能的に怖すぎて限界だよーっ！！

もうヤダ全部ヤダ何もかもヤダーっ！！ この時は、転生したのを本気で後悔するぞこんにやろーっ！！

——はっ！ 失言でした、ごめんなさい！ ごめんなさい、だから怒らないで！！ 誰に対してってワケじゃないけど、怒らないで！

「ふう、ザッカス、悪いんだけど一部屋用意してもらえる？ 誰かの干渉を入れると、この子が大泣きしちゃう」

「分かった。だから、もう泣くなエーデルファイア」

だから、近寄らないで手を出さないで！ ザッカスさんも怖いの
！！

「ザッカス、この子泣かせたら殺すよ？」

「お、おい怖いな。泣かせないよう努力するよ」

「そうね、そうしてちょうだい。いくら私でも、キースエリナのお父さんを奪いたくはないからね」

お母さん、言ってること怖いよ。でも、近寄らないって言うのは歓迎だ。だって、怖いもん。

とりあえず、私は現在、しっかりとお母さんにしがみ付いている。しっかりと、きっちりと、何があっても離れないように。

それで、私たち家族だけになってやっと落ち着けたよ。でも、まだ怖いからお母さんからは離れない、これ決定。

「エーデルファイア、大丈夫だから少し離れなさい、ね？」

イヤ。お母さんの言葉に、私はしっかりと首を横に振る。だって、いつ、誰かほかのドラゴンが来るか分からないじゃないか！

だから絶対にはーなーれーなーいーっ！！ 徹底的にしがみ付くんだ、じゃないと剥がされるーっ！！

「ほら、離れなさいったら」

「やーだーっ！！」

「離れなさい！」

「やだ！」

「こら！ カーヴ、ティア、サーファ、手伝って」

「ほら、こっちおいでエーデルファイア」

「お姉ちゃんにならくっ付いていいから、ね？」

「前足、剥がすよ」

「やーだー！ 離れない、お母さんがいいー！」

何かあったとき、お母さんのそばが一番安心できるんだい！ だから、サーファお兄ちゃん、お母さんにしつかりとしがみ付けている私の前足を強制的に剥がし取ろうとしないでください、ティアお姉ちゃん、私を受け入れる準備万端にしないでください、カーヴお兄ちゃん、溜め息つかないでー！

えぐえぐ。強制的に前足を剥がされながらも足掻いたよ。お母さんにしがみ付いたよ。おかげで、お母さんは諦めた。落ちとしては、今まで以上にべったりです。

だって、あまりの強制さに私が泣いちゃったからね、今も泣いてるからね。だからお母さんたちも諦めてくれたんだよねー。あは。

「んきゅ、きりゅー」

「ああもう、分かったから。存分にお母さんにくっ付いてなさい。だからほら、泣き止んで」

「ゴメンね、そんなに怖いんだね。もう無理やり離したりしないから泣かないで」

一度泣き始めると中々泣きやめないのは人間もドラゴンも同じのようです。マジ泣きすると、中々涙が止まってくれません。

だからか、お母さん除いてお兄ちゃん、お姉ちゃんが必死だよ。私を泣き止ませるのに必死でいろいろやってるよ。焦りながら。

お母さんは優しく声をかけながら、私をよしよしと撫でてくれるだけ。でもすっごく気持ちいいです！ っていうか、気持ちよすぎだろー……。

……うとうと、ぐらぐら、——すう。……はっ!!

「眠いなら寝なさい？ いっぱい寝たほうが大きくなれるんだから」
「んー、でも、今寝たら夜にお腹空いて、起きちゃいそ……、ぐう」
「いいから寝なさい。ほら、エーデルフィアはいい子だからねー」

しゃべってても眠たい……。うん、限界だから寝るね……。おやすみー、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん……。ぐう。

夜。やっぱり空腹で目が覚めた。おかーさん、お腹空いたよー。

「あら、おはようエーデルフィア。ちよっと待ってね」

あ、お母さん案外近くにいた。探しに行かなくちゃかと思ったけど、その心配は杞憂だった。

そして、私が空腹なことに気がついたお母さんは、そばに置いてあった刃物を手に取った。！？ 何？ え!？

そしてその刃物は、お母さんの腕をきれいに滑り、お母さんの腕からはだらだらと血が流れ始めた。

——いいにおい。

「今日はお母さんの血で我慢してね。お家帰ったらフォンシュベルの料理を食べられるから」

「んきゅ、こきゅっ」

いくつになってもお母さんの血って美味しいものなのか？ 最初
は本気で抵抗あったけど、今は、抵抗？ 何コレ美味しいの？ 状

態だしなあ。

だって、美味しいんだよ？ 甘くて、優しくて、何かに例えることは出来ないけれど、それでも安心できる味なんだ。

んく、美味しい、落ち着く。——眠い……。

「よしよし、いっぱい飲んだし、また寝なさいね」

優しい、温かい。——眠りに、落ちた。

ただいまです

「おとーさん!!」

会いたかったよう、一日会わないだけで寂しかったよう。ぴにゅー。

「お帰り、エーデルファイア、エイシェリナ、カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス。キースエリナは元気そうだったか?」
「ただいま、フォンシュベル。キースエリナはもちろん、ザツカスもチェイリンも元気そうだったわ」

あ、チェイリンっていうのはキースエリナさんのお母さんの名前ね。会ったけど、会いはしたけど、恐怖で殆ど覚えてない、ごめんなさい。

だって、知らないドラゴンだよ!? お父さんやお母さん並みに大きいドラゴンだよ? 怖いに決まってるじゃん。

「きゅー」

「んー? どうしたエーデルファイア。お父さんと会えなくて寂しかったか? そうなら嬉しいな」

「んきゅー」

「お? そうなのか? エーデルファイアは可愛いな」

だって、お父さんに会えず、この大好きな空間洞窟にも戻って来れず、知らないドラゴンたちとの遭遇を果たしたんだよ? 怖かったんだよ?

——おとーさん! 安心できる空間、存在。大好きだよお父さん。

「よしよし、今日はずっとお父さんと一緒にいような」
「うん！」

お父さんがそう言うことは、今日とはにかくお父さんと一緒にいてもいいって言うことですね、分かります。

つまり、今日はずっと一緒にいれるから、疑問に思ってることも聞けるんだよね。ードラゴンの属性についてとかね。

大じいちゃんにドラゴンの属性を聞くつもりだったのだが、つついというか、恐怖のせいか忘れてたんだよね。

だからお父さん、おーしーえーてー？

「ん？ ドラゴンの属性？」

ドラゴンの属性は、まず六つに分けられる。お父さんやエーデルフィア、オースティアの赤色は、火。お母さんやカーヴァンキス、サーファイルスの青は水だな。

そして、長老とは会ったんだよね？ 長老は真っ白だったろう？

長老の白は、光を表す。

次は、属性とは何かの説明に行こうか。ドラゴンにとって属性というものは、一番加護の受けられる力、だ。

だから、カーヴァンキスたちは属性は水でも、炎の魔術を使えるだろう？ それは、一番加護の受けられるものが水であって、火を使えないわけじゃないからね。

そして、ドラゴンはその属性のものに接していると、何だか落ち着けるみたいだね。エーデルフィアは、近くで火を使っていると落ち着かないかい？ お父さんは落ち着くよ。

それに、お母さんは水と接していると落ち着くみたいだね。寧ろ、

火は若干苦手らしい。それは、お母さんの料理を見ていれば分かるだろう？

あ、これはお母さんには絶対に内緒だぞ？ 絶対にお母さんに言っちゃダメだからな？

——お母さんが、料理が壊滅的に下手だって。

うん、言わない。約束する。だって、言ったら絶対お母さんが怖いもん！

「よし、いい子だ」

「うん！ 私いい子だよ！」

「うんうん、いい子だな。ほかに聞きたいことはあるか？」

「んと、加護って言うのは結局どういうもの？」

「加護は、魔術を覚えたときに詳しく話してやろう。今のエーデルファイアには難しいからね」

何ぞそれ。今知りたいのに、今は教えてもらえないのか。まあ、属性のことを教えてもらえたからいいかな。

まあ、とにかく今は聞くこと聞いたし、お父さんに甘えておけばいいかな。すりすり、頬ずり。

「ははは、エーデルファイアは本当に可愛いな。ほら、この間買ってきたお菓子を食べようか？」

「きゅ！？ うん、食べるー！」

お姉ちゃんたちの脅しでいっぱい選ばされたお菓子。美味^{食べて}しいから幸せなんだよね。……昨日はお母さんの血しか飲^{飲んで}ないから余計。

「皿に盛るから少し待ってなさい」

お父さんはそう言って、買ってきたお菓子を取り出して皿に盛って行く。その途中で、お父さんはお菓子を一つ取って、頭の上の私に手渡してくれる。はぐはぐ。あ、お父さんの髪にお菓子がぼろぼろ落ちて行くや。

「ちょ、食べるなら下りてから食べてくれ」

「きゅー、ごめんなさい」

もらったから、ついつい早く食べたくなったの……。

「ふう、お父さんは頭を洗ってくるから、エーデルフィアはここでお菓子を食べながら待ってるんだぞ、いいね？」

「うん、ごめんなさい」

「謝ったからかまわないさ。今度からは気をつけるんだよ」

お父さんはそう言って頭を洗うためにどんどんと進んでいく。さて、私はお菓子をはぐはぐと食べながらお父さんの戻りを待つことにしよう。

あ、やっぱりお菓子美味しいわ。この世界のお菓子もかなり美味しくて幸せだわー。

とりあえず、お父さん早く戻ってこないかな？ どうせならお父さんと一緒に食べたいよね、美味しいし。

お兄ちゃんたちやお母さんは、昨日いなかった分のお詫びとして、お父さんのために大きいのを仕留めに狩りに行っちゃったし。

——お父さん、早く戻ってきてよ、寂しいよう。

「きゅる、んきゅー」

「お？ どうしたエーデルフィア」
「きゅいーっ！！」

寂しかったよう、寂しかったんだよう！ おとーさん！
私は髪を拭いながら戻ってきたお父さんに飛びついた。……片手
にお菓子を持ったままで。

「お、おお？ どうしたんだ」

食べて。お父さんに目線で訴えながらお菓子を差し出す。一緒に
食べて？ 一緒に食べよう？

「お父さんにくれるのか、これ？」
「きゅ」

うん。お父さん一緒に食べよう。一緒にいて、一緒に食べて、い
っぱいお話しよう？

「分かった分かった。ほら、エーデルフィア、あーんってするから
……」

ん？ これは口に入れてくれてことですか？ んしょ、よいし
よ。私はお父さんの口元に持っていたお菓子を運び、口に入れる。
お父さんはおいしそうに食べてくれたよ。

そして次は立場逆転らしい。お父さんは片手で私を抱き、余った
片手でお菓子を取り、私の口元へと運んでくれた。

「ほら、あーん」
「あー、むっ」

うん、美味しい。だから、今度は私の番ー。

「おとーさん、はい」

「あら、楽しそうじゃない。エーデルフィア、お母さんにもちようだい」

そうやってしばらくしてたら、お母さんたちが帰って来た。お母さんにも求められたから、しっかりとお母さんにもあーんってしたよ。お母さん、喜んで食べてくれた。喜ばれると幸せに感じるからいいな。

あれ？ 今度はお兄ちゃんたちも？ いいよ、順番にあーんってしてー。

「うん、美味しい。エーデルフィアもあーんってして、ほら」

「あーん」

「次私ねー。エーデルフィア、ちようだい」

「うん！ あーんってしてー」

「あーんっ。んぐんぐ、美味しいなあやっぱり。次はエーデルフィアの番。口開けてー」

「あーん、むぐむぐ」

「次！ 次俺！」

こうして結局お菓子の食べさせ合いっこはお父さんと私じゃなくて、お兄ちゃんたちと私になっちゃったよ。楽しいけどね。楽しいからいいんだけどね。

そうこうしていると、お父さんの用意してくれたお菓子はあつという間になくなってしまった。いっぱい食べたなあ。

ちなみに、お父さんはこの間にご飯の準備にかかっていたよ。

でも、でもね……、いっぱいお菓子食べて、いっぱいお話しててしたからかな？ 眠たくなってきたの……。

「眠い……、寝て、いい……？」

「ん？ ああ、俺たちが狩りに行っている間に寝てなかったのか。なら、眠たくなるだろうね」

「なら、寝ちゃえ、寝ちゃおう？」

「よしよし、俺たちがいるから安心してお休み？」

「うん………」

もう、ベッドまで戻るのも面倒くさいから、そのまま眠るね……。
おやすみ、なさあい。

「……、……ルフィア……？ 起きてる？ ご飯だよ」

「んみゅ？」

「おはよう、ご飯の用意が出来てるよ。起きて、食べたらまた寝ようね」

んあー、よく寝た。でも、さっきいっぱいお菓子食べたからそんなに空腹いてないなあ。

でも、食べなくちゃね。だって、お父さんの料理だもん、昨日は食べられなかったご飯だもん！

——だから。

「ふう、やっぱりお昼寝の後は自分で飛ぼうとしないんだね」

「だって、落ちたし」

「うん、でも恐怖は頑張って振り払わなくちゃ」

「お姉ちゃんは、私が飛ぶのに失敗して落ちてでもいいの？」

寝起きで、潤んだ瞳で訴えてみる。落ちるのは痛いからイヤだなあ、痛かったもんなあ。

だから、お願い肩に乗せてー。肩に乗せて運んでー。

「ふう。ま、まだ10歳だからいいか。まだ小さいもんね」

「うん！ おっきくなったらちゃんと自分で動くから、ちっちゃい間はお願ひ」

そうして席に着くと、美味しそうな料理が私たちを出迎えた。お父さん、昨日の分も込めて、料理にかなり手を込めたね！？

「さ、食べようか」

お父さんの言葉に、喜んで齧り付いた。にくー、くさー、ごちそうー！

あ、いつも以上に肉に味がしみてるよ美味しいよ。これはかなり長時間煮込まなくてはこのまで味がしめないのではなからうか。

んぐんぐ、はぐはぐ。って、今日は肉と骨を別の料理にしているのか。骨は骨だけで別の味付けがされてるもん。

「美味しいか？」

「美味しいわ、さすがフォンシユベル」

「んまい」

「ホント美味しいー」

「この味付け、今度教えてくれなー」

「んきゅー！！」

お父さんが問いかけると、みんなが順番に返事を返す。やっぱり全員の答えは一緒、美味しい、だ。

だって、美味しいんだよ、これ。あんまりお腹が空いてなくても食べたくなるもん。

でも、やっぱりお菓子でたまったお腹には、ちょっときつかったかな。

「ん？ もういいのか？」

「うん、お腹いっぱいー」

「いつもはもつと……、ああ！ お菓子を食べたからか」

うん、そのとおり。お菓子がまだたまってるから、ご飯がいつも以上に食べられないの。せっかく美味しいのに。

でも、無理やり食べたらお腹が痛くなりそうだからやらない。ドラゴンは、お腹が痛くなっても温かくして寝るくらいしか治療法がないから、しばらく苦しまなくちゃだしね。

「さ、もう食べないのなら寝なさい。ぐっすり寝て、大きくなろうな」

「うん。おやすみ、お父さん、お母さん、カーヴお兄ちゃん、ティアお姉ちゃん、サーファお兄ちゃん」

「ああ、おやすみエーデルフィア。よい夢を」

さて、私はベッドに戻ってぐっすり寝るとしよう。今の私は食べてすぐ寝て大きくなるのだから。

食べた分の栄養をしっかりと成長にまわすためにも、とにかく今は眠らなくては――。

洞窟を満喫しましょう

んきゅー、きゅるー。今日はお兄ちゃんたちと一緒にこの洞窟の探検だー。この洞窟は広いから、探検のしがいがありそうだね。でも、私一人で探検をすると、間違いなく迷子になりそうなので、今日は案内役にお兄ちゃんたちがいるのだよ。これで迷子にはならないね！

「さて、まずはどこに行くよ？　とりあえず奥から見えていってみる？」

「うん！」

知らない場所は、見て覚える。というわけで、自分たちの住処くらい覚えておきたいから案内してー。

というわけで、やって来ました、洞窟の最深奥。初めて純粹に行き止まり見た！　ここが行き止まりだ！

「エーデルフィア楽しそうだね。洞窟の一番奥を見ただけでこのテンションって、大丈夫かな？」

「疲れて寝ちゃったらベッドに運んであげればいいんじゃない？　ねー、エーデルフィア？」

「うん！」

疲れたら、多分お姉ちゃんの頭の上でも寝てると思うから、そのときはベッドに運んでくれると嬉しいかな。

とりあえず、お兄ちゃんたちの頭の上で寝ることは無いと思う。だって、髪の毛つんで気持ちよくないし。

というわけで、最奥部から少しずつ、入り口や私たちの居住空間

のほうまで、のんびり進んで行こー！

「あ、何か置いてあるー！ あれ何ー！？」

「ん？ ああ、ここ物置にしている空間だからね。エーデルフィアが言ったのは、お父さんの料理道具の一つ」

「そして、ほら。これ、エーデルフィアが人態を取れるようになったら着せようと、お母さんが集めてる服たちだよ」

ん？ 私が人態を取れるようになったら？ って、お母さん用意早くない？ 人態って100近くにならないと取れないんじゃないの？ 私まだ10歳なんだけど。

っていうかさ、これって私よりも、ティアお姉ちゃんのとて言われたほうが説得力あるよね。

「これ、正真正銘エーデルフィアのだからね？ 私のは別にしまっているし」

「あ、そなの？」

「お母さん、服とかってかなり早めに用意しておくタイプみたいだからね。お兄ちゃんもそうだったみたいだし、私も、サーファのときもそうだったからね」

お母さん、結構早いうちに用意して、成長を楽しみに待つタイプ？ うーむ、私がこの服を着るのは何十年後の話だろう。

ま、いいか。お母さんだって分かってやってるはずだしね。急いで人態を取ろうとせず、のんびり大きくなろう。

でも、食えるときはいっぱい食べて、そんで動き回って疲れて、いっぱい眠るよ。そのほうが大きくなれるもん。

「さー、物置部屋を見てばっかりじゃ面白くないし、次行こうか」
「サーファの言うとおりでね。行こう、エーデルフィア、お兄ちゃ

ん」

「おお、そうだな。行こうね、エーデルファイア」

おー！ 物置で自分がいずれ着るであろう服を見ていたって面白くもなんともない！ 次だ次ー！！

そして次についた場所は、カーヴお兄ちゃんの私室だった。お兄ちゃん曰く、元々の状態から追加して掘って、部屋を広くしているらしい。どおりで広いと思った。

それにしても、カーヴお兄ちゃんの部屋って、何て言うか、殺風景？ お兄ちゃんがドラゴンに戻っても眠れるようなベッド？ っ
て言うのか、これ。

前世で見た某アニメの干草のベッドのようなものがあつた。でけー、私が寝たら、どこまでも寝返り打てるよ、これ。

事実、お姉ちゃんから下りてベッドに飛び移り、ごろごろごろごろどこまで転がっても、ベッドから落ちることはおろか、ベッドの端まで行くことすら出来なかった。

「エーデルファイア、俺のベッド、そんなに楽しい？」

「うん！ カーヴお兄ちゃんのベッドおっきいー！」

「まあ、エーデルファイアからすれば大きいよね。でも、ティアたちのもそんなものじゃないか？」

た、確かに！ でも、お姉ちゃんとか、サーファお兄ちゃんのドラゴンの姿ってあんまり見ないから、ベッドの大きさを想像し辛いつて言うか……………。

ちなみに、お兄ちゃんの部屋には、あとはちよつとした筆筒と机が置いてあるだけでした。うん、次行こう？

っていうか、お兄ちゃんたちの部屋、結構並んでたんだね。お姉ちゃんたちも自力で掘って部屋を広くしてるんだね。

「ほら、私のベッドも大きいでしょ？　飛び込んでいいよー」
「うわぁい！」

許可が下りたところで、思い切りダイブ！！　ごろごろ、ごろごろ。お姉ちゃんのおつきいー、ごろごろしがいるー。いくらごろごろ転がっても、やっぱりベッドの端にすらつかないあたりが、ベッドの大きさと私の小ささを物語ってるよね。

それにしても、私が自分の部屋を手に入れるのはいつの話だろうなあ。まあ、まだまだいらないんだけどね。

そして、しばらくごろごろして落ち着いたところで、冷静にお姉ちゃんの部屋を眺める。お姉ちゃんの部屋は、お兄ちゃんの部屋と比べると、中々華やかだった。

だって、ベッドのほかに筆筒、机が置いてあるのは変わらないけど、そのほかに花とかいっぱい飾ってあったもん。やっぱり、花の一つだけでも雰囲気はかなり変わるよね。

って、あれ？　机の上に何か置いてある。何だろ？　パタパタと飛んで、机の上に飛び乗る。

机に飛び乗ると、そこに置いてあった本かな？　これは。とりあえず、本の表紙が目に入った。……………読めない。

「お姉ちゃん、何て書いてあるの？」

「観察日記」

「観察日記？　何の？」

「ナ・イ・シヨ」

ナイシヨって、ひどいなー。そう言われたら余計気になるじゃないか。だから、ね？

「おーしーえーてー？」

んきゅる？　とにかく、じっと見つめる。お姉ちゃんたちが折れるまで、とにかくじっと見つめるべし。

「ねえ、お姉ちゃん？」

少し首を傾げて問うてみるべし。

「お姉ちゃん、教えて欲しいな？」

最終手段、少し目を潤ませて、じっと見つめるべし。

「んきゅ、知りたいのに……」

「わわ、ゴメンね！　でも、教えられないって言うことは変わらないの、ゴメンね！」

「んきゅう……」

何だ、結局教えてもらえないのか。うーん、私には難しい内容なのか？　それならそう言ってくれば簡単に諦めるんだけど、何も言わずに断られるとちょっと辛いなあ。

あ、やばい。目にどんどん涙が溜まって来た。これは、——落ちる。

「わーっ！　なな、泣かないでエーデルフィア！」

「ティア姉、もう少し優しい言い方すればよかったんだよ！」

「ごご、ゴメン、エーデルフィア！」

ふえ、謝らないで。泣いたのは私の勝手なんだからさ。泣いたことに関してはお兄ちゃんたちは何も悪くないんだから、謝らないで

よう。

考えてたらどんどん涙が溢れ始めた。ふええええええ。

「ゴメン、泣かないで！」

「そ、そうだ。今度本を読んであげようね。それで文字を覚えるといいよ」

「俺も読んであげる！ だから泣き止んで！」

ううう、それでも中々泣き止めないんだよ、えぐえぐ。とりあえず、今はお姉ちゃんに抱きついて宥めてもらっている。

でも、やっぱり中々泣き止めず、お姉ちゃんの部屋を去れずにいる。お兄ちゃんたち曰く、この状態でお姉ちゃんの部屋を出て、仮にお母さんにでも見つかるうものならば何をされるか、何を言われるか分からないから、らしい。

そして、今日はようやくで泣きやめた頃には完全に疲れ切っていた。うん、もうお姉ちゃんのベッドでそのまま寝てもいいかな？ おやすみなさい。

だってね、だって、もう眠たいんだよ、泣きすぎて。だから、そのまま寝かしてね――。

目が覚めたら、自分のベッドに寝かされてた。あの後運ばれたらしいね。全然気がつかなかった。

それにしても、何だか目元が若干腫れぼったい感じ？ 泣いて眠ると目が腫れぼったくなるのは人間もドラゴンも同じなのか。

それに、完全に泣き止めずに寝たからか、どうも頭がボーってするね。って言うか、熱あるときとかこんな感じだよな。

……熱出したかな？ でも、ドラゴンって熱出すのか？

聞きに行くか？ でも、頭がボーっとしすぎて起き上がるのも辛

いな……。

「エーデルファイア、目が覚めたの？」

「んきゅー……」

おお、グッドタイミングです、お姉ちゃん。

「あれ？　ちょ、大丈夫？　ちょっと抱き上げるよ」

「きゅー」

おお、私に触れるお姉ちゃんの手が冷たくて気持ちいいぞ。っていうか、気持ちよすぎるだろ……。

「ちょ！　お母さん、エーデルファイア熱い！」

「え！？　オースティア、エーデルファイアを！」

お姉ちゃんがお母さんにそう言うのと、私の身柄はお母さんに移る。おお、お母さんの手も冷たくて気持ちいいぞ……。

「あ、ああ！　何てこと……。大丈夫？　辛いでしょう？」

「きゅー」

うん、しゃべる余裕も無いくらいに辛い、頭がボーッとするの。

「可哀想に、今日は一緒に寝ようね。ずっと、看病するから」

「きゅー、きゅー」

あ、お母さんと一緒に寝れるのは嬉しいな。というか、今は頭ボーッとするから起きていたくないな。寝てもいいかな？

っていうか、もう寝るね。だって、お母さんの手が冷たくて気持ち

ちいしさ。

また目が覚めたら自分のベッドだったよ。ただ一つ違うことは、ベッドの場所が移動してること、いつもみんなが集まる部屋に置いてあるって言うことかな。

これは嬉しい。だって、目が覚めたらみんな、そばにいるんだ、そばにいてくれるんだ。

「目が覚めたのね、エーデルフィア。ご飯は食べれる？」

「んきゅ、いら、にゃい」

ご飯は、珍しくというか転生して初めて食べようと思えないんだ。そうしていると、光るものが目に入る。

……お母さん、ナイフ持たないでよ、怖いよ。

「ほら、食べられなくても飲みなさい。お母さんの血は栄養があるんだから」

「んきゅ」

あー、そのための刃物ね。でも確かに、今は何かを食べるよりは飲むほうが楽だね。それに、飲むものはお母さんの血だ。美味しい美味しい、お母さんの血なんだ。

そう考えている間に、腕からだらだと血の流したお母さんは私の眠るベッドに近寄ってきていた。私はお母さんの血を求め、必死で体を起こす。

「ん……きゅ……」

なのに、鼻先にいいにおいが漂っているのに、体を起こすのが辛

い。

「よっぽど辛いね。ほら、抱えあげるよ」

お母さんは言うど、血の流れていないほうの手で、必死に起き上がろうと足掻く私を抱き上げ、血の流れる腕の目の前まで運んでくれる。

やっと、目の前にご馳走が……！

「んつく、こきゅ、んきゅ」

体は辛くても、目の前にいいにおいが漂っていれば本能的に求めに行くものなのです。あまり食欲は無かったはずなのに、お母さんの血はすなりと私の体におさまっていく。

でも、やっぱり調子は悪いみたいだ。いつもよりもかなり早く、満腹だと感じられた。

「もういいの？」

「きゅ」

「なら、また寝なさいね。一晩ぐっすり寝れば元気になれるから」

うん、その言葉信用してもいいんだよね？ 早く、元気になりたいな。

元気いっぱいです

うん、一晩ぐっすり寝たら、次の日の朝には元気いっぱいだった。のに、なのに！今日は狩りに行くのはもちろん禁止だし、お父さんとお母さんの目の届かない場所に行ってはいけないという条件が出された。

元気だと言っているのに、それでもそこまで私の行動を制限するか！

「エーデルファイア、自覚してないんだろけどまだ熱いんだよ？今無理をしたらまた昨日みたいに辛い思いをすることになる。いいのか？」

「……………まだ熱い？」

そう言いながら、甘えも兼ねてお父さんに頬ずりする。お父さん気持ちいいー。

「やっぱり熱い。お父さんの手、冷たく感じるだろう？ エーデルファイアがまだ熱いんだ」

「でも、元気だよ？」

「昨日がひどかったから元気に感じるだけじゃないか？ いいから無理をせずに休もう」

くう！ 逆効果だったか！ でも、お父さんの手は本気で冷たくて気持ちいいんだよ。くそう。

でも、大人しくなったからって、寝るわけじゃないよ！ お父さん、私を無理やりベッドに下ろそうとしないでください。私はまだ寝るつもりはありません。

「きゅー！ きゅるつくー！！」

「あ、こら暴れるな。暴れたらまた辛くなるぞ」

やだー！ ベッドに下ろされたら強制的に寝かされるはずだ！
お昼寝と夜以外に寝るつもりは無いんだい！

「ほら、休みなさい、いい子だから」

「やだ！ 元気だから寝ない！」

子供の時間というものは短いのに、それをこんなことでふいにし
てたまるか！

だから、強制的に下ろそうとしないで！ お父さんの頭の上でも
十分に大人しくしておけるじゃないか！！

「エイシェリナ、手伝ってくれ」

「ふふ。エーデルフィア、お母さんの頭の上においで」

「うん！」

寝なくていいなら移動するー。というわけで、現在お母さんの頭
の上。え？ ちゃんと大人しくしてるよ？

「フォンシュベルもまだエーデルフィアが分かってないみたいね。

エーデルフィアは、頭の上では基本大人しくしているものよ？」

「むむ、そうなのか……」

ま、お父さんの上だと、アレ見たいこれ見たいで動き回るけどね。
お父さん、聞いたら丁寧な説明をくれるんだもん。お母さんは、言
っちゃ悪いけど説明がすごいアバウトなんだ。

だから、お母さんの頭の上だと基本大人しめ、でも、お父さんの
頭の上だと、質問尽くし。あはは、子供だからいいってことにして

おいて。

というわけで、お母さんの頭の上で大人しくしている。が、大人しくしようと意識すると、どうしても眠くなるものなのか。お母さんは温かいし、落ち着くし、気持ちいいしで……、眠くなってきた。

だ、だがね！ 寝ないよ、寝ないんだから！ せめてお昼寝の間って言っても違和感のない時間までは起きておきたい。今寝たら完全に”昼”寝じゃなくて”朝”寝だ。

うとうと、ぐらぐら。眠い、眠いんだけど……。………！
きしゃーっ！！

「お、怒るなエーデルフィア。眠いならベッドで寝ような？」

そろーっと私をお母さんの上から取って、ベッドに運ぼうとするなーっ！！ そんな意味を込めて、私はお父さんにこの鋭い爪を見せ、威嚇する。人間の姿を取ったお父さんには、私のこの爪は十分凶器となるようだ。

そうやって威嚇した私と、それでも私をベッドに運ぼうとするお父さん。睨み合いが始まったよ、負ける気は無いよ！

「眠たいんだろう？ なら、ベッドで休もう、な？」

「まだ寝ない！ まだお昼寝の時間じゃないもん！」

今はまだ朝だもん、早いもん。

「そういう問題じゃないだろう？」

「じゃあ、どういう問題？」

「そう言うのを考える余裕があるなら、今は眠りなさい、ね？」

今は寝ない！ まだ朝だから寝ない！ 絶対に寝ない！！ あ、お昼すぎたら寝るよ？

「まだ寝ないやー！ 元気だもん、大丈夫だもん！」

きしゃー！ とにかく爪を出した状態で前足を振り回す。お父さんにはいい威嚇。でも、今回はそこまで意味が無かったみたいだよ。あっさりと私の前足はお父さんに掴まれ、強制的に黙らされて捕獲された。

「さあ、ベッドに下りようか。そのまま寝るんだよ？」

「やーだー！！ 寝ない、寝ないからね！」

くそう、どこまで徹底的に寝かすつもりだ！？ まだ寝ないって言ってるじゃないか！！

はーなーせー！ はーなーしーてー！ 足掻くのだが、お父さんはしっかりと私を抱き、というか捕獲していて離してくれない。このままでは完全にベッド一直線だ。

「寝ないー！ 起きてるのー！ 離してよー！」

どれだけ訴えてもお父さんは離してくれない。しまった、ベッドはすぐそばだ！！

「ほーら、いい子だからベッドで寝ような」

寝るもんか！ ベッドに下ろされた瞬間に起き上がり、羽を広げ飛ばうとする、が、当然ながらお父さんに阻止された。お父さんは私の羽を掴み、羽ばたけないようにする。

くそう、離してー！ 寝ないんだからベッドにいる必要なんて無

いじゃないか！

「寝なさい。いい子だから大人しく寝なさい。いいね？」

「よくない！」

「いいね？ 寝なさい」

……うーむ、今のお父さんには何を言っても無駄かな？ 仕方がない、今は寝たふりでもして、しばらくしてから元気いっぱい動き回るか。

くりっと丸まる。お父さんが安堵の息をつくのが聞こえる。……しばらくは寝たフリを遂行します。

——……あ！！ 寝てたし！ 普通に寝ちゃってたよ！

しばらくは寝たフリをしておく予定だったのに！！

それなのに、目が覚めたらご飯の少し前か！ お兄ちゃんとお姉ちゃんたちがそばにいたよ。

「おはよう、エーデルフィア。調子はどう？」

「よく寝てたね。もうすぐご飯だけど大丈夫？」

「辛いんなら、無理せずに言ってるね？」

「きゅー、へーき……」

ちょっと寝惚けてるだけだし。しかし、まだ結構調子悪かったんだね、こんなにずっと寝ちゃうなんて。

目的としては、あのときしばらく寝たフリをして、こそっと起きてお昼過ぎに完全にお昼寝してご飯前に起きるつもりだったのに。

「本当に大丈夫？ 無理はしなくていいんだよ？」

「だいじょーぶだよー？ まだちょっと眠いだけだから」

これから動けば目も覚めるから何の問題もないって。だから、動きたくなるネタが欲しいな、お兄ちゃんお姉ちゃん。

とりあえず、今はお姉ちゃんの頭の上に移動するか。

そうやって移動したら、何でかな？　すぐに下ろされて、抱きしめられた。

「うん、昨日と比べるとそんなに熱くないね。昨日は焦ったよ、本当に」

「えっと、その……ゴメンね？」

「謝らなくていい、エーデルフィアは悪くないからね」

そうしてたら、お兄ちゃんたちからも手が伸びて、思いっきり撫でられた。気持ちいいからもっと！　もっと撫でて！

「うん、そんなに熱くない。もう大丈夫かな？」

「エーデルフィア、今日はいいのを手に入れたからご馳走のはずだよ。今日はしっかり食べて、完治させようね」

「ご馳走！？　うん、いっぱい食べる！」

ご馳走楽しみ！　昨日は食欲なかったからお母さんの血しか飲んでないんだ、今日は食べるー！！

あ、でもにおい的にはご飯までもうちよつと時間ありそうだね。それまでどうしようかな。

うん、まあいいか。とりあえず今はお姉ちゃんに抱かれたままでもいいよう、落ち着くからね。

「カーヴ、ティア、サーファ。エーデルフィアは起きた？　……つて、起きてるね、調子はどう？」

「おかーさん！」

うわあい、お母さんとお母さん。私はお姉ちゃんの腕から抜け出し、お母さんに飛びつく。

おかーさん抱っこして！ かまって！ 撫でて！！

「ああ、よかった。大分熱くなくなったね」

「うん！ もう大丈夫だよ、元気だよ！」

だから、遊んで、かまって！ ご飯まで時間があるんだから、それまで遊ぼう！

「きよ、今日のこの子は随分と甘えん坊ね」

「いいんじゃない？ 可愛いから」

「私も思う。可愛いは正義」

「確かに」

あはは、何かよく分からない正義が出来上がってるけどまあいいのかな？ 可愛いは正義って何。

でも、かまってくれるんならそれでいいや。

「わーい！ 遊ぼう何かしよー何かしてー！」

「ふふ、何をする？ エーデルファイアは、まだ無理はダメだよ？」

「んっと、えっと……。あ、そうだ！ 何か本を読んで」

私が大泣きしちゃったとき、お兄ちゃんたち言ってたよね？ 本を読んでくれるって。だから、読んで！

「エーデルファイアの文字の勉強になるような本は何があったかな……」

「書庫を見に行く？ ああ、でもそうしたらその間にご飯出来るね」

え？ あれ？ それだと本読めないって言ってるよね？ 約束は？
面白くなあい！

「ひーまー！ 本ー！」

「ちょ、読まないとは言っていないんだから。読むなら明日書庫を見に行ってからにしようね」

うむう、なら今日はどうしようか。ご飯、まだ出来ないかな。ご飯が出来るまでは退屈だよ。

退屈なときって、何してたかな？ こう、大体がお母さんと洞窟を出てどこか行ったり、お兄ちゃんたちとどこか行ったり……、つて、どこか行ってもやっぱりじゃん！

今日は、多分出れないよね、出してもらえないよね。でも一応……。

「お母さん、退屈だし洞窟の外に……」
「ダメ」

行きたいな、って最後まで言えなかったよ。言い切る前に反対が飛んできた！

「だって、退屈だよ」

「今無理をしたらまた明日熱くなっちゃうでしょ。今日は洞窟から出たらダメ」

「そうだよ。ああ、そうだ。お父さんがご飯作つてるところを見に行こうか。うん、そうしよう？」

お父さんの料理シーン……。うん、見る！

「目が輝いたね、行こう」

あ、お母さん来ないでね、怖いから。手を出しそうで怖いから。黒魔術展開されるのいやだから。

ちなみに、その意見はお兄ちゃんたちも同じようです。

「お母さんは来ないでね、料理に興味持たれると俺たちが危ないから」

「うん。前みたいにエーデルフィアに泣かれたら困るからね」

「お母さんの料理は呪いだ」

うん、呪いだよね、黒魔術だもん。だから、お母さん除くでお父さんの料理を見に行こー！

「お、どうした？ ご飯ならもうすぐだぞ？」

「お父さんがご飯作つてるところに見に来ただけだよ」

「そうか。ああ、近寄りすぎるなよ、危ないからね」

お父さんはそう言いながらも忙しく動いている。あ、いいにおい。

「エーデルフィア、今日は期待しておけ。カーヴたちがいいのを捕らえてきたからな」

「うん！ 聞いた、楽しみ！！」

すっごいいいにおいもしてるから、楽しみが増えたよ。ふふ、今日は本当にご馳走かな。

ついで。置いていかれたお母さんにご飯のときに遭遇したら、何か怒ってた。怖かった。

ご馳走の時間です

「いっただっきまーす!!」

ご馳走ー！　すごい美味しそうー！　いただきまーす!!
言うと同時にかぶりつく、味わう、美味しい!!

「美味しいかい？」

「美味しいー!!」

もう最高!!　昨日食べられなかった分、今日はいっぱい食べれて幸せだね。肉ー！　肉ー！

あ、ちゃんと草もあるんだね。草も食べなくちゃ。肉を食べて、草を食べて、平均的に食べると健康によさそうだし。

健康っていいよね。健康って、平和だよ。健康だったら何にも阻止されたりしないから、健康を目指すよ!!

それにしても、今日は最初から肉と骨が分けてあるんだな。食べやすくっていいんだけどさ、いいんだけどね。

でも、ご飯のときにお姉ちゃんに骨と肉を分けてーって頼むのも楽しいんだよね。

でも、美味しいからそれでよし!!

「おっと、ペースが随分と早い。詰まらせないようにね？」
「きゅー!!」

分かってるよ！　詰まらせたくないもん。でも、美味しいからつついっぺースは上がるんだよう！

もう、美味すぎる！　幸せすぎる！　最高すぎだろ!!

「きゃふっ」

美味しかった、満腹ー。お腹ぽんぽこりんだ。今お腹を叩いたらぽんぽん音がしそうだな。

昨日ご飯を食べられなかった分か、ホントいっぱい食べたわー、幸せだわー。

「うっわー、まさか全部食べるとは思わなかった……」

「ふふ、かまわないさ。満足したか？ エーデルファイア」

「うん！ お腹いっぱいー」

それだけ考えればとっても幸せだよ、幸せさ。――でもさ、お母さん、いつまで怒ってるの？

「お、お母さん？」

「何」

疑問形でもなんでもないよお母さん！ まだ置いていったこと怒ってるの！？ そろそろそのお怒りを解いてよー。

お母さんの言葉に感情を感じられないからすっごい怖いよー。おとうさーん、手伝って！

「エイシェリナ、何をそんなに怒ってるんだ。ほら、エーデルファイアが怯えてるぞ」

お父さんは飛び込んできた私を撫でながら言う。お母さんが怖いよー、お父さん何とかしてー！

「怒ってないから。ただちょっと悲しかっただけで」

「ん？ 何があった？ ほら、言ってみろ」

お父さんはそう言いながら私をお姉ちゃんたちに渡し、渡された私はそのままベッドへ直行することとなった。

お父さんとお母さん、今頃大人の時間を満喫してるのかな？

「さ、エーデルファイアは寝ようね。調子が善くなったって言っても、まだ万全じゃないでしょ？」

「それに、寝ないと大きくならないからね」

うん、そうだね。それに、お父さんとお母さんのいちゃいちゃラブな声は聞きたくないから早く寝るね。

……なのに、どうして途中で目が覚めるかな。二人の睦言が思いつき聞こえるんだけど。前世の経験上、ちよつとやそつとくらいなら慣れてるけど、転生してからそんなものに一切縁が無かったから、ちよつと、その……………。

「エイシェリナ」

「フォ、フォンシユベルつ、…………んっ」

甘い、甘いよ二人とも！ 寝てる私に聞こえる範囲でそんな睦言眩かないで！！

あ、ああああ、熱い。体熱い。せつかく元通りになったのに！

！！ ああ、体から湯気が…………。

「…………ふしゆるー？ ……って、起きてたの！？ エーデルファイア！」

「あ、あうあうあう」

「な……っ！　って、うわっ！　熱いな、大丈夫か？」
「るきゅるるー」

うん、熱い。すごい熱い。でも、そのおかげでやっとまた寝れ
そうになってきたよ……。

っていうか、寝ないと死ぬ。

「よしよし、しっかり寝なさいね」

お母さんがそう言って私の体を撫でてくれる。それが、とっても
気持ちよくて、幸せで。

だから、今は安心して眠れそうだ———。

朝。目が覚めたら周りにみんなが揃っててびっくりした。何？
え？　本当に何なの？

「おはよう、エーデルフィア。大丈夫？　無理してない？」

「え？　うん、おはよ。大丈夫だよ、どうしたの？」

「いや、昨日の晩、聞いちゃったんだって？」

……そのことか！！

「結構キツイでしょ？　アレ」

え？　経験者？

「今度からああいうのが聞こえたらすぐに耳を塞ぐんだよ？　エー
デルフィアにはまだ早いからね」

「う、うん………」

前世の私ならともかく、今の私にはかなりきついね。そういうのにまったく縁がないもんなあ。

まあそれは前世ではもちろんやることはやったけど……げふんげふん。訂正、何でもないよ!!

ななな、何でもないってバ!! 私表情で危険を悟らないで!

「よしよし、辛かったね。今度お父さんとお母さんに時と場所を考えるように言っておくからね」

「う、うん……。お願い……」

今の私には辛いからね、辛すぎるからね!! 聞いているだけで、人間で考えれば顔が真っ赤に染まるんだよう!!

まあ、私は赤いドラゴンだから顔が赤く染まることはない、若しくは染まっても分かりづらいんだけど、その分相当体が熱くなる、みたいだね。

——って、その張本人たちもすぐそばにいるんだけどね。

「だから、抑えてねお二人さん」

「エーデルファイアにはまだ早いんだからさ」

「分かっている。大丈夫か？」

「今は大丈夫のようだけど、辛くなったらすぐに言ってね?」

そうしていると、お母さんが私に触れてくる。うん? 今日は大丈夫だよ? 平気平気。

んしょ、よいしょ。のんびりと起き上がるのだが、その瞬間阻止された。何をする!?

「一応まだ寝ていて？ 無理せずにいて？」

「えーっ!!」

「せめて、太陽が真上に上がるまで、お昼まで寝ていてよ。その後は草を取りに行こうか」

あ、今日はお外行ってもいいんだね。なら、今はとりあえず寝るか。今はまだベッドの上だから眠れるかな。

「いい子だね、お休み？」

「うん————」

って、まだ眠れないよ？ さっき目が覚めたばかりで話をして目が覚めてるのに、今さらまた寝ろって？

あはははは、無理無理、絶対無理。完全に目が覚めちゃってるよ。

「無理ー、寝れないよー」

「じゃあ、せめてベッドで丸まっててね。起き上がらないでね？」

「んー」

丸まっただけでいいならそうするー。それだけでお昼から草を取るために洞窟を出れるのならね。

そうしないと、間違いなくお父さんとかお母さんに止められるもん。止められたくないもん、出たいもん。

「丸くなったら、お昼から外に行っていないの？」

「うん、無理をしなければね」

よし、無理しない！ 外に行くためにきちんと休んでおくよ！
というわけで、今はあげていた顔を下げて、きれいに丸くなっておくことにしよう。

やっぱり眠れないんだけどね!!

「んきゅー、ひーまー、たいくつー!」

「あはは、じゃあ、エーデルフィアがそのままの体勢でいるって約束するなら本の読み聞かせ、してあげるけどどうする?」

「約束する! 本読んで!!」

ちようどいい暇潰し!! この世界にどんなお話の本があるのか知らないけど、聞いただけ聞きたいー!

昔々あるところに、少年と少年と少年と少年がいました。(後、少年A・少年B・少年C・少年Dと表記)

——どこの犯罪者!?

少年たちはある日、罪を犯してしまいました。それは、許されない罪。彼らは許されない地に足を踏み入れてしまったのです。もちろん、少年たちを国の大人たちは叱りました。思い切り叱って、罪を問いました。

それからの少年たちの話が、ここから紡がれていくのです。

——ちよ、本当に犯罪者!?

「エーデルフィアは突っ込むねえ」

「突っ込むよ! ほのぼの普通の話かと思ったら、最初から主人公犯罪者!?!」

「そういう話だし」

「普通のお話がいいー!!」

「ぜいたくだなあ。ちょっと待ってね」

何で主人公が犯罪者っていうお話持ってくるのさ！ 私まだ子供だよ！？ 子供にそんな話を聞かせようとするなー！
もっと！ 普通の！ 至ってノーマルなお話はないわけ！？

「ちょ、怒らないでくれ、エーデルファイア。分かった分かった、ほかの話を持ってくるからな」

「普通のだからね！」

釘を刺しておかないとまた変なのを持ってきたそうだが、お兄ちゃんたちは。

事実、また持ってきた本は変なヤツだったから、飛び蹴りを入れておいた。ざまあみろ。

「い、痛いぞエーデルファイア」

「お兄ちゃんたちには大したことないでしょ！？ お兄ちゃんたちの持つてくる本が悪い！」

「だからって、飛び蹴りはないだろう。避けたらエーデルファイアが危ないから、大人しく受けるしかなかっただろう」

知らない。避けても、私飛べるんだけど。飛べるから何とかなるんだけど。でもいいか、優しいから。

というわけで、とりあえずお姉ちゃんに飛びつく……って、今それしたら昼から外に行けなくなる可能性もあるね。やめとこう。

そうしている間にも洞窟の内部はひかりが指してきて明るくなってきた。もうお昼？ お昼？

お昼なら、草を取りに行けるね！？ 行けるよね！

「ん？ ああ、もうお昼なんだね。よし、お父さんたちに話に行つて、草を取りに行こうか」

「うん！」

お兄ちゃんたちが言うと同時に、思い切り飛び上がった。飛び上がってお姉ちゃんの頭の上に着地する。よし、出発だ！

「お父さん、お母さん。もうお昼だし、エーデルファイアと草を取りに行つて来るね」

「ん？ ああ、気をつけるんだぞ」

「何かあったら呼びなさいね」

うん、この間みたいながあつたら思いっきり呼ぶからね。そのときは助けてね、しっかりと！

ということで、私たちは竜態を取ったカーヴお兄ちゃんの背中に乗って、草の採取場所へと向かう。今日もいっぱい草を取るぞー！今日は、毒草を間違えて取らないように気をつけるぞー！ 毒草を食べて、お腹を壊さないように気をつけなくては。

「エーデルファイア、今日は毒がある草を取らないようにしなくちゃね。だから、取る前に私たちに確認するんだよ、いい？」

「う、うん」

先に確認してもらえば毒のある草を取らなくて済むよね！ 毒のある草は、危険だ。

前はお腹を壊したくらいで済んだが、草によると死ぬかもしれない。だから、確認をしておおう。うん、そうしよう！

「よし、ついたぞ。エーデルファイアは毒のあるものを取らないよう

に気をつけような」

「うん！」

死なないためにもね！ 今日はお姉ちゃんに確認してもらってから大丈夫だよ、死にたくない！！

「おねえちゃん、これは？」

「あ、それは大丈夫だから取っていいよ」

「じゃあ、この横」

「それは毒があるからダメ」

「じゃ、じゃあ、これは？」

「それも毒があるねえ」

「次、これ！！」

「残念、これも毒」

最初の草以外、全部毒ですか！！ よかった、お姉ちゃんに確認して。私だけだったら、間違いなく食べて死ぬか、お腹壊してたね。っていうか、どうして私は毒草ばかり見つけるかなあ？ あ、ある意味特技？

あ、諦めない！ 次、次こそは食べられるもの！！

「これ！ これは！？！？」

「うん、これは食べられる。摘んでいいよ」

よっしゃ、今度こそ食べられるか。食べられる草二つ目ーっ！！

「あはは、エーデルフィア嬉しそうだね。なら、頑張ってほかにも食べられる草を探そうね」

「うん、次ー！」

わーい、食べられる草を見つけれられると嬉しすぎる！ 次次次い！

「これは？ これ！！」

「あらら、残念だけどそれは猛毒だ。触らないほうがいいよ」

「触るのもアウト！？」

「大して害はないと思うけど、一応ね」

うーむ、触ったら手がかぶれちゃうとかかな？ なら、触らない

ようにしておくべきか。

しかし、私はまだ毒草と食べられる草の区別がつかないとか、ダメすぎる。

く、くそう！ 諦めないぞ、分かるやつは分かるんだ！ 次ーっ

！！

泣きましよう（前書き）

若干暗い話になってしまいました。

暗い話が苦手な方……、

流し読みでお願いいたします。

泣きましよう

「お姉ちゃん、これは!？」

「残念、これも毒。ほら、ここ見てごらん。ここががつてるのはダメだよ」

うむう、毒があるのはこうやって、草のまわり？　ががつてるんだね。学習します！

あ、ならこれは大丈夫かな？　とんがってないし、裏に黒い毛も生えてないし、くさくもない。

「これはー？」

「あ、それは大丈夫。変なにおいとかもしないでしょ？」

「うん、普通！」

なら大丈夫だね、大丈夫だよね！　目をキラキラと光らせながらお姉ちゃんに無言で問いかけた。

そんな私にお姉ちゃんは淡く微笑みながら頭を撫でてくれた。えへへ、気持ちよすぎる。

「えへへー」

「よしよし、さあ次を探そうね」

うん、褒められると伸びるんだよ、私は！　だからもっと褒めて、撫でて！

「おお、つと。今日は毒のあるものは……つと」

「無いよ！ お姉ちゃんにチェックしてもらったもん！！」

「そうかそうか。でも、一応な。これでカーヴやサーファが間違えて毒草を摘んでいたら困るだろう？ エーデルフィアに何かあったらいやだからね」

「う……」

そう言われるとこれ以上文句は言えない感じ？ まあ、確かにお腹も壊したくないし、死にたくも無い。

うう、仕方ない。お父さんの行動に関しては特に何も考えずに、とりあえず今は――。

「さ、エーデルフィアはご飯までお昼寝にしようね」

そうなるよね。朝からいっぱい寝た、っていうか横になってたから寝れないと思うんだけどなあ。

でも、お母さんは許してくれないんだね、抱えあげられる運命さだめにあるんだね。

「いい子だから寝なさい」

「多分寝れないよ？」

「大丈夫、疲れてるだろうから寝れるよ」

んむう、そこまで言うのならば……。ひとまず今はベッドで丸まっておくことにしよう。

うん、寝てません、寝れてません。丸まって目を瞑ってはいるけど、全然寝付けないんだよね。眠れるまで、何か考え事をするか。例えば、前世の私の死後がどうなったか、とか、――おちびーズのこととか、ね。

あの子達は元気だろうか。私が死んだ後、しっかりと生きてくれているだろうか。

私は、あの時あの子達を守った。でも、その後は知らない。きちんと生きてくれているのか、元気だろうか。

薄れていく記憶の中のあの子達は、笑顔だ。最期に見たあの笑顔しか浮かばない。それでも、それでも。

――泣き声だけは、耳に届く。

「エーデルフィア？　どうしたの、大丈夫？」

「ふえ？」

「嫌な夢でも見た？　ほら、涙を拭こうね」

涙？　え、私泣いてる？　鋭い爪を出さないように気をつけながら目に前足を触れさせる。うん、濡れてる。

「どうしたの？　怖い夢でも見た？」

お兄ちゃんたちはそう言いながら、自分の服で私の流す涙を拭っていく。ありがとう、お兄ちゃんたち。しかし、どうして泣いちゃってたんだろう。

久しぶりにおちびーズのことを考えたから？　あの子達の泣き声を思い出してしまったから？

そんなはずは無い。あれは、終わったことだ。私の記憶の中のあの子達は、いつだって笑ってくれているんだから。

でも、あの子達のことを考えれば考えるほど、涙が溢れて止まらないよ。

「わわ！ 大丈夫？ そんなに怖い夢だったの！？ ちょっと待って、お母さん！」

私を抱き上げたお兄ちゃんが動く感じが伝わる。お母さんのところに行ってるのかな？ 確かめたい、でも、視界は涙で滲んで殆ど見えない。――悲しい。

「ふ、うええええええ……、おかあさああん……」

「え！？ どうしたの？ ほら、もう大丈夫だから泣かなくていいのよー」

お母さん、お母さん、お母さん。頭の中で何度も呼びながらお母さんの腕の中に納まる。離さないで、思い出させないで。思い出すのは最期の表情だけでいい。私は守ったのだから。

なのに、どうして頭の中で声が聞こえるの？ どうしてあの子達が泣いているの？ 泣かないで、幸せに生きて。そう、願っているのに。

思い出してしまう、あの日の泣き声を。逃げろと言ったのに戻ってきて、死にかけの私のそばで泣いていたあのときの声を。

あの子達は、今何をしているの？ 誰か、教えて。あの子達は、どうしているの――？

『教えてあげましょうか』

突然聞こえた声。誰の声かも分からないが、それは懐かしい言語だった。それは、――日本語だった。

そして私は、その言葉を聞いた瞬間に気を失った。

目を開けてみれば、そこにはにこにこ微笑む人が見えた。えっと、この人は――。

「お久しぶりですね、私がかかりますか？」

「死んだときに会った、説明くれた人」

「正解です。今回は、そのときに助けると言ったので、有言実行しました。助け、必要でしたよね？」

そういえば、言ってたっけ。幸せな生活を保障し、助けるって。今回はそのためか。まあ確かに、今回は助けが無くてはちよつときついな。

「というわけで、前世のあなたの従妹さんの様子を見に行きましようか。ああ、暗くならなくても大丈夫です。お元気ですよ」

「本当に？」

「ええ。お元気です、安心してください」

それに、それが真実かどうかは、あなたが直接見て確かめればいい。その言葉にすぐ納得してしまう。確かに、そのとおりだ。私自身が確認してみればいい。

「ああ、ですが今日はちよつと暗いかもしれませんね。――この日は、あなたの命日ですから」

「めい……………にち……………？」

「ええ、6回目の命日ですね。あなたが亡くなって、この世界ではまだ6年しか経っていないんです」

命日……。つまり、私が死んだ日ということか。じゃあ、今日は

前世の私の誕生日でもあるのか――。今考えてみれば、皮肉だな。
21歳の誕生日に事件に巻き込まれて死ぬなんて。

あの日、家に帰ればきつと、お父さんがケーキを買ってきてくれていただろう。大きなケーキじゃなくて、小さなケーキが10個くらい。毎年がそうだった、好きに選べるように、いろいろなケーキを買ってきてくれた。それも、遠い過去なのか。

「つと、つきましたね。あなたの従妹さんたち、もうすぐここに来ますよ。彼女たちは、毎年この日は墓参りに来ていらっしやいますから」

考え事をしていると、目的地についたらしい。そこは、――墓だった。私の骨の納められた場所。私の眠る土地。

「新しい……」

「ええ、あなたのお家の墓は山の中であまり人が来れないから、とおじいさんがお金を出してくださったそうですよ？　たくさんの人が来てくれるように、新たに作ってくださったそうです」

じいちゃんが、お金を出してくれたのか。そこまでしなくてもよかったのに。どうせ私はそこにはいないんだから。

そうしていると、後ろのほうから聞き覚えのある声が聞こえてくる。反射的に振り向くと、そこには、そこには会いたかった従妹たちがいた。

「お母さん、まず何する？　先に花を変えたほうがいいー？」
「好きにしなさい。亜紀、悪いんだけど、水を汲んできてくれる？　忘れてた」

「あ、うん。ちょっと待っててー」

元氣そうでよかった。私の死は、そこまで激しく影響しなかったみたいだね、それは幸い。

——でも、やっぱり表情は暗いんだね、でかちび。笑ってはいないんだね。

「お母さん、沙耶ー、水汲んできたよー。花変えよー」

ああ、おちび、お前もか。二人とも、やっぱり表情は暗いな。笑って欲しいのに。

そして、その気持ちが伝わったのか一緒に来ていたおばちゃん二人に笑うよう言う。そうしてやっと二人は笑顔を見せてくれた。

「あんたたちね、そんな暗い表情であの子が喜ぶと思う？ 笑ってやりなさい。あの時も、笑ってって言われたんでしょ？ 笑ってやれ」

おばちゃん、感謝！！ この声は聞こえないだろうけど、ここでお礼を言うね、ありがとう。本当に感謝してる。

だからさ、おばちゃんが泣きそうにならないでくれる？ 確かにおばちゃんは私を可愛がってくれた、だから私もおばちゃんが大好きだった。

おちびーズと同じくらい、いや、それ以上におばちゃんは好きだったかもしれない。だから、おばちゃんも泣かないで。自分のせいでおばちゃんを泣かせたとなると、ちょっと自己嫌悪がキツイ。

「お母さん、私たちに笑えって言ったくせに、自分が泣きそうじゃん。それじゃ姉ちゃん悲しむよ？」

よく言った、でかちび！！ よし、おばちゃん表情にも笑顔が戻りだしたな。これで、一安心。

それにしても、私が死んで6年、でかちびも22歳、おちびも19歳か。大きくなった。本当に、大きくなったな。

でかちびもおちびも、体つきは完全に大人のそれだ、立派に、女性性の体になった。これならば、もう彼氏もいるだろう。幸せに生きていけるだろう。

私の可愛い従妹たち。元気な姿を見てよかった。

私の愛する従妹たち。君たちの笑顔を見てよかった。

6年間、毎年この日に私のために、こんなところに来てくれて、本当にありがとう。

住んでいる市とこの墓の所在地、違うから毎回移動が大変だよね？
それでも来てくれて、本当にありがとう。

——さよなら。

「泣いていいよ、いっぱい泣いていい。全部受け止めてあげるから」

優しい言葉。あの子達から離れてすぐ、あの人がその言葉をかけてくれた。その言葉に甘えて、遠慮なく泣かせてもらう。

悲しい、悲しいさ。あの子達は、私の死を吹っ切った。なのに、死んだ本人の私が一番吹っ切れていない。

——私が、一番あの子達に執着している。

離れなくては。あの子達から、離れなくては。これ以上関われる場所にいると、今まで以上に執着してしまう。どうにかしてでも、

自分の声を届かせたいと、話をしたいと考えてしまう。

だが、それはあの子達にしては迷惑以外、何も無いはずだ。せつかく吹っ切れたのにまた現れては、厄介だろう。

だから、今は泣かせて。たくさん、涙を流して、その涙と一緒にあの子達への執着心も流してしまつて。

こんな心、エーデルファイア今生であっても、邪魔なだけだから。だから、全て流れてしまつて。

私の名前は、エーデルファイア。あの子達と同じ時間を過ごした”つつまじり堤円香”という少女は、もう存在しないのだから――。

さよなら、堤円香前世の私。

さよなら、おちびーズ。

さよなら、みんな。

――――私は、新しい人生を生きているよ。

心配をかけてしまいました

んみゅ？ 目が覚めたら、私の周りにはみんなが揃っていた。あれ？ みんな涙目だね、どうしたの？

んー、私、寝る前に何かしたっけ？ っていうか、何かさ、周り暗くない？ もう夜？ ーご飯食べてないよ！！

そう思っていたら、突然お母さんに抱き上げられた。え？ 本当に何！？

「よかった、目を覚ましてくれて……。気を失ってから、あのまま目を覚まさなかったらどうしようかとー」

「エイシェリナ、俺にもエーデルフィアを抱かせてくれ」

「俺たちも！！」

「あ、お父さん、私もだからね！！」

「俺！ 俺もっ！！」

いやだから、何事？ って、お父さん、抱きしめ方強い！ 痛いよ！！

「い、痛い！ 痛いよ！！」

「あ、つと……すまない、大丈夫か？」

「きゅー、痛かった……」

というか、抱きしめ方の強さを謝る前に、まず何があったのか教えてもらえるかな？

「……覚えてないのか？」

「うん、全然」

全然全く皆目。

「大泣きして、気を失って丸二日眠っていたんだが記憶に無いのか？」

「全然」

大泣き……、したっけ？　っていうか、いつの話？　んんーっ？

「覚えていないんならそれでいいさ。無事に目を覚ましてくれた、それでいいんだ」

「うん？」

とりあえず、考えなくてもいいって言うことかな？　でもまあ、今は―――。

「おなかすいたー」

ぎゅーきゅるるー。思い切りお腹が鳴ったよ、お腹空いたあ。

何か食べ物をもろうために、潤んだ瞳でお父さんとお母さん、お兄ちゃんたちをじっと見る。とにかくじっと見る。

それから少しして、お父さんが私のそばから離れ、少しして戻ってきた。その手には包丁が握られている。そしてお父さんはお母さんにその包丁を手渡し、お母さんはその包丁を腕に走らせた。

ああ、いいにおいがする。美味しそうなにおい。それは、私の大好きな食料だ―――。

「んっく、こくっ、……ごくごくんっく」

美味しい。お母さんの血が、体に染み渡っていく。美味しい、すごい美味しいよ……。

「すごい飲んでるね。まあ、丸二日も何も食べたり飲んだりしてないから、普通か」

「珍しくお腹も鳴ってたしね。相当空いてたんだろうさ」

お兄ちゃんもお姉ちゃんもうるさい。とにかく私はお腹が空いてるんだ！　そう思いつつも、とにかくお母さんの血を飲み続ける。ん？　あれ？　いいにおいが、増えた……。

「エーデルファイア、簡単なものですまないが、作ってきたよ。食べるかい？」

「食べるーっ!!」

「うわー、口の周り血だらけ。ほら、拭くからちょっと待って」

いいにおいは、お父さんが用意してくれた軽食？　だった。

いっただっきまーす！　かぶりつこうとした瞬間にお母さんに止められた。うん？　血だらけ？

「よし、きれいになった」

言われてみると、私の口元を拭った布は真っ赤だ。空腹で何も考えられずにただただ貪った結果、口の周りが恐ろしいことになっていたようだ。

ま、まあ気にせずにごはーん！

「大丈夫、そうだな。よかった」

「元気いっぱい食べてるからね。一時はどうなるかと思ったけど、これなら大丈夫だよ」

「長老を呼びに行く前でよかった。呼んでたら、長老まで相当心配させることになってたわ」

うわー、相当心配かけてたんだね。自分でもびっくりだよ、丸二日眠り続けてたなんて。しかし、本当に何があったんだっけ……。食事を取る手を止めることなく考えるのだが、やはり答えは出ない。うーむ、本当に何したっけ。

がぶがぶはぐはぐ。とりあえず、考えはするけど食べる手を止めるつもりはない。だって、空腹が限界だったからいくらでも入るんだ。

「ごちしょ、さまあ」

いっぱい食べた、おいしかったあ。お腹ぱんぱんになるまで食べちゃったよ。おかげで大満足。

「いっぱい食べたね。あれだけ血を飲んで、その上でこれだけ食べるとは思わなかったよ」

「だって、お腹空いてたんだもん」

オマケに、今の私は成長期だよ？ 食べないと大きくなれないじゃないか。

そうして満足していると、突然お母さんに抱き上げられた。うん？ どうしたの、お母さん。

「しばらくこうさせていて。本当に心配したんだから」

お母さんはそう言って私を抱きしめる。

「本当に心配した」

「よしよし、エーデルフィアは可愛いね」

「しばらくは俺たちから離れないでね」

お兄ちゃん、お姉ちゃんたちはそう言って、お母さんに抱かれた私を撫でてくれる。

「無事に目を覚ましてくれて本当によかった」

最後に、お父さんがお母さんやお兄ちゃん、お姉ちゃんたちごと私を抱きしめた。えへへ、何だか落ち着くね。

そうしていると、お父さんがお母さんから離れ、そして私を奪い取った。そして言う。

「さ、エーデルフィアも起きたことだし、みんなで出かけるか。外は気持ちいいだろう」

「あら、いい考え。でも、エーデルフィアは返してね、フォンシュベル」

「いいじゃないか少しくらい」

「きゅ？」

あれ？ 何か、お父さんとお母さんの間で私の奪い合いが起こってるんだけど。うーむ、平和に済ませるためにはっと。

私を奪い合う二人の手をすり抜けて、ぱたぱたと飛んでお姉ちゃんの頭の上に着地する。よし、これで安全。

「あら？ エーデルフィア、お母さんのところにおいで？」

「いいや、お父さんのところに来ておくれ？」

「エーデルフィア、呼ばれてるよ？」

「やー。二人とも何か怖いからお姉ちゃんの頭の上がいいー」

だって、このまま二人のところに戻ったら、また奪い合いに巻き込まれそうなんだもん。巻き込まれたくはありません。平穩こそ人生です。

って、お姉ちゃんと私を見る二人の目が怖いなあ。んしょ、よいしょ。私はしっかりとお姉ちゃんに隠れた。これで、二人の恐怖の視線を見るのはお姉ちゃんだけって。

「ん？　ちょ、エーデルファイアずるいって！　お父さん、お母さん、目が怖い！」

「ああ、ゴメンねオースティア。どうしても、エーデルファイアを愛でたいと考えるとこうなっちゃうの」

「そのとおりだな。エーデルファイア、お父さんのところに来てくれないか？」

はい、行きません。行ったらすぐお母さんに奪われるよ？　お母さんだから、お父さんからなら絶対に軽く奪い取るよ？

そんなのいやだから動きません。仮に動いたとしてもお兄ちゃんたちの頭の上には行きませんか？

「……イヤだって。いいから行こうよ。エーデルファイアも早く外、行きたいよね？」

「うん！　お外行く！　みんなで外！」

お兄ちゃんたちと一緒に、とかお母さんと一緒って言うのはよくあるんだけど、お父さんと一緒っていうのや、みんな一緒に外って言うのは初めてだから今のうちから楽しみなのだよ！

わくわくが止まらない！　もう最高に楽しみすぎる！！

「うわー、エーデルファイア楽しそう。可愛すぎ」

「ホントだー。超可愛い」

「ふふ、行こうか」

うん！ 行こう、行こうお外！

でも、ここで問題が一つ。

「さて、ここから少しお出かけとなると、お父さんかお母さんがドラゴンに戻って、全員がその背に乗って移動したほうがいいんだが、——大丈夫か、エーデルフィア？」

うん、怖い。にっこり笑って答えてやった。

「だが、カーヴだとちょっと遅いからな……。どうする？ お父さんに乗るか、外出をやめるか」

……！！ 究極の選択肢が！ 怖いお父さんのドラゴンの姿を見るか、外出自体を取りやめるか……。いやいや、外は行きたいよ。だって、初めてみんなで出かけるんだし。でも、お父さんのドラゴンの姿は怖いんだよね。ソレを考えるとちょっと引く。

——でも、行きたい。怖い。行きたい。怖い。……どうしろってんだか。

「怖いなら、隠れていればいい。お父さんがドラゴンの姿でいる間、オースティアに隠れるなり、お母さんに隠れるなりすればいいさ」
「そうだよ。またフード付きの服着るから、それに隠れなよ」

う……うう、確かに隠れてれば見なくて済むし、お出かけも出来る……。

「お姉ちゃん、しっかり隠してね、見えないようにしてね！」

お父さんとお母さんのドラゴンの姿は大きすぎるから本当に怖いんだもん！！

だってあの二人なら、間違って踏まれそうだし、踏まれたら即死決定だし。お兄ちゃんたちなら気づいてくれそうだし、踏まれる前に私の攻撃飛ぶからいいけどさ。

お父さんたちにも踏まれそうになったら攻撃すればいいじゃん、って言ったやつ、舐めるなよ？ お父さんたちがドラゴンの姿になったら、私の爪如きじゃ殆ど気づいてもらえないのだよ。お兄ちゃんたちは爪で引っかけば気づいてくれるけど、お父さんたちは引っかけなくても気づかないという前に、私が恐怖で何も出来ないから。

お父さんたちのドラゴンの姿怖い↓踏まれそうで怖い↓ソレを避けるために攻撃↓ドラゴンの姿が大きすぎて怖くて動けない

こうなると完全に悪循環ですね。だから、しっかりと隠れます、見たくありません、怖いです！ でも外出は楽しみです。

そして、私たちが準備を終え、しっかりと隠れたのを確認するとお父さんはドラゴンの姿に戻ったらしい。お姉ちゃんがお父さんの背に乗る感じが伝わってくる。

とにかく、私は絶対にフードから出ない。お父さんのドラゴンの姿を見ない。怖い思いはいや。

それから少しして、お姉ちゃんが地面に降り立つ感じが伝わる。でも、私はまだ隠れたままだ。だって、お父さんが人態を取ってるとは限らないし？ ドラゴンのままだと怖いし？

「エーデルファイア、もう大丈夫だから出ておいで」

そう思っているとお母さんに呼ばれた。恐る恐る、お姉ちゃんの頭の上で、ごそごそとフードから頭を出して周りを見渡す。――よし、ドラゴンの姿は取ってない。

「おかーさん」

確認をして、お母さんのところへと羽を広げ、移動する。よし、甘えよう。

「よしよし、可愛い子。ほら、見てごらん、頂上に来てるから」「うん？」

言われて冷静にあたりを見回す。あ、ホントだ、頂上だ。なら、これをやらなくては――。

「やっほーっ!!」

うんうん、頂上ではこれをやらなくては。頂上ではこれをやるのが鉄則だよね、うん。

ちなみに、その様子をお父さんやお兄ちゃん、お姉ちゃんは微笑ましげに眺めていたよ。

そしてお母さんには、叫び終わると同時に思いっきり抱きしめられました。幸せです。

「その叫びに何の意味があるのか分からないけれど、本当に可愛い」「ホントだね。ねえエーデルフィア、その叫びは何なの？」

……あれ？ この世界では山びことかってないのかな？ 日本では山びこポピュラーだったのに。

「叫ばないの？」

「普通叫ばないね。でも、エーデルフィアが叫んでるのを見ると叫びたくなるな」

「うん、一緒に叫ぼう！」

せーの、やっほー！ やっほー！ やっほー！

おお、山びこ。すっかり返って来たぞ。お兄ちゃんたちも返って来た山びこに楽しんでる。

「すごい、音が響いてるのかな？」

「あはは、どーだろう」

山びこの仕組みって覚えてないしね。でもいいじゃん？ 楽しいから。

そして今日は、みんなで盛大に叫んでから洞窟に戻った。本当に楽しい一日だった。

心配をかけた？ 何ソレ美味しいの？ そんなこと、今日一日の楽しさで全部忘れちゃったよ。

心配をかけてしまいました（後書き）

ちなみに、エーデルフィアが従妹たちに会った記憶、

そしてその前後の記憶は死の世界のあの人によって消されています。

幸せな生活のために、従妹たちの記憶は

邪魔な記憶として削除された、ということ。

時の流れは早いものです(前書き)

成長しました。

あっという間に50歳代です。

時の流れは早いものです

時の流れてって本当に早いよね。エーデルファイアとして生を受けて、早50年以上経ちました。今の年齢は、えっと、ごじゅう………よん！ 54歳だよ。

ちなみに、50歳の誕生日の日からお父さんたちに魔術を習うようになりました。最初はみんなに洩られたけど、納得させた。

「まだ早いな、やめよう」

「そうね、まだ早いよね。まだ50だもんね」

「うん？ でも俺たちって50くらいの頃からやってたよな？」

「え？ 私は60超えてたと思うけど」

「俺もそのくらいか。なら、あと十年くらいはいいだろ」

全員から見事に反対を喰らいました。

「覚えたいな……、覚えたいんだけどな………」

お父さんたちをしっかりと見つめ、目を少し潤ませて懇願する。

———こうかはばつぐんだ！

「あ、いや、でも、魔術は危ないものなんだぞ？」

「分かってる。だから、お父さんたちに教えて欲しいな？」

お父さんたちなら、私が危ないことしそうになったら全力で止めてくれそうだもんね。だから、教えて欲しいなー？

そうやって懇願した結果、私は少しずつ魔術を覚えてもらえるよ

うになっていた。

から、私強いよ？ 並の人間なんかよりもよっぽど強いよ？ だから、一人で町へ行ってみたいなあ？

「一人で町、か。さすがにそれはダメだろう」

「町は危ない人もいるんだからダメ」

「……襲われるよ？」

「……捕まっちゃうよ？」

「……誘拐されちゃうよ？」

お父さんたちの止め方は可愛いけれど、お兄ちゃんたちのは完全に脅しだ！

大丈夫だよ、襲われそうになったり捕まりそうになったり、誘拐されそうになったら魔術使いまくるし。

炎吐いていっぱい燃やし尽くしてあげるし！。

「だから、行きたいな？」

ちょっとした冒険だよ。大体、この山では一人での行動全然オツケーじゃん。

なら、町もいいんじゃない？

「危ないって、ダメだよ」

「諦めなさい」

「やだー！ 行く、絶対に行くー！！」

大体さ、50って前世で考えればおばさんなんだからさ、いいじゃん、少しくらい。

懇願の時間は長かったよ。でも、おかげでお父さんたちが折れた。

「なら、町でこれを買ってきてくれるか？」

そうしてお父さんが買うものの名前をつらつらと連ねていく。

——これは初めてのおつかいですね！！ ……っていうことは、多分お兄ちゃんたちが後ろからこっそりついて来るんだろうね。ま、いっか。とりあえず。

「いってきまーす」

「気をつけるんだぞ、何かあったら呼ぶんだぞ」
「うん、行って来るねー」

えへへ、初めての一人での町だ。今まで何度もお兄ちゃんたちと来てはいたけど、一人では初めてだもんなあ。

何だか楽しみー。パタパタと飛ぶ私のテンションは本当に高いぞ。

そして、後ろから結構離れてお兄ちゃんたちがついてくる気配が……。まったく、過保護なんだから。

まあ、お兄ちゃんたちに言わせればこれは過保護ではなく、竜族の本能らしいのだが、よく分からない。過保護が本能って、何だろうね。

——まいっか。気にせずおつかいを済ませようっと。

「おや？ 小さき竜神様、どうなさいました？」

「おつかいー」

「ん？ きよ、今日はお一人ですか？ 護衛をお付けいたしましよ
うか？」

「大丈夫。……後ろにお兄ちゃんたちいるから」

絶対後ろにいるから。見えないし、感じないけど何となく予想がつく。

「それでしたら安心です。お氣をつけてお買い物をお楽しみください」

「うん、ありがとう」

さって、町だ町ー。まずは何を買おうかな。んっと、ここから一番近いのは、洋服屋さんだね。

「いらっしやいませ、竜神様。今日は何をお求めですか？」

「えっと、防寒用の服が欲しい」

「どなたさまの服をお求めですか？ 小さき竜神様、あなたさまのですか？」

「うん。竜態で着れる服が欲しいな」

「畏まりました。でしたら、採寸をさせていただいてよろしいですか？」

「うん、お願い」

そうして私は服屋の言うままで羽を広げたり、前足を上げて広げたりとする。少しして採寸は終わったらしい。

「では、完成までにしばしお時間いただきます。一週間と半分ほど経ちましたら取りにいらしてください」

「うん、お願いねー」

さて、洋服の注文は終わったし、今度はどこに行こうかな。ここからならどこが簡単に行けるかな、うふふふふ、楽しみだなあ。

——まだ、お兄ちゃんたちの干渉はないしね。

よし、次は野菜を買おう。自然には出来ない、人間たちが作ることの出来る野菜。人間だった頃は普通に食べてたのに、ドラゴンになってからは減多に食べてなかったからなあ。だから、野菜って恋しいんだ。

えっと、今日買って帰る野菜はつと。私はメモを取り出して買う物をしっかりと把握する。

「こんにちはー。お芋と根菜をいくつかちよーだい」

「いらっしやいませ竜神様。ちようどいいときにいらっしやいましたね。ちようど新鮮なのを入荷したんですよ」

「ホント!? やったあ!」

「では、ここのこれと、これ、そしてこれを包みましょうか」

そう言って店員は並べてある野菜を包んでいく。おお、いっぱいだ。

「これでいくら?」

「本来は銅貨を70枚ですが、竜神様にはお世話になっておりますので、65枚にしておきます」

「やった! ありがとう」

「いえいえ。その代わり、次もうちで買ってくださいね」

「うん!」

やった、まけてもらえたね。しかし、これだけたくさん買っても銀貨1枚にもならなかったか。

それで考えれば、初めてお金の価値を知ったときのお菓子を買ったあの量は半端無かったんだね。

「よっし、次だー!」

次はどれかな。……って、これだけか。ならかーえろっと。

って、ちょっと荷物が重すぎない？ 町の外までは飛ばずに歩いてたからそこまで激しく重さを感じなかったけど、飛び出すと重いな。ふらふらする。

——って、わわわ。か、傾く、怖い！！ お、落ちそうだ！！！！

ひやああああああああああ！！！！！！
お、落ち、落ちるうううううううううう！！

「危ないなあ。大丈夫？ エーデルファイア」
「ふえ？」

来るべき衝撃に備えていたのだが、予想していた衝撃は来なかった。代わりに、軽く痛みを感じるだけだ。

だって、私は今飛んでいるカーブお兄ちゃんに軽く啜えられているのだから。

「よし、買い物したのもちゃんと掴んだし、もう大丈夫だよ」

お兄ちゃんの背に乗ったお姉ちゃんと言う。よかった、これで買い物したヤツなくしてたら、私しょんぼりだったよ。

そうしていると、私を啜えたままのお兄ちゃんは一度下に降りた。啜えたままじゃしゃべれないしね。

「ふう、心配したぞ、エーデルファイア。重たすぎて飛べないくらいなら、半分くらいは店に預けて、後から取りに行くと言っていい」

「あ、そうすればよかったのか」

うーん、考えなかったよ。確かにそうすればよかったんだな。そう考えながら、私は助けてくれたことに感謝し、カーヴお兄ちゃんに抱きついた。

くう、成長したとは言っても、カーヴお兄ちゃんのドラゴンの姿に抱きつくのはまだキツいか。でもね。

「お兄ちゃん大好き」

そう言つて、とにかく抱きつく。えへへ。

「エーデルファイア、私たちは？」

「お姉ちゃんもサーファお兄ちゃんも大好きだよ」

当たり前じゃん。私はお父さんもお母さんも大好きだし、カーヴお兄ちゃんもティアお姉ちゃんもサーファお兄ちゃんも大好きなんだから。

んー、こうすればわかってもらえるよね。

「んー、エーデルファイア可愛い」

「可愛すぎるよ、これ」

二人に思いっきり抱きついたら二人に喜ばれた。よし、分かってもらえたね。

「ふふ。さ、そろそろ帰ろうか。お父さんたちも心配してるだろう

からね」

「だな。そろそろ帰らなくちゃお父さんたちがどうかなっちまう」

あー、確かに初めてのおつかいって、親は相当心配するよね。うん、帰ろう？ お母さんたちにも甘えたいしね。

うん、家に帰ったらかまい倒された。

「お帰りなさい、エーデルフィア。怪我は無い？ 怖くなかった？ 大丈夫？」

「ああ、無事に帰ってきてくれてよかった。初めての一人での町はどうだった？ 不安じゃなかったか？」

うわあ、疑問文だらけ。よし、一つずつ答えるべきか。

「だいじょーぶだよ。怪我も無いし、怖くも無かった。それに、不安でもなかったから平気」

実際、新鮮な感じがしたただもん。

「さて、今日はエーデルフィアが買ってきてくれた野菜を使って食事を作らなくてはならないな。エーデルフィア、楽しみに待っていてくれ」

うん！ 楽しみに待ってるね！ でも、今はとりあえず――。

「眠い……………」

初めてこんな長い間を自力で飛んだからね。いつもは町に行くと

きは大抵お兄ちゃんの背中の上だし。——その方が早いから。
でも、今日は帰りに落っこちかけるまでは完全に自力だったからね、疲れたんだろうね。

「疲れたのね。ふふ、部屋で休んでいなさい」

ああそうそう。50歳過ぎた頃から自分の部屋を与えられた。お兄ちゃんたちの部屋と比べるとまだ狭いけど、成長に伴って少しずつ掘り進めて大きくする予定。

そして、私の部屋のベッドは、お兄ちゃんたち特製だ。お兄ちゃんたちの部屋のベッドと同じ、干草のベッドだ。ま、まだお兄ちゃんたちのベッドよりも格段と小さいけどね。

でも、気持ちいいんだよね、干草ベッド。

というわけで、部屋に戻った私はそのままベッドにダイブする。
ふわ、ベッドに上がると一気に睡魔に襲われるな——。

「エーデルフィア、起きて。ご飯だよ」
「んみ？」

心地よい眠りの中の私を無理やり叩き起こすような声で完全に覚醒した。何の用だくそう、気持ちよかったのに。

「目付き悪いなー。ほら、ご飯だよ、ご飯」

ご飯……、ご飯……、っ!! そうだよご飯だよ! 今日のご飯はきつとご馳走だよ! 今日買った野菜が存分に使われてるはずだよ!

よし、起きて、起きてっと。まだ寝惚けてフラフラするけど、今の私じゃお姉ちゃんたちの肩に乗るには大きすぎるしなあ……。

結局、ふらつく体を支えてもらいながら飛んでいくことになった。

「おはよう、ゆっくり休めたかい？」

「うん……、まだ眠い……」

でも、ごはん。

「はは。今日のご飯を食べたらすぐ寝なさい。疲れたんだろう」

「うん、そうするー」

成長に伴って、夜寝る時間も遅くなったけど、今日は昔みたいにご飯を食べたらすぐ寝るか。

どうせ、今も昔も食べた分は成長にしか使われないんだから。

魔術特訓です

「よし、今日是对極属性の水の魔術を練習しようね」

魔術の特訓をしだして早四年。その四年で、私は対極属性の水以外の魔法は、大体が使えるようになっていた。

が、水だけはまだ全然使えない。私の一番加護のもらえる属性が火だからか、その反対は一番加護が少ないらしくまだ使えない。

「水ー！ みーずー！！」

カップを両の手で掴み、その中に水が現れるよう念じる。これが水の魔術を使うための練習第一歩らしい。曰く、カップとかは普通に水が入っている印象が強いからうまくいきやすいんだとか。

でも、今の私は全く水の魔術を使えない。水を出すことも、操作することも出来ないんだ。

「みずー！ 水水水水水ーっ！！」

「おー、頑張ってるねー」

「そう言うならお兄ちゃん、教えてあげてよ。私もエーデルフィアと一緒に火属性だから水苦手なのよ」

「俺も火は苦手だ。エーデルフィア、コツ、教えてあげようか？」

お兄ちゃんたち横でうるさーいっ！！ でもコツは教えて！

「ほかの事を考えず、ただただ、水に関わることだけ考えてもらん？ お風呂とか、川とかね？」

水に関わることー？ んーっ、お風呂？ 川？

そういえば、この山って、川結構きれいだよねー。水は苦手だから近寄るのは怖いんだけど、飲み水にはいいんだよね。

寒い時期は直接飲むのは冷たすぎて痛いけど、暑い時期はあの水は最高に美味しいんだよねー。

「わわ！ 抑えて抑えて！ 水が零れちゃうよ」

「へ？ ……うわっ！ い、いつの間につ！？」

言われてカップを見ると、既に少し溢れていた。……イメー
ジ、恐るべし。

「うーん、このヒントだけであっさりと使えるようになるとは思わなかったなー」

「エーデルファイアすごいねー。よしよし、愛でよう」

「おとーさーん、エーデルファイア成功させたよー」

「ん？ ああ、本当だな。頑張ったな、エーデルファイア。じゃあ次は火の魔術でそれを蒸発させてごらん？」

蒸発？ どうやって？ カップを下から炙ればいいのか？

「いやいや、カップは持ったまま、ぱっと見何もせずに蒸発させてごらん？」

それ、どうやるんだよー。私の中で蒸発のイメージって言ったら下から火をかけて沸騰させるくらいなんだよー。

いや、使う力としては多分火の魔術でいいんだとは、思う。でも、どうやればいいのか分かんないー。

「お姉ちゃんお手本見せてー！」

「お手本？　ちょっと貸して」

そうしてお姉ちゃんにカップを渡すと、カップに入っていた水が沸騰し始める。そして、しばらくそれを見ているとあっという間に水が減っていった。蒸発した！

「ああ、無くなったね。エーデルフィア、もう一度さっきの水の魔術使ってみよう。このカップに水を入れて、さっきお父さんが言ったやつ、頑張ろうね」

「うん！」

水ー、水ー。川ー。美味しい飲み水ー。

そう念じながら、カップをジーっと見続ける。そうすると、何と言うことでしょう！　カップの下の方からじわじわと水が浮き上がってくるではありませんか。

「うん、やっぱり一度コツを掴むとすぐに使えるね」

「ホントだー、さっきまで使えなかったのは何って感じ」

ホント、何だったのかこっちが聞きたいくらいあっさりと使えるようになっていた。マジでどうしてですか。

「さっきの水の魔術のイメージが定まったんだ。これからは簡単に使えるようになるよ、基本は」

「応用的な使い方になると、練習あるのみだけどね」

つまり、今回の蒸発させる魔術は応用ってことだね。練習あるのみってことだね。

しかし、さっき見ていた限りでは蒸発させるのは、火の姿を見せ

ずに水の温度をあげていたようだった。つまり、内部的に水の温度が上がるようにしなくてはならない。

うーむ、水の温度を上げる方法はどんなのがあったかな。第一の方法は、まず火だが今回は使えない。

あとは、太陽の光の下に置いておいても温かく、って言うか温くなるよね。でも、それは温くであって熱いわけではない。

熱く……熱く……？ ん？ 熱？

そういえば、IH式のコンロは火を使わないのに熱が通るよね。こういう仕組みだったっけ、あれ。

……って、あれは電気だね。火はまったく関係ないや。そうなるのと、どうなるんだ……、うう。

「あらら、考え込んでるなあ。エーデルファイア、さっき私が魔術を使ったときどういう風に見えたか考えてごらん。それがヒントになるからね」

「んーっ？」

見えたって言っても、少しずつ沸騰して、蒸発していったようにしか感じなかったよ。むむむー。

「しばらくの課題はこれだな、頑張りなさい」

「むー、お父さんヒントー！」

どういう風に魔術を使うものなのかヒントが欲しいー。

「ヒントならオースティアがくれただろう。それ以上は答えだからダメだ。頑張りなさい」

うー、にっこり微笑みながら言うお父さんが憎たらしく思える……。

火を使わずに沸騰、蒸発……。どうやって水を熱するかが一番の課題だな。熱することさえ出来れば、あとは蒸発までは少しだと思うんだけど。

しかし、このカップで火を見せずに火の魔術を使って蒸発……。むむむむむー。

「エーデルファイア、ご飯の時間くらい考え事、やめなさい」

「だって！」

「だって何もないの。考え事しながらじゃ美味しくないでしょう。せっかく美味しいご飯を美味しく食べないなんて、食材に対して失礼でしょう」

「あ……」

そうだ、そうだった。私たちは命を喰らって生きているのに、それを忘れてしまっていた。くう、今からでもその考えを放り捨てて美味しくいただくなくては！

「ごめんなさい、お父さん、お母さん。今から美味しくいただくね！」

「分かればいいの。はい、いっぱい食べなさい」

お母さんはそう言って自分の分の肉を少し分けてくれる。お母さんありがとー大好きー！！

「食べる子は大きくなる。いっぱい食べて、いっぱい眠りなさい」

うん、もっともっとおおきくなるよ！ 今はやっとお兄ちゃんたちの半分くらいの大きさだからね。もっと食べてもっと寝れば、お兄ちゃんたちにも追いつける！ ……はず。

もっともっと大きくなりたいよ。お父さんとお母さんのドラゴンの姿と比べれば私なんて、やっと踏み潰される前に気づくかな？
っていう程度だからね。

そして食後は、お母さんたちのお話という名のお勉強タイムだ。

「エーデルフィアも、そろそろ初陣の時期ね。この時期に、相手にちょうどいい魔物って、どれがいたかな？」

「今のエーデルフィアの相手にちょうどいい魔物か……。隣町で魔物が暴れてるとかなんとか言ってたか？」

うん？ 魔物？ 初陣？ ナンノコト？

「もう54歳だし、魔物って言うのがどんなのか、教えてもいい頃でしょ？ フォンシュベル？」

「そのとおりだ。よし、明日にでも行こうか。いいね？ エーデルフィア」

大丈夫、お父さんがついてるから、絶対にエーデルフィアを守るからねー。

にっこり言われても怖いものは怖いでしょう！ 魔物って言う未知の生き物に対する恐怖は半端ないんだよ！

「やだー！ 魔物なんて怖いからいやだー！！」

「よーし、明日はみんなで一緒に行こうなー。みんなでお出かけだぞ？ 嬉しくないのか？」

「う？」

みんなでお出かけ？ それも久しぶりだね。なら、いいかなあ……。

「よし、なら明日夜が明けたら行くからね。夜が明ける前に起こしに来るから、今日はもう寝なさい」

「うん！」

みんなでお出かけ。みんなでお出かけー。うふふ、楽しみだな。明日のためにも今日はしっかりと寝なくっちゃ。

テンションハイの状態でパタパタと羽を広げ、飛びながら寝るために部屋へ向かう私。このハイテンション状態で眠れるかな……。

ちなみに、この心配は杞憂だったりする。

そして翌朝。

「エーデルファイア、朝だよー。ほら、起きて、お出かけしようねー」

「やだー！ 行かないー！ 魔物なんていやー！」

寝てる間、寝る前にしっかりと思い出しちゃったよ、お出かけの目的！ 魔物なんて絶対にいやだ、魔物と遭遇するくらいならお留守番するー！

その意味を込めてしっかりと布団を掴むのだが、お兄ちゃんやお姉ちゃんの力を持ってすれば、それは最早意味なき足掻きだった。

「いいから起きようねー。お出かけお出かけ。ほら楽しみだねー」

棒読みで言われても説得力皆無だから！

「やーだー！ お留守番するー！」

「……どうしたの？ ほら、起きてエーデルファイア。それとも、具合が悪いの？」

「お留守番する、魔物いやだー！」

「あなたの初陣なのに、いなくてどうするの。ほら、起きなさいねー」

いーやーだー！ 無理やり剥ぎ取らないで、無理やり連れて行くとうとしないでー！

必死で足掻くのだが、やはりお母さんたちには力では勝てない。足掻いても勝てない。結果、無理やりお母さんに抱えられて起きることになった。

「どうしたんだ？ 遅かったな」

「ギリギリで駄々を捏ねたの、この子」

「ははっ。怖くないから大丈夫だぞ、お父さんたちが守るからな」

そう言われても怖いものは怖いの！ 今からでも逃げたいしね。

「うーん、エーデルフィアのこの怖がりには誰に似たんだろうな。俺も、エイシェリナも怖がりではないし、カーヴたちもそんなに怖がりじゃなかったしな。……ユフィーにでも似たか……？」

「ゆふいー？」

って誰？ 知らない名前。お父さん、それ、だあれ？

「ああ、ユフィーはお父さんの妹だ。本名はユフィネス。今は少し遠くの町に嫁いでいるから殆ど会わないな」

「ホント、カーヴが生まれたばかりの頃に会ったきりだから、もう何年会ってないのかな。結構会ってないし、今度会いに行く？ みんなで」

「それもいいな。確かに、久しぶりに会いたいな」

お父さんに妹いたのかー。そのユフィー？　さんもじいちゃんたちに扱かれたのかな？　むむ、聞いてみたいぞ。

でも、今日のお出かけはいやー！　魔物怖いもん！

「カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス。エーデルフィアをしっかり捕まえておいてね」

「やあー！　離せ、離してー！」

「こらこら、口が悪いよ。いい子だから大人しくなさい」

くうううう！　さすがにお兄ちゃんたちに力では敵わない。しっかりと掴まれた前足と羽は、私がいくら足掻いても全く反応を見せない。

離して、はーなーしーてー！　時折、前足を掴むその手をかぶかぶと噛んでみるのだが、それでも効果はない。甘噛みだからか！？　でも、思い切り噛んだらお兄ちゃんたち怪我しちゃうし……。

どうすれば離れてくれるのかな……。うとうと。朝起きるのが早くて、いつもより寝てないから眠たくなってきちゃったよ。ごめん、少し眠るね？

こうやって、寝たのが間違いだったと気づくのは目が覚めてすぐだったりする。

初陣です（前書き）

結構残酷な描写があります。
ご注意ください。

初陣です

初陣です、怖いです。

どうしてあの時寝てしまったのでしょうか、後悔するばかりです。

——今、私の目の前には大きな魔物があります。しかも複数体。

「うむ、ちょうどいい魔物^{バカ}がいるな。さあエーデルフィア、倒してしまおうか」

ちよ、お父さん！？ お父さんの中で魔物はバカと読むんですか！？
しかも、さらっと言われても無理だから！！

「ヤダ！ 怖い、帰るー！」

「……帰れるの？」

「ここがどこか、分かってる？」

「帰る途中で襲われたらどうするの？」

「ふえー！ お兄ちゃんたちのいじわるー！」

正論をさらっと言いまくるなー！ くそう、やってやる、やってやらー！！

「カーヴ、エーデルフィアと一緒にいて。お母さんたちはほかのをやっつけてくるから。エーデルフィア、何かあったらカーヴが守ってくれるけど、エーデルフィアが、この魔物を倒すんだからね？」

「うう……、が、頑張る！」

「大丈夫、この魔物は弱いから。落ち着いて魔術を使えば簡単に倒せちゃうよ」

でも、でもね？ この大きな魔物を目の前に、冷静に魔術を使えるかどうかって言うのが一番の問題だと思うんだ。今の時点でかなり怖いんだ。逃げたいんだ。

「おっと。ほら、早くしないと何回も襲われるよ？」

お兄ちゃんはそう言いながら私目掛けて飛びついてきた魔物を軽く風の魔術で引き剥がす。うう、怖い。

ちなみに、お父さんたちはこれ以外のほかの魔物の殲滅に励んでいるとのこと。どおりでさつきから爆発音とか悲鳴が……。

「んー、お父さんたちもやってるなー。あれだけやれとは言わないから、こいつだけは倒そうなー」

お兄ちゃんはニコニコと微笑みながら告げる。が、すぐに表情を消してまっすぐに私を見た。

「いいか、エーデルフィア。魔物は、敵だ。魔物を倒すことは、竜神として生きている俺たちの義務だ。人間に害を成す魔物を倒すから、俺たちは竜神として国に祀られる、人間と共存している。それが、長老たち、年寄りたちの意思だ」

「うん？」

「覚えておくんだ、エーデルフィア。これは、俺たちがやらなくてはならない、義務だ」

魔物を、倒さなくてはならない。自分たちが何かをされたわけじゃないのに、人間が安全に暮らして生きたいがために、私たちは魔物を屠らなくてはならない。

——自分たちのためではなく、人間たちが生きるために。

「ねえ、お兄ちゃん。何で、人間たちにそこまで尽くすの？」

「尽くしてなんかいないさ。ただ、俺たちが安全に生きるための契約だって、俺は長老に聞いてるよ」

「けいやく？」

「そう。人間と長老が昔、交わした約束だ。つまり、人間が俺たちドラゴンに手を出さない、ドラゴンが人間に手を出さないという約束だ」

つまり、互いに手を出さず、平和に過ごすための約束か。

そのために人間に課せられたものが、私たちの生活の保障。

私たちドラゴンに課せられたものが、人間の安全な生活のための魔物退治というわけか。

「考えないで。考えないほうが平和に生きていけるから」

「う……うん………」

「ほら、倒しに行こうか。エーデルファイアなら、燃やすのが一番簡単で効率的かな」

燃やす、かぁ。確かに私の場合はそれが一番やりやすいかな。

———ゴメン、魔物さん。今から燃やすね。命を、奪うね。

ぼうつという音と共に、目の前の魔物が燃え上がった。私の放った火の魔術が働いたのだ。

「よし、初陣完了。よく頑張ったね」

「うん………」

何か感情が追いつかない。生きるためだとは言えど、私は魔物の命を奪った。奪ってしまった。

私が、自分の意思で火の魔術を行使して命を奪ってしまった。

「よしよし、よく頑張った。甘えていいよ」

お兄ちゃんはそう言って私を抱きしめる。……うん、甘えさせて。いっぱい甘えさせて。罪悪感がヤバイから、もつと、もつと甘えさせて――。

ぎゅうっとお兄ちゃんに抱きつく。甘えるために、徹底的に抱きつく。

「おっと、まだいたのか」

「ふえ？」

まだいた？　って、お兄ちゃんの見ている方向を見ると、その魔物には穴が開いて、そこから血がぴゅーぴゅーと溢れていた。――グロテスク。

曰く、水を結集させて魔物に放ったとのこと。グロテスクなことをにっこり微笑みながら言わないで！

「さ、お父さんたちと合流しようか」

「うん」

魔物退治なんてもう二度と来なくていいよ。怖いからいいよ。今はとにかく甘えたい。

「おかーさん！」

「エーデルファイア！　よく頑張ったわ！」

お母さんたちと合流した瞬間に、私はカーヴお兄ちゃんの腕から抜け出してお母さんに飛びついた。

怖かったよう、怖かったよう。……私、命を奪っちゃったよ――。

「うん、怖かったね、怖かったよね。でも、竜神としての責務は……」

お母さんが何か言ってる。……でも、お母さんに抱かれている気持ちよさと、精神的、肉体的疲労に襲われてる私には聞こえないよ。だって、だってね？　もう、眠たいの……。

「いいよ、眠りなさい。疲れたんだろう、休みなさい」

お父さんがそう言いながら頭を撫でてくれる。気持ちいい、優しい――。

――おやすみなさい。

「……が、……………ア？　……………いい」

「しっ。……………らさわ……………な」

「んう……………？」

「ああ、起こしてしまったか、すまないエーデルファイア」

あれ？　お父さんとお母さん……………と誰？

「初めまして、エーデルファイア。私はユフィネス。あなたのお父さんの妹」

「あ、起きたのエーデルファイア？ 大丈夫？」

「おにーちゃん、おねーちゃん！」

「ユフィー、自己紹介したの？」

「したした。ティア、あんた、サーファのときと言うこと同じね」

「だって、ユフィーってそういうの面倒くさがりそうなんだもん」

「あーもう。じゃああんたたちの前でもう一回するから。エーデルフィア、私はユフィネス。あの子達みたいにユフィーって呼んでね」

「ゆふいー、さん？」

「ユフィー。さんはいらない」

……やっとな寝惚けてた頭が覚めて来た。つまり、この人が、このさん付けを拒むこの人がお父さんの妹で、私たちのおばさんということか。……お父さんたち曰く、怖がりの。

「あー！ 可愛い、可愛すぎる！ やっぱ子供っていいよねー」

「なら、カイルスともっと頑張れよ。頑張れば出来るだろ？」

「頑張ってるんだけど、生まれないんだよねー」

ユフィーはそう言いながら私を抱いて、撫でてを繰り返している。これを見ていると、本当に子供が好きなんだということは分かるのだが、ちよつと、干渉がきつくはないか？

あ、カイルスって言うのはユフィーの旦那さん、つまり、おじさんの名前らしいです。

「どうやったら義姉さんみたいにそんなに生めるの？ 私も子供欲しいー。ねー、カイルスう」

「おいおい、義兄さんの前でそんな甘えた目で見ないでくれよ……。抑えられないじゃないか」

！?!?!? カイルスさんは甘えた目で見つめてきたユフィーを押し倒した。見ない見ない。見てはいけない。こういうのは退室しなくては……。

「はい、おいでエーデルファイア。このバカ夫婦の邪魔は止めておこなうな」

「あー、ゴメンねー。しばらく二人っきりにしてねー」

ユフィーはニコニコと微笑みながら言い、それを見たお父さんたちは溜め息をつき、私を抱き上げてさっきの部屋から出る。そのあとにユフィーの甘い声が聞こえたのは、聞こえなかったことにした。……てか、ここはどこ？ 眠っている間に結構移動していたようだ。さっき魔物を退治した森が全く見えない。つまり、町も結構違うのか？

「とりあえず、夜まではあの二人は子作りに専念するだろうし、町を見に行くか。そうしよう、エーデルファイア？」

うん？ 決定権は私？ なら、決まってるじゃないですか。

………子作りという言葉は聞かなかったことにして。

「うん、行ってみたいー」

「よし、今日はみんないるから何があっても安全だからな」

「今日はエーデルファイアは頑張ったし、ご褒美に、欲しいのがあったら買ってあげましょう」

それは嬉しい！ でも、その言葉は否が応にも思い出してしまう、命を奪ったときのあの感覚を。

あの時、慣れた火の魔術は、そこまで強く念じなくても私の意思

を汲んでくれた。簡単に、あの魔物を燃やした。

そう、私は簡単にあの魔物の命を奪ってしまった、奪えてしまった。

簡単に、容易に命を奪うことが出来る。それが、私がもう人間ではないことを実感させた。

私は、ドラゴン。人間であつたのは遠い過去。

今の私は、人間なんかじゃない。考えを改めなくちゃいけない。

私は、ドラゴン。火の加護を受けた、真っ赤なドラゴンだ。

ドラゴンだから、魔術を使える。

ドラゴンだから、人間を守るために魔物を屠らなくてはならない。それが、遠い昔にドラゴンと人間がした、契約。

——契約は、破られてはならない。

「あー、これはダメだね。ユフィー、部屋貸してー」

「へ？」

「今日はもう町なんて行かないほうがいいでしょ。今日はみんなで一緒にいようね」

え？ 何で？ え？ ええ？

「エーデルファイアは優しいね。魔物にあんなに心を痛めることが出来る、いい子だね」

「本当だよ。どうして、そこまで心を痛めることが出来るのか、私は分かんない。私は、そこまで思えない」

「こればかりは、生まれ持ったものだろうな。確かにエーデルファイアは優しい。だが、その優しさがこの子を苦しめることもあるだろう

う。お父さんは、それを思うと一番辛い」

「お母さんもそう。優しすぎるの、この子は。魔物は敵、倒すべきモノ。それでいいのに、この子の中では違うから」

確かに、そういう認識が一番やりやすいんだろうね。でも、無理なんだ。どうしても、魔物も生きているのだからと、理性(?)が働いてしまう。

——殺すことを、躊躇ってしまうんだ。

本能は殺せと訴える。でも、私の中の心は、生きているのだから殺してはいけなないと訴えてくるんだ。

「だから、エーデルフィア。君はずっと俺たちと一緒にいよう。俺たちが守る、何があっても」

「守る。絶対に、私たちが守るから——」

「俺たちの可愛い妹。小さな小さな、最年少のドラゴン」

——君は、一生守ってあげる。守ってみせる。

——だから、一緒に生きていよう？ 離れないでいよう？

——失いたくない、なら、離さなければいい。だから、一緒にいよう。

——俺たちのエーデルフィア。君は一生、俺たちと共に——。

初陣です（後書き）

ここまで暗い話にするつもりはなかったんですが、ね

やっぱり命の尊さとかを考えさせるべきかと
考えていたらこんなに暗い話になりました

次からは明るめに、頑張ります！！

バカップルです(前書き)

最初の方は軽くR15……かもしれないです。

バカップルです

カイルスさんとユフイーはどう見てもバカップルですね。ラブラブですね、お熱いですね。

——さっきから、甘い声が聞こえてきているわけですよ、はい。

「んっ……カイル………」

「ユフイー、俺の、俺の愛するユフイー」

とまあ、部屋を借りたのはいいんだけど、さっきからこの調子で甘い声が聞こえる聞こえる。

だから、私はお母さんやお兄ちゃんたちに耳を塞がれているのが、それでもしっかり聞こえるドラゴンの耳に悪意を覚える。

「ユフイー、カイルス。少し声を抑えてくれると助かるんだがな？」

こっちには小さな子供エーデルファイアがいることを忘れちゃいけないか？」

「あー、うん。ちよつと、今は無理っす」

「んっ……、カイルス……、止めちゃイヤ………」

聞かない聞かない聞こえない。聞いちゃいけない、私にはまだ早い。エーデルファイア

でも、しっかり聞こえてしまう。普段はピンと立ててる耳をぺたんと寝かせ、その上からお母さんたちに押さえられていて尚、聞こえてきている。

「——ユフイー、カイルス。俺たちは出てる。これ以上はエーデルファイアの教育によくない」

「あんっ、ゴメっ……ね………」

「すみません、義兄さん。俺も、抑えられないので」

うん、出よう。お外行こう。この洞窟内は音が響いて危険すぎる！
今の私にはかなりきつい！！
ってか、どうして私のそばでそんな方向に突っ走るんですか！？
ユフィーー！！

「さて、何か欲しいものはないか？ 欲しいものがあつたら言いなさい。買ってあげるからな」

「う……うん……」

欲しいもの……、欲しいもの……。考えても考え付かない。なら、見て決めるべし！

「こ、これは……竜神様、ですよ？ ほかの町からいらしたので
すか？」

「ああ、この町には妹がいるからね」

「へえ、妹様が。どちらの町からお越しで？」

「デリアだ」

「デリア！？ 随分と遠くから……」

うん？ ここって私たちがいつもいる町からそんなに離れてるの？
？ 気になったのでお父さんに聞いてみる。

「ねーお父さん、ここって、そんなに遠くなの？」

「ん？ まあ、人間から考えれば遠く、だな。お父さんが飛べばそんなに時間はかからないよ」
「お父さん早いもんね」

うん、お父さんが飛ぶとすごい早いんだ、これが。お兄ちゃんの背に乗って飛んだり、自分で飛んでお出かけするのに慣れてると、お父さんに乗って移動は早いんだよね。

まあ、今回は気づかぬ間って言うか、寝てる間についてただけだね。

それは置いといて、とりあえず町回るー！ いっぱい見るー！！

「あ！ あれ何！？ あれ、デリアには無い！！」

「ん？ あー、あれはこの地の土産品だね。一つ買おうか」

「ああ、一つ買っていくか」

お父さんはそう言って店のほうへ向かい、一つ買ってきた。ってか、これ何なのさ。土産品って言っても、使用用途は？

見てて考えられる使用用途って、飾るくらい？

「おかーさん、あれ、何に使うの？」

「あれ？ 飾っておくと花のいいにおいがするの。あれ自体に花のにおいを浸み込ませてあってね、飾っておけばいいにおいがするの。

――人間には」

「私たちにはちょっとにおいがきついから、少しにおいを抜いてから使おうね」

うん？ 言われてみればここからでもにおいがするな。まあ、この距離ならまだ仄かなにおいって感じでいいかな。

でも、うん、近距離でこのにおいは鼻が痛い！ 咄嗟に鼻を押さええるのだが、やっぱりいやい！！

「一応、袋を二重にしてもらったんだがな」

「それでも十分きついわ。私も鼻が痛くなってきちゃう」

「だな。帰りに取りに来るか」

お父さんはそう言って持っていた袋を持って再び店のほうへと向かう。ああ、おいが離れただけで鼻がかなり楽になった。

しかし、人間ってホント、あんまり鼻がよくないんだね。あのにおいを至近距離で嗅いでいても鼻が痛くならないなんて。

うう、まだ鼻がいちやいよう……。鼻の奥においが残ってる感じ。

「さ、ほかに気になるものはないのか？　ないなら少し歩こうか」

言われてキョロキョロとあたりを見渡す。が、今のところ特になし。

私がお父さんに言うと、お父さんはにっこりと微笑み、そして歩き始めた。さてさて、何か面白そうなものはあるかな。

いやいや、小さな子供の探求心は恐ろしいね。あれ何ー？　あー、あれも何ー！？

そんな言葉を何度も何度も繰り返したよ。言ってる私も驚くほどに、いろんなものに興味を持ってしまったよ。

そして、お父さんたちはそんな私に一つずつ、丁寧に説明をしてくれた。ありがとー、大好き！

「お、菓子屋じゃないか。エーデルファイア、お菓子を買っていいとか、何が欲しい？」

「くつきー！！」

うん、この世界にもクッキーあるのよ、しかもサクサクして美味しいのが。昔、初めてお兄ちゃんたちと町に行ったときに買ってらって以来、クッキーは大好きなのだ。

「よしよし、ならクッキーを買おうな。この辺のクッキー、各種類いくつかずつ包んでくれ」

「畏まりました」

「オースティア、お前は欲しいものはないのか？　あるなら言いなさい、買おう」

「え、いいの？　やった。じゃ、その、そう、それぞれ」

「これだな。包んでくれ」

うわあ、買うお菓子がいっぱいになってるね。なら、ほかのも欲しいのあるんだけど抑えたほうがいいよね。我慢しよう。

だがそれを許してくれないのはお姉ちゃんたちだけではなく、お父さんたちも同じ模様。

「エーデルファイア、ほかは？　欲しいのがあったら遠慮せずに言いなさい」

まあ、お姉ちゃんたちと違うのは、強制してこないことかな。お姉ちゃんたちは強制だったからね、もっと買わないと町の人に八つ当たりに行くって堂々と言ってたからね。

まあとりあえず、ほかにもいいって言うのならば……………。

「あそこのパン菓子も欲しいー！」

ちなみに、パン菓子って言うのは日本で言えばラスクとかね？

この世界ではパンで作ったお菓子は全部パン菓子で、一つ一つに名前がないんだ。

つまり、ラスクもパン菓子、パンの耳を油で揚げて砂糖をかけて食べるのもパン菓子。

「んー、じゃあ、パン菓子も全種類いくつかずつ包んでくれ」
「畏まりました、ありがとうございます」

えへへ、クッキーとパン菓子、食べるのが楽しみだな、うふふふ。
ふ。

「エーデルフィア嬉しいそうだね。もっと欲しいのはないの？　今なら多分買ってくれるよ？」

「んー、これだけ買ってもらえたら十分だよー」

本当に嬉しいよ、幸せなんだー、ふふふふふ。

「じゃあ、後で取りに来るからそれまで預かっておいてくれ」

「畏まりました。お買い上げありがとうございます」

「よし、次だ次。次は何を見ようか」

「次は服を見に行こうよ。エーデルフィアが人態を取れるようになったときによさそうなのがあったら買おう？」

うん？　服？　私が人態を取れるようになったらって、まだ先じゃん。それに、洞窟^家にも結構買ってあるよね？

でも、それを聞いたお母さんは乗り気です。うん、大乗りしてら
ー。

「エーデルフィアには何色が似合うかしら。オースティア、どう思う？」

「うーん、どうだろう。エーデルフィアなら爽やかな感じの色合いとか合いそうだね」

うお、お母さんとお姉ちゃんの二人で私に似合いそうな服トークが始まっちゃったんだけど。

ううむ、私にはついていけないし、お父さんやお兄ちゃんにもついていけないようだ。

「おかーさん、おねーちゃん。私に服ってまだ早いよ」

「用意しておいてよくないことはないよ」

「だって、もういっぱい買ってあったじゃない」

「あれだけじゃ足りないでしょ」

「いやいや、もう十分だって。お母さんたち、どれだけ服を集めたがるのさ。」

「ねえエーデルフィア、あれは確かにまだ足りないと思うよ」

「まあ、俺たちもあれ以上に持つてるしな。エーデルフィアは女の子なんだから、俺たち以上にいるよな」

お兄ちゃんたちまで敵に！？ ……うん、まあ敵じゃないだろうけど。

「でも、今はまだ早いよー。うーん、そうだね、80歳くらいになったら欲しいかな」

「うー、まだ50くらいだし……、それでいいか。じゃあ、オースティアの服を見に行こうか。ふふ、いっぱい見立ててあげる」

「うん、ちょうど新しいの欲しかったんだー、ありがと」

よし、お母さんの気を逸らすことに成功したね。お姉ちゃんの服を言うと言った以上、これで私のほうに来ることはないだろう。

あー、でも私も服新しいの欲しいなー。最近どんどん大きくなってるから、前に買った服がサイズ合わないんだよね、特注なのに。いやいや、だって竜態だし？ 私くらいの年頃のドラゴンなんてほかにいないから、ドラゴン用の服は特注じゃないとないんだよね。

「くちっ」

考えてたら、何だか冷えてきたな……。むむ、何か服を持っ
て、着ておけばよかったかな…………。

「どうしたエーデルフィア？ 寒いのか？」

「んー、ちょっと冷えてきたかな…………」

「ふむ、少し気温も下がってきたみたいだな。何か温かいものを
買って飲むか？」

「うん！」

「なら、喫茶店でも行こう。これ以上外にいたらエーデルフィアが
また熱くなりそうだ」

うん、寒い。冷えてきてるもん…………。

「さ、エーデルフィアはおいで。お父さんに引っ付いてなさい」

そう思っていると、お父さんが抱き上げてくれる。反射的に私は
お父さんに引っ付いて暖を取った。…………あったけえ…………。

っていうか、これは温かすぎじゃない？ 気持ちよすぎるー。

「気持ちいいか？ 寒いならもう少し体温を上げるが」

「上げるの！？」

そんなこと出来るの！？

「お父さんは出来るな、お母さんは無理だが。お母さんは逆に体温
を下げる」

だから、エーデルフィアが小さい頃にすっごく熱くなったことがあっただろう？ そのときはお母さんが少しずつエーデルフィアの体温を下げてたんだよ。

うん、お父さんのその言葉に驚き。ああ、だから熱が下がるのがまあまあ早かったのか。

「うー、あったかー、ぬくー」

「おっと、喫茶店についたな。どうするエーデルフィア？ お父さんの膝の上にいるか？」

「……うん」

お父さんにこうやって甘えるの、久しぶりな感じだからそうしよう。……お兄ちゃんたちが悲しそうにしてるのは見なかったことにしようっと。

「この子にホットミルク、ほかは全員コーヒーで」

「はい、少々お待ちください！」

うー、ホットミルク。ぬくぬくー。体があったまるー。

……今日、疲れたけどいっぱい寝た、のにまた眠たくなってきたよ。まだ、子供だってことかな。でも、いいよね……。

「おや？ どうしたんだ？」

「ん……、眠い……の……」

「ははっ、いっぱい動いて疲れたんだろうな、また。眠ってなさい。エーデルフィアが眠っている間にユフィーの洞窟に戻っておくからな」

「うん。……ゴメンね、おやすみー」

体力がすごい勢いで削られたのかな……。おやすみ……。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8690x/>

まさかの転生物語

2011年12月2日21時46分発行